

鳴る翼で地の上へ下りて来る鳥のやうに、破裂弾が、少佐の馬の傍、公爵アンドレーエーから二歩位の所へ、鈍いツシンといふ音で落ちた。

馬は、恐怖を見せるのが、善いか悪いかといふ問題などには一向構はず、ヒインと鳴いて、少佐を跳ね落さんばかりにして、後へ跳り上つて、駆け去つた。馬の恐怖は兵等にも傳染つた。

『伏せ』と、副官は叫んで、自分の身體を甲板へ投げ倒した。

公爵アンドレーエーは、決し兼ねて、立つて居た。破裂弾は、牧場と畑の間の溝の中のウォーウッドの株の傍で、公爵と伏して居る副官との間で、煙ながら、獨樂のやうにクル〜廻つて居た。

『これが死だらうかなア?』と、公爵アンドレーエーは思ひ惑つて、全く今までに無い、悲しい感で、草を見、ウォーウッドを見、廻つて居る獨樂から巻き土がつて居る煙の糸を見て居た。

『俺は死ぬ無い、俺は死度く無い、俺はこの生命を愛する、俺はこの草、この土地、この空気を愛する……』

彼は、さう思つた、そして、尙それと同時に、人々が自分を見て居ることを忘れ無かつた。

『見苦しいぞ、副官殿』と、彼は副官に云つた、『何ういふ……』

彼は云ひ終ら無かつた。同時に、陶器の微塵になるやうな、物の裂ける、碎ける音と、息を止めるやうな煙が、パツと出た、そして、公爵アンドレーエーは、くる〜と廻つて、勿ね飛ばされ、隻腕をはね上げて、うつむけに倒れた。

五六人の將校等が、彼の傍へ駆け寄つた。血の大きい汚染が、彼の腹の右側から、草の上へ廣がつて居るのであつた。

民兵等が、將校等の後で、擔架を持つて立つて居た。公爵アンドレーエーは、顔を草の裡へ埋めて、うつむけに倒れて居た、彼は未だ、苦しきやうな、皺喰れた呼吸を爲て居た。

『おい、何んで待つてるんだ、来いよ』

農夫等は、傍へ行つて、彼の肩と脚を捉まへた、彼は、さも慄れな呻き聲を出した、で、農夫等は相互に顔を見合せて、再彼を下へ置いた。

『擔ぎ上ろ、擔架に入れろ、何方でも同なじなんだから』と、誰かが叫んだ。彼等は、肩を捉まへて、彼を持ち上げて、擔架に入れた。

『あ、やれ〜。やれ〜。何うしたんだ……腹だね。では、到底駄目だ……』あ、やれ〜』と、いふ言語が、將校等の間で、聞えた。

「僕の耳許を擦つて行つたせ」と、副官は云つて居た。
 農夫等は、肩へ擔架を擔いで、自分等が今まで踏んで来た路を辿つて、救護所へと急いだ。
 「歩を揃へろよ……おい……この農夫どもは」と、一人の將校が、彼等が、擔架をガタリガタリさせながら、ヒョリ／＼歩いて行くところを、彼等の肩を捉まへて、怒號つた。
 「歩を揃へろよ、フィオドル、おい」と、眞先の農夫が云つた。
 「さうだ、一等だぞ」と、一番後のが云つて、歩を揃へた。
 「閣下？。え、公爵？」と、駈け寄つて、擔架の上から覗き込んでティモフィンの振え聲が云つた。

公爵アンドレーは、眼を開けた、そして、擔架——彼の頭はその裡へ落ち込んで居た——から、さう言つた人を見た、で、再眼臉を閉ぢた。

民兵等は、運搬車と救護所の在つた森へ、公爵アンドレーを擔いで行つた。救護所は、白樺の森に張つた三つの天幕から成つて居た。森の裡には、負傷者運搬車と、馬が立つて居た。馬どもは、糧囊から燕麦を嚙んで居た、と、雀どもが、その傍へ飛んで来て、馬が落した穀粒

を拾つて居た。幾つかの鳥が、血を嗅ぎ付けて、白樺の間を、彼方此方と飛んで、遽然しく鳴いて居た。

天幕の周圍、五エーカー以上に亘つて、其所には、さまざまな服装の、血だらけになつた人が、坐つたり、臥たり、して居た。

彼等は、擔架に隨つて来た氣の銷沈つて居るらしい、凝乎と光景を見て居る兵卒等の群集に取り圍かれて居た。將校等は、秩序を保たうと爲て、その兵卒等をその場所から追ひ拂ひ追ひ拂ひ爲た、が、それは、無益であつた。兵卒等は、將校等には一向構はず、擔架に凭りかゝつて立つて、この光景のうちで或る難解な問題を解かうとするかのやうに、自分等の眼の前にある物を、凝乎と見詰めて居た。

天幕からは、高い、怒つた唸り聲や、慄れ氣な呻吟が、聞えて来た。時々、醫者の助手が、水を取りにとか、次に擔ぎ込まるべき者を指す爲めとかに、駈け出て来た。天幕の傍で、順番の來るのを待つて居た負傷者等は、皺腹れた唸り聲や、呻吟聲を出し、泣き、怒號り、罵り、又は、露西亞酒を乞ひ求めて居た。五六人は、狂氣のやうに讒語を云つて居た。

公爵アンドレーは、聯隊長として、未だ手術を受け無い負傷者の間を擔いで行かれて、天

幕の一つへ持つて行かれ、其所で、彼を擔いで行つた者どもは、命令を待つた。公爵アンドレエーは、眼を開けたで、長い間、自分の周囲で行なはれて居る事項が更に合點が行か無かつた。牧場だの、ウォームウッドだの、黒いぐるぐ／＼廻る球だの、人生に對する愛の熱烈な急中が、心の裡へ、返つて來た。

彼から二歩程の所に、背の高い、奇麗な、黒髪の軍曹が、頭を縛帯されて、樹の枝に凭り掛かつて、立つて居た。その軍曹は、頭と脚に負傷して居たが、大聲で話を爲て居て、衆皆の注意を引き附けて居た。負傷者や、擔架卒の一群が、彼の周囲に集まつて、一生懸命に彼の言語に聞き入つて居た。

『俺たちは、眞個に奴を擲き付けたんだせ、で、奴は何も彼も捨て、逃げちまやアがつたんだ、俺たちは、お前、王さへ捕虜にしちやつたんだ』と、軍曹は、熱病のあるやうにギラ／＼する黒い眼で、四邊を見廻して、怒號つて居た。『豫備軍さへ間に合つたらばな、お前、奴の生きてた印は斷片一つだつて残るんぢやア無かつたんだ、何だつて、夫やア、全くのところ……』公爵アンドレエーは、話者の周圍に立つて居た人々の總てと同なじやうに、その軍曹を輝いた眼で見詰めて、そして、慰安の感を覺えた。『だが、最早何うでも宜いことでは無いか?』と、

彼は思つた。『彼の世に何ういふことがあるのだらう、此の世に何があつたのか?。何故、俺は生命を失うのが可厭なのか?。この世には、俺には、前にも解ら無かつたし、今も依然解ら無い事柄があつたのだ』

(三十七)

醫者の一人が、血だらけの胸當と、小さい、血だらけの手で、天幕から出て來たが、彼は、片方の手に、葉巻を、それも血に染んで了まは無いやうにと、親指と小指とでさも大切さうに抓んで居た。この醫者は、頭を擧げて、四邊を見廻した、が、それは、負傷者の列を越してであつた。彼は、少時休息し度いのであつたらしかつた。少時の間頭を右方から左方へと振り向けてから、再眼を下げた。

『宜しい、今直ぐ』と、彼は、公爵アンドレエーを指ざした助手に答へて云つた、そして、擔架卒に彼を天幕の裡へ擔ぎ込ませた。

泣き聲が、待つて居る負傷者の群集から起つた。

『彼の世でも、旨いことのあるのは、依然旦那衆だらうせ』と、一人が云つた。

公爵アンドレーは擔ぎ込まれた、そして、今の先、助手が、掃除して、洗つたばかりの卓子の上に置かれた。公爵は、天幕の裡に何ういふものがあつたのか、瞭乎とは見ることが能き無かつた。八方でする怒れ氣な唸聲と、自分の腰や、腹や、背部での抉ぐるやうな苦痛とが、彼の注意を攪き亂した。彼が自分の周囲で見た有らゆる物が、彼の眼には、裸の、血だらけな、人間の肉の唯だ一つの概括的印象に溶け込んで居た、そして、さういふ人間の肉が、低く張つた天幕全體に充満して居るやうに見えた状態は、丁度、數週間前に、彼の暑い八月の日に、裸の人間の肉が、スモレンスク海道路傍の、汚い池に充満して居たのと同じであつた。左様、それは同なじ肉、同なじ大砲の餌肉であつて、それを見ると、公爵アンドレーの心には、慄然とした恐怖の感が生じたのであつたが、その感が、今彼が感じる心持を、豫告したもの、やうに思はれたのであつた。

天幕の裡には、卓子が三脚あつた。二個は塞がつて居た、第三のものへ、人々は、公爵アンドレーを置いた。少時の間、彼は、他の二個の卓子でやられて居る事柄の、我からでは無い實見者として置いて置かれた。一番近い卓子の上に、一人の鞆鞆人が坐つて居たが、それは、その直ぐ傍に投げ落してあつた制服で見るといふと、何うも哥薩克聯隊の兵らしかつた。四人

の兵卒が彼を捉まへて居た。眼鏡を掛けた醫者が、彼の蒼色の、筋骨の逞しい背部で、何か切斷て居た。

『ううん。ううん。ううん……』と、鞆鞆人は、宛然、豚の唸るやうな聲を出した、そして、不意に横平つたい、赤白い、日に焦けた顔を振り擧げ、白い齒を露出して、腕き、ピン／＼し始めて、甚い金切り聲の、長い、叫聲を出した。

今一つの卓子——その周囲には幾人かの人々が立つて居た——には、大きい、肥つた男が、頭を後反せて、仰向に臥て居た。その髪の色や、縮れ方や、その姿形が、公爵アンドレーには奇異に見慣れたものであつた。

五六人の助手が、その男を捉まへてその胸を上から推し伏せて居た。白い、肉付の良い、一本の脚が、絶えず、速い、痙攣的な、ピク／＼した風で、動いて居た。この男は、身悶えをして、泣いたり、息をつまらせたりして居た。二人の醫者——一人は、顔が蒼くなつて振えて居た——が、黙つて、その男の今一つの、血だらけの脚を何うにかして居た。

鞆鞆人の方を了まつて、その上へ外套が掛けられるといふと、眼鏡の醫者は、手を拭きながら、公爵アンドレーのところへ來た。

彼は、公爵アンドレーの顔を、ジロリと見て、急いで、彼方へ向いて。「衣服を脱がせろ。何故ぐずつて居るんだい？」と、彼は、助手を甚く怒號り付けた。

助手が、袖をたくし上げて、急いで公爵アンドレーの扣鈕を外し、彼の衣服を脱せた時に、極く小さい、極く往時の小児の時分のこと、公爵アンドレーの心へ戻つて来た。醫者は、傷のところへ顔を近く持つて来て、それに觸つて見て、深い溜息を吐いた。それから、彼は、誰かに向つて暗號を爲した。

それから、腹の裡の扶ぐるやうな苦痛が、公爵アンドレーに知覺を失はせた。

彼が知覺を恢復した時には、彼の腰骨の折れ肩は取り去られ、醬のやうになつた肉の断片は斷り去られて、傷は繃帯されて了まつて居た。

水が、彼の顔へ振り注げられた。公爵アンドレーが、眼を開くや否や、醫者は、彼の上面へ顔を下げて、何にも云はずに、彼の唇に接吻し、そして、急いで去つて了まつた。

苦痛が、全く無くなつて了まうといふと、公爵アンドレーは、彼が最早長いこと覺えたことの無かつたやうな幸福な平和を感じた。

彼の生涯の一番良い、一番幸福な刹那、殊に、彼の極く小さい小児の時分の、衣服を脱せら

れて、寢床へ入れられた時や、彼の乳母が兒守り歌を誦つて寝かし付けて呉れた時や、彼が枕へ頭を埋めて、生きて居るといふ知覺のみで幸福に感じた時などのことが、過去のことどころか、宛然今現在のことでもあるかのやうに、彼の想像の前へ、立ち上つて来たのであつた。

醫者たちは、その頭が公爵アンドレーには何と無く見慣れたもの、やうに思はれ負傷者に、一生懸命に掛つて居た、彼等は、その男を抱きあげて、慰めやうと爲して居た。

「見せてください……ううう。お。ううう」といふ、その男の、嘔り泣きが間に挟まる、恐れた、見苦しく苦しんで居る呻吟が、公爵アンドレーに聞えた。

その男の呻吟を聞くと、公爵アンドレーは泣き度くなつた。自分が、光榮無しに斯ういふ風に死んで行くのであつた爲めなのか、或は、生命を失うのが可厭であつた爲めなのか、或は決して再び歸つて來ない小児の時分の記憶の爲めなのか、或は、自分が苦痛の裡にあつた爲めなのか、或は、他の人々が堪へて居るのに、その男がそれ程慄れ氣に呻いて居た爲めなのか、公爵アンドレーは、幼兒のやうな、善い、殆ど幸福な涙を泣き度かつたのであつた。

人々は、切斷された、靴のまゝの、全體に乾いた血のこびり付いて居る脚を、その負傷者に見せた。

「お、おとお」と、彼は女のやうに嘔り泣いた。彼の傍に立つて居た醫者は、彼の顔へ物を被せて置いて、外へ去つて了まつた。

「やア。これは何うだ。何うして、彼の男が此所に居るんだらう？」と、公爵アンドレーは怪しんだ。

脚を今断られたばかりの、その慄れな、嘔り泣いて居る、見苦しい男に於て、公爵アンドレーは、アナトオル・クラアギンを認めたのであつた。人々が、抱き上げて、水の杯をさし付けて居るのだが、その振へる、膨れ上つた唇ではその杯の縁へ唇を付けて居ることの能き無いその男が、アナトオルであつたのだ。アナトオルは、嘔り泣く、ハア／＼いふ苦しうな呼吸使ひであつた。

「左様だ、彼の男だ、左様だ、彼の男は、何うにかいふ譯で、俺と、密接に、苦しい關係があるんだつたな」と、公爵アンドレーは、自分の前にある事柄には未だ十分合點が行かすに思つた。「彼の男と、俺の幼兒の時分や、俺の生涯との間に、何様な關係があるのかな？」と、彼は、端緒を見出し得無いで、自ら問うた。と、不意に、純潔と愛のその小兒のやうな世からの新な、思ひ掛の無かつた記憶が、公爵アンドレーの前へ起つて来た。彼は、自分が千八百

十年に初めて舞踏會でナタアシャを見た時の、ナタアシャの、細そりした頸と、細そりした腕で、歡喜的な享樂に直ぐ没入しやうとして居るやうな、オド／＼した、嬉しさうな顔付をして居た姿を、憶ひ出した、と共に、ナタアシャに對する戀と愛情が、今までよりも尙一層強く、尙一層懐かしく、公爵アンドレーの心の裡へ、覺ざめて来た。彼は、今、膨れ上つた眼に満ちて居る涙の間から自分を愕然と見て居るこの男と、自分との間に存在して居た縁由を憶ひ出した。公爵アンドレーは、何も彼も憶ひ出した、そして、その苦しんで居る男に對する熱烈な憐愍と愛が、自分の幸福な心に満ちた。

公爵アンドレーは、最早堪へ切れ無かつた、で、同人類に對し、自分に對し、彼等の間違、自分自身の間違に對する涙を流した。

「吾々の同胞に對する、吾々を愛して呉れる人々に對する、同情、愛、吾々を憎む人々に對する愛、吾々の敵に對する愛、左様だ、神が地上で説き給ふた愛、それをマリイが俺に教へやうと爲て居たんだ、俺には今まで解から無かつたんだが、それが、俺が生命を失うのを悲む理由なんだ、俺が生きてれば、俺が爲すべきことは、それより外には無いんだ。が、最早何うしたつて追つ付かん。俺にはそれが分つて居る」

(三十八)

死者や負傷者の倒れ重なった戦場の戦慄すべき光景が、ナポレオンの頭の重いことや、彼が熱く知つて居た二十人ほどの將軍が死傷者の中に入つて居るといふ報知や、これ迄は強大であつた彼の軍の無効力であることに、加はつて、何時もは、それが自分の不撓の精神を證明するものだと思像して、死者や負傷者を見渡すことが好きであつたナポレオンに、意外な印象を與へた。

その日は、戦場の恐しい光景が、彼が、偉大といふことの効能と證據だと見做して居たこの不撓の精神なるものを、壓倒してしまつた。彼は、急いで、戦場を去つて、シエヴァアルディノへ歸つた。黄色い、膨れた、氣の銷沈つた顔で、曇りした眼で、赤い鼻で、皺喰れた聲で、彼は、陣用椅子に坐つて、丘の下の方を見て、我知らず、砲火の音に聞き入つて居た。

弱々しい不安で、彼は、自分には最早止めることは能き無いに拘らず、自分がその主動者だと思つて居るこの戦闘の終るのを待つて居た。個人的な、人間らしい情緒が、一寸の間、彼が随分長く奉仕して居た人生の巧的な幻影に、勝を得た。彼は、自分が戦場で見た苦痛や死が、あつたらう？。唯だ彼が今欲かつた一つの物は、静息、安静、及び自由であつた。

が、彼が、セミオノフスコエの高地に居た時に、砲兵の司令を掌とつて居る將校が、コニヤズコツアの前面の露西亞人に對する砲火を増す爲めに、數隊の砲兵をその高地へ持つて來ては、何うだらうと、ナポレオンに申し出た。ナポレオンは、承知して、その砲兵陣地の奏功の度合を報告して來るやうにといふ命令を出した。

副官が、皇帝の命令の通り、二百門の砲が露西亞人へ向られたのだが、彼等は、依然陣地を守つて居ると、云ひに來た。

「我軍の砲火は、敵を將棋倒しに致して居ります、けれども、奴等は、頑として、退きません」と、副官が云つた。

「奴等は、まだもつと欲しいといふのか」と、ナポレオンは皺喰れた聲で、云つた。

「陛下？」と、その言語を聞き取り得無かつた副官が繰り返へした。

「奴等は、まだもつと欲しいといふのか」と、ナポレオンは、皺喰れた濁み聲で、怒號つて、顔を擧げた。「宜し、では、もつと遣つてやれ」

既に、彼からの命令を待たずに、彼が爲せやうとも思つて居無かつた事柄が、爲されつゝあつた、で、彼は、唯だ命令が彼から出ることが期待されて居るのだと思つた故のみで、さう爲ろといふ命令を出したに過ぎ無かつた。そこで、彼は、再、或る虚の偉大の幻影の住まつて居る彼の元の人巧的な世界へと、戻つて行つた、そして、再（ぐる／＼廻つて居る輪に伴れて走つて居る馬が、自分から駆けて居るやうに想像することがあるやうに）彼は、彼が爲すべく運命づけられて居た残酷な、陰氣な、面倒な、人道に逆つた役割を、従順に勤めることに立ち戻つたのであつた。

その時爲されつゝあつた總てのこの重荷が、その事件に與かつて居た他の有らゆる人々の上よりも、彼の上へ一番重く掛かつて居たこの人が心も良心も更に暗くなら無かつたのは、單にその時間、その時ばかりでは無かつた。彼の生涯の終末に至るまで、彼は、一度も、善とか、美とか、眞理とか、それから、彼がその意義を掴まんには餘りに眞理と善に反し過ぎて居る、人間的な有らゆる物から餘りに離れ過ぎて居た彼自身の行爲の意義などの、最少量の領會さへ持

つたことは無かつた。彼は、世界の半分までに因つて賞め上げられた自分自身の行爲を非認することは能き無かつた、で、彼は、眞理や、善や、人間的な有らゆる物を非認した。

屍や、残害された人々の、倒れ重なつて居る（それは、自分の意志から生じたものだと、彼は想像して居た）戦場を乗り廻りながら、さういふ死者や負傷者を眺めて、一人の佛蘭西人に對して幾人の露西亞人が倒れて居る割になつて居るか、勘定して、佛蘭西一人に對して露西亞五人だと信じて、喜びの材料を見出すやうに、彼が自分自身を欺いたのは、單にその日のみでは無かつた。戦場に五萬の屍體があつたが故に、「戦場は壯觀であつた」と、巴里へ彼が書いて遣つたのは、單にその日のみでは無かつた。聖ヘレナに於てすら、自分が爲た偉大な功業の記述に、自分の閑時をこと／＼用ふ積りだと彼が云つたその安靜な獨居に於てさへ、彼は、斯う書いて居る――

「露西亞戦争は、近代の最も人氣ある戦争であるべきであつた、それは、良い考慮の、眞の利害の戦争、總ての物の安靜と、安全との爲めの戦争であつた、それは、全く平和的な、保守的なものであつたのだ。」

それは、大いなる主義、即ち、不安定の終末、安定の始まりの爲めの戦争であつた。總ての人々に取つての安寧と、繁榮で飽くまで満ちた新天地、新事業が、開展しつゝあつたのだ。歐羅巴の國際組織が立てられた、唯だその後は、それを組み立てさへすれば宜いのであつた。

さういふ大いなる諸點と、有ゆる場所の平和で、満足させられて、予も又、予の國際會議、予の聖同盟を、持つことが能きるのであつた。さういふ計畫は皆予の考案を盗んだものであつた。大帝王等のさういふ會議に於て、予等は、一家族のやうになつて、吾々相互の利害を討究し、番頭と主人とのやうに、各國の人民と交渉することが能き筈であつたのだ。

歐羅巴は、直きに、さういふ風で、實際唯だ一つの人民となり、そして、歐羅巴を旅する誰でもは、何處へ行つても、何時でも共通な祖國の裡に自身を見出すといふことになるべき筈であつた。さうなれば、予は、有らゆる河を、總ての人々の航行の爲めに、開かせることにし、何處の海をも總ての人々の共有にし、それから、今日のやうな大常備軍を、其後は、唯だ諸帝王の親衛兵だけに、減じさせるのであつた。

佛蘭西、即ち、大いなる、強き、壯麗なる、平穩なる、光榮ある祖國の胸に歸つて、予は、その國境は決して變へるべからざるものと、宣言し、總ての將來の戦争は全然防衛的のもの

であるべく、總ての新たな侵害は、非國民的なものだ、と、宣言する筈であつた。予は、予の息子を帝國に加はらしめやうと思つて居た、予の執政たることは、それで終つて、彼の立憲的治世が始まる譯であつたのだ……

巴里は、世界の首都になつて、佛蘭西人が、諸國民の代表者になる筈であつた……

その時の、予の関時及び予の老年は、皇后と一緒に、予の息子の王としての稽古中、全くの田舎者の夫婦のやうに、予等自身の馬で以つて、帝國の有らゆる隅を、ゆる／＼と訪問して、上訴を受け取り、害を正し、八方へ記念物や、恩恵を撒き布らすことに、委ねらるべき筈であつたのだ』

諸國民の刑手たる、陰氣な、奴隸的な役割を勤めるやうに、神の爲めに運命づけられて居た彼が、自分の行爲の動機は、諸國民の安寧を來たさうといふのであつて、彼は、何百萬とも知れぬ人々の運命を制御することが能き、自分の權力を振うことに因つて、それ等の人々の繁榮を來たすことが能きものと、思つて居た。

「ヴィスツウラ河を越えた四十萬の兵のうちで」と、彼は、後になつて、露西亞戦争の事を書いて、『その半分は埃地利人、普魯西人、索遜人、波蘭人、バヴリア人、ウルテンベルヒ人、メクレンベルヒ人、西班牙人、伊太利人、ナポリ人であつた。實際さう呼んで然るべきであつた皇軍は、その三分の一が、和蘭人、白耳義人、フィンランドの住民、ビエモンド人、瑞西人、ゼネヴァ人、タスカニイ人、羅馬人、第三十二軍管區の住民、ブレエメン、ハムブルヒの住民から成り立つて居た。それは、佛蘭西語を話す殆ど十四萬の人数に上つて居た。露西亞の遠征では、佛蘭西一國だけの損害は五萬人までには上ら無かつた。露西亞軍は、ヴィルナから莫斯科までの退却に於て、さまざまの戦に於て、佛蘭西軍に四倍するだけの損失を失つた。莫斯科の火災に於て、森の裡で、凍えたり、飢たりして死んだ露西亞側の損害は十四萬人であつた、それから、最後に莫斯科からオデル川までの行進に於て、露西亞軍は又、季節の酷烈な爲めに苦しんだ、それは、ヴィルナに達した時には僅に五萬といふ數に過ぎず、カリッシンでは、一萬八千以下であつた』

ナポレオンは、露西亞との戦争が全然自分の意志の結果であつたと想像したが、それで居て爲された事柄の戦慄すべきことが、彼の心に何の印象をも與へ無かつたのだ。彼は、大膽にもそのこと全體の全責任を自ら負つた、そして、彼の暗んだ智力は、死んだ何十萬といふ人々のうちで、ヘッス人や、バヴリア人よりも、佛蘭西人が少かつたといふ事實のうちに、自分の云ひ分を見出したのであつた。

(三十九)

何萬かの人々が、ダヴィドフ家や、皇室の隷農の、持地であつた畑や牧場の上に、さまざまの姿勢や、制服で倒れて居たが、さういふ畑や牧場では、數百年の間、ポロディノオや、ゴオルキイや、シエヴァアルディノや、セミョオノフスコエの農夫等が、彼等の收穫を取り納れ、彼等の家畜を飼ひ來つたのであつた。

各救護所では、その周圍二エーカーの間の草と地が、血で浸された。さまざまの武裝の、傷いた、或は、傷を負は無い、人々の群集が、周章狼狽した顔付で、一方では、モザイスクへ、他の一方では、ジャルウエフへと、やう／＼と辿つて行つた。慥れ切つた、飢えた他の群集は、彼等の將校等に因つて、前方へと率ゐられて居た。尙他の者等は、未だ彼等の陣地に踏み止まつて、發火を續けて居た。

最初は、朝の日光の裡で、キラ／＼する銃剣や、バツ／＼と出る煙が見えて、彼様に麗らかなで、華やかであつた平原全體の上に、今は、濕つた霧や、煙の暗い雲がかぶさつて、硝石と血の、奇異な酸ばいやうな臭氣が漂つて居た。

暴風雲が集まつた、そして、霏雨が、死者や、負傷者や、周章狼狽した、慥れ切つた、そして躊躇して居る兵卒等の上に落ちた。その雨は、最早十分だ、十分だ、止める……考へて見ろ。お前たちの爲て居るのは何ういふことなのか？」と、云ふやうに見えた。

食及び休息の缺乏の爲めに雙方同様に慥れ切つて居た兩軍の人々には、自分等は、尙その上相互を屠殺し合ふことを續けて行つたものだらうか、何うだらうかといふ疑念が起つて来た、そして、誰の顔にも躊躇が見られ得た、誰の心にも同なじやうに、斯ういふ疑問が生じて来た、

「何の爲めに、誰の爲めに、俺は殺したり、殺されたりするのか？。お前たちは誰でも殺せ、お前たちは爲度いことを爲ろ、が、俺は最早澤山だ」

この考想が、夕方になると、誰の心にも同なじやうに、形を爲して来た。何時何時、それ等の人々は、自分等の爲つゝあつた事柄に戰慄して、何も彼も投げ捨て、何處へでも、逃げてしまはうかも知れ無いといふ態になつた。

が、戦の終末頃には、人々は、自分等の所業の實に戰慄すべき恐ろしさを十分に感じたのであつたが、それから、誰かが止めると云へば彼等は喜んで止めるのではあつたが、それでも、何とも知れぬ、或る測り難い、不可思議な力が、依然彼等を前方へ導いた、そして、砲兵——元の三分の一だけが生き残つて居た——は、汗みづくになり、煙硝や血にまみれ、疲憊で喘ぎながら、尙且砲彈硝薬を持つて来て、装め、覗らひ、そして、火繩を點けた、で、砲彈は、雙方から前と同じに速く残酷に飛んで、人間の肉を粉塵し、そして、人間の意志では無く、人間及び宇宙を支配する神の意志で、爲されるのであつたその恐ろしい働を續けて居た。

露西亞軍の後衛に於ける混亂を見た人は誰でも、佛蘭西軍がもう一寸との努力を爲さへしたら、露西亞軍は全滅するのであつたと、云つたらう、それと共に、佛蘭西軍の後衛に於ける混亂を見た人は誰でも、露西亞軍がもう一寸との努力を爲さへしたら、佛蘭西軍は覆滅されるのであつたのだと、云つたらう。が、佛蘭西軍も、露西亞軍も、さういふ努力を爲無かつた、そして、戦の焔は、徐々に燃え盡きて了まつた。

露西亞人は佛蘭西人を攻撃して居るのでは無かつたのだから、この努力を爲無かつたのだ。

戦の初期には、彼等は誰だ莫斯科への路に立つて、佛蘭西軍の通り路を塞いだに過ぎ無かつた、で、彼等は、戦の終末に於ても、依然初期と同じやうに立つて居た。けれども、若し、露西亞軍にして、佛蘭西軍を撃退する目的であつたとしたところで、彼等は、この最後の努力を爲ることは能き無かつたのだ、何故だといふと、露西亞軍の諸隊が悉く破られて居たからであつた、戦の中で大損害を受け無かつた隊は一つも無かつた、そして、露西亞軍は、その陣地から追ひ出されずに、軍の半分を失つたのであつた。

十五年間何處でも得て来た勝利の記憶のある佛蘭西人、ナポレオンの何物をも征服せざる無き天才に信頼して居る佛蘭西人、戦場の一部を陥れたといふ知覺を持つて居る佛蘭西人、自分等の兵の四分一を失つたに過ぎ無いで、未だ二萬の一團——親兵は其儘そつくりして居る——を持つて居るといふ知覺のある佛蘭西人に取つては、この努力を爲るのは容易なことであつたらう。その陣地から追ひ拂はうといふ目的で露西亞軍を攻撃して居た佛蘭西軍はこの努力を爲すべき筈であつた、何故だといふと、露西亞人が戦の前のやうに依然莫斯科への路を塞いで居る限りは、佛蘭西軍の目的は達せられず、總ての損失と努力が無効に歸するからであつたのだ。が、佛蘭西軍はその努力を爲無かつた。

或る歴史家たちは、若し、ナポレオンが彼の古親兵を進撃させさへしたのであつたら、戦は勝になつたのであつたのだと主張して居る。ナポレオンが、彼の親兵を進撃させたのであつたら、斯うなつたらうとか、彼様なつたらうとか、云ふのは、秋に春が來たらば、何うなつたらうとか、斯うなつたらうとか、云ふのと、同一筆法の説なのだ。

左様なことは、有り得べき筈のことでは無いのだ。

ナポレオンがさう爲無かつたのは、彼がさう爲やうと思は無かつたからなので無く、さうすることが何うしても能き無かつたからなのだ。佛蘭西軍の、總ての將官、將校、兵卒が、軍の銷沈した意氣がさうすることを容るさ無かつたので、この最後の努力を爲ることは到底不可能だといふことを知つて居た。

強大なる腕が、力を失ふまでに打たれて了まつたといふ悪夢のやうな感を持つたのは、單りナポレオンのみでは無かつた、佛蘭西軍の總ての將官、兵卒、戦つた人々も、戦は無かつた人々も、前々の諸戦（今の努力の十分一で何時でも敵が敗走したのだ）の經驗があるのだから軍の半分を失ひながら、戦の終末に於ても、その初期と、同じ不撓な精神で、依然その陣地に踏み止まつて居るこの敵に對しては、慄然たる恐怖の感を表はしたのであつた。

攻撃軍たる佛蘭西軍の精神力は、盡きて了まつたのだ。軍旗と稱する、棒の端へ附着けた襪とが、軍隊が立つて居た地面を、取ることで表はさるるやうな勝利では無く、精神的勝利、即ち敵をして、對手かたの精神上の優越と、自分の方の無能力を認めざるを得ざらしめるやうな勝利を、露西亞人は、ポロディノオで得たのだ。佛蘭西の侵入軍は、突進の際に致命傷を受けた猛獣のやうに、自分の最期の近いのを感じた。が、それは、露西亞軍——その力が半分に減じて居た——が、退却せざるを得無かつたのと、全く同なじ譯で、止まることは能き無かつた。その妨碍後も、佛蘭西軍は、依然無理やりに莫斯科へ行くことは能きたが、其所では、露西亞軍の方からの新たな努力無しでも、その覆滅は避け難かつたのだ、それは、生命の血がポロディノオで與へられた致命傷から流れ去つたからであつたのだ。

ポロディノオの戦の直接の結果はナポレオンの、莫斯科からの原因無き逃遁、彼のスモレエンスク海道に因つての歸國、五十萬人の侵入軍の滅亡、ナポレオンの治世の覆没——それに對しては、ポロディノオで始めて、ナポレオンより強い精神の敵の手が着けられた——であつた。

第三章

(一)

人間の心に取つては、運動の絶對的連續といふことは、何うしても飲み込め無いことである。何ういふ種類の運動の法則も、唯だ、任意に選んだその運動の各單位を考査する時のみ、人には領會し得らるゝものとなるのだ。けれども、それと同時に、人間の錯誤の澤山が生ずるのは連續的の運動をば、さういふ風に不連續的の單位に專擅的に分割することからなのである。吾々は、誰も、アキレスが、龜の子の十倍の速度で歩くのだが、決して龜の子に追ひ付き得無いといふ古代人の所謂の詭辯なるものを知つて居る。アキレスが、彼を龜の子から離れさせて居る空間を過ぎるや否や、龜の子は、その空間の十分の一を進んで居る、アキレスがその十分の一を過ぎると、龜の子は百分の一を進んで居る、で、さういふ風に、何處までも行くのだ。この問題は、古代人には、解き難きものであつた。この決論（アキレスは決して龜の子に追ひ付けぬといふ）の不合理は、アキレスの運動も、龜の子の運動も、兩方とも連續的なもので

あつたのに、運動の不連続的單位を勝手に定めて了まつたことから生ずるのだ。

運動の單位をだん／＼少く爲て行くことに因つて、我々は、この問題の解決に近づきはするが、決して、その解決に達しはし無い。無限に小さい大きさと、それよりして十分の一まで上つて行く級數を、假定し、そして、その幾何級數の總計を取ることによつてのみ、吾々は、この問題の解決に達することが能るのである。無限に小さい量を取り扱かう數學の新分科が今では、これまでは解き難く見えた諸問題の數學的解決の他のもつと複雑な諸問題を提出するのだ。

古代人の知ら無かつた數學のこの新分科は、無限に小さい量、即ち、運動の主條件（絶對の連續を）動か無いものにするやうな量を、假定することに因つて、人間の智力が、連續的運動を考へはせずに、運動の不連続的單位を考へる場合には、何うしても陥らざるを得無い避け難い錯誤を正すのである。

史的運動の法則の探究に於ても、丁度それと同じ錯誤が生ずる。

さまざま個人意志の無數の集合から生ずる人類の進行は、その運動に於ては、連續的なものである。

この運動の法則を發見するのが、史學の目的である。

所が、これ等總ての個人意志の總計に基づく連續的運動の法則に達する爲めに、人間の心は專斷的な、結合して居無い幾つもの單位を假定する。歴史家の第一のやり方は、實際上は、何様な事件にも始原といふものは有りはせず、又、有り得べきものでも無くして、一事件は他の事件から更に中斷無く流れ續くものであるのに、さういふ事件をば、他の諸事件から引離して、考査せんが爲めに、連續した諸事件をば、專斷的に配列させて取ることなのだ。

第二のやり方は、さまざま個人意志の總計は決して一人の史的人物の行爲に表はれるものではないのに、さういふ一人の行爲が、さまざま個人意志の總計と等しいものでありでもするかのやうに、一人の人、一人の君主、一人の將帥の行爲を考査することなのだ。

史學は、それが進むに従つて、始終、だん／＼小さい單位を取つて解析しやうとする、そして、さういふ風で、眞理に極く近い所へ達しやうと努める。けれども、何れ程小さい單位を史學が捉へやうが、他の單位と少しも結合し無い單位の假定や、何ういふ現象にも始原があると云ふ假定や、何様な人々ものさまざま個人意志が唯だ一人の史的人物の行爲に表はれるといふ假定は、それ等自體に於て、過りであると、吾々は感ずる。

史學の有らゆる結論は、批評家の方に於ての寸毫の努力も無くして、單に、解析の對象として歴史家が選んだものより大きいか小さいかの單位を選んだ批評に因つて、塵埃のやうに散らされて、痕跡も止め無くなるのだ、といふのは、史學上の單位は、何時でも、專斷的に勝手に選ばれるものなのであるから、批評家の方でも、歴史家と違つた何様な單位を選ばうとも、それは批評家の權内に全然屬することであるからなのだ。

觀察の對象として、無限少の單位——史學上の微分——即ち、人間の同種の諸傾向を、取つて、積分（即ち、それ等の無限少の量の總計を取ることに達することに因つてのみ、吾々は、歴史の法則に達し得るといふ希望を持ち得るのである。

十九世紀の最初の十五年は、何百萬といふ人々の非常な運動の光景を現はして居る。人々は、彼等の平常の爲事を捨て、歐羅巴の一端から他端へと突進し、掠奪し、屠殺し合ひ、凱歌を奏し、或は、絶望した、そして、人生の全潮流が、全く變はつて、速められた活動を現し、それが、最初のうちは次第に速度を増して行つたが、やがて再徐々と靜になつて了まつた。

「その活動の原因は何か、又、何ういふ法則からそれが起つたのであるか？」と、人間の智

力は、問ふのである。

歴史家等は、その問に對する答として、巴里の市の或る建物の裡での何十人かの人々の言語や所業を、吾々の前に置いて、さういふ言語や所業をば一語——革命といふ——で、總計する。其所で彼等は、ナポレオンの詳傳や、彼の味方とか敵とかであつた或る人々の詳傳を、吾々に與へ、さういふ人々が他の人々に及ぼす勢力を語り、それから、その活動の基づくのはこれであつて、さういふものがその活動の法則なのだと云ふ。

けれども、人間の智力は、さういふ説明を信することを拒むのみならず、尙又、説明の方法が正確なもので無いことを、遠慮無く宣言する、何故だといふと、この説明に於ては、より少さい現象が、より大きい現象の原因だとして、取られて居るからなのだ。人々の個々の意志が革命をもナポレオンをも造り出したのだ、そして、さういふ意志の總計のみが、彼等を續かせ、やがて又、彼等を滅したのだ。

「が、戦争がある時には、何時でも、大將帥があつたし、國に革命があつた時には、何時でも、大人物があつたのだ」と、歴史は云つて居る。

「大將帥が居た時には、成る程、何時でも、戦争があるのであつた」と、人間の理性は答へ

る、『けれども、それは、將帥たちが戦争の原因であつたとか、戦争を起させるに至つた諸要因が、一人の人の個人的活動のうちに見出し得られるものだから、いふ證據にはならぬ』
 私が、自分の時計を見て居ると、Xの数字の所へ針が行くといふと、何時でも、直ぐ近所の教會堂で鐘が鳴り初める。けれども、鐘が鳴り始める時には、何時でも、時計の針が十を指して居るといふ事實からして、私の時計の針の位置が、鐘の震動の原因だと推論する権利は、私には無い。

蒸汽機關を私が見て居ると、何時でも、汽笛が聞え、安全瓣が開き、車輪が廻るのが見える、けれども、私は、その事實からして、汽笛の鳴ることや、車輪の廻ることが、蒸汽機關の動き出す原因だと、結論すべきでは無い。

農夫等は、櫛の芽が開き掛けるので、晩春には寒い風が吹くのだと云ふのだが、事實としては、櫛の芽が出て来る時分、何の春にも、寒い風が吹く。が、丁度櫛の芽が出て来る時分に寒い風が吹く原因は私には分ら無いけれども、私は、寒い風の原因は櫛の芽の開くことだといふ農夫等の説には同意することが能き無い、何故だといふと、風の力は、全く櫛の芽の勢力外にあるものだからだ。私は、さういふ事柄のうちには、單に、人生の何の現象にも有り勝ち

であるやうな、事件のさういふ暗合を見るに過ぎ無い、で、私は、私が、何れ程長く、何れ程詳細に、時計の針や、安全瓣や、蒸汽機關の車輪や、櫛の芽を、考查したところで、鐘が鳴つたり、蒸汽機關が動いたり、春の風が吹く原因を発見することは能き無いことを、見るのだ。さういふ原因を発見しやうといふには、私は、私の観察點を全く變へて了まつて、蒸氣の運動、鐘の運動、風の運動の、諸法則を研究し無ければならぬのだ。

歴史も、それと同一なことを、爲無ければならぬ。
 所で、この方向に於ての努力が既に居るのである。

史的法則の探究に於ては、吾々は、全然觀察の對象を變へて了まひ、王等や、宰相等や、將帥等などは捨て、置いて、大集が導かるゝ所の同種類の無限少の原素を研究し無ければならぬ。この方向に於て、史的法則を何れだけ了解する點まで、進み得べきかは、何人も云ひ得られることでは無い。けれども、史的法則を発見することが、幾らかでも能きものとすれば、その可能は、この方向に於てのみ、在ることは、略易いことであるのだが、それと同時に、人間の智力が、今日までは、歴史家等が、さまざまの王等や、宰相等や、將帥等の行為の記述だの、さういふ行為に對する歴史家等自身の見解の主張に、掛けた精力の百萬分の一も、上に云

つたやうな探究法の方には、委ね無かつたことは、これ又明白な事實である。

(二)

歐羅巴の十二の違つた國民の軍が露西亞へ侵入した。

露西亞軍及び住民は、戦を避けて、スモレンスクへと退いて行き、スモレンスクからポロディノオへと退いて行つた。佛蘭西軍は、引續いて増して行く推動力を以つて、その終極の目的地たる莫斯科へと、動いて行くのであつた。

その進軍の推動力は、その軍がその目的地へ近づくに従つて、丁度、落ちる物體の速力が地面に近くなるに従つて、増すやうに、だん／＼増して行く。彼等の背後には、食物の無くなつた、敵意を持つた地方の數千露里があり、彼等の前方には、彼等と彼等の終極の目的地との間の、數十露里があるのみだ。ナポレオン軍の何の兵卒も、それを感した、で、遠征軍は、それ自身の推動力で以つて、自然に進んで行く。

露西亞の軍隊では、憤怒の精神、敵に對する憎惡の精神が、彼等の退却の間に、だん／＼猛烈に燃え立つ、それは、彼等が退いて行くに従つて、力を増して、集中する。

ポロディノオで兩軍は出會ふ。

孰の軍も全滅はせずに、露西亞軍は、その戦闘の後、一つの球が、それに出會はうとしてより大きい推動力で飛んで來る他の球に衝觸つた後では、何うしても潑ね返らざるを得無いのと同じやうに、退いて行く。で、又、それと、丁度同なじやうに避け離く(衝觸の際にその力は無くなつて了まつたけれども)、侵入軍たる球は、その裡にある未だ全く失ひ切ら無い力の爲めに、もう少し前方へと持つて行かれる。

露西亞軍は、莫斯科の彼方へ百二十露里退く、佛蘭西軍は莫斯科に達する、そして、其所に駐まる。

その後、五週間は、唯だの一つの戦も無い。佛蘭西軍は動か無い。

致命傷を負つた野戦が、出血しながら、その傷所を喋めて坐つて居るやうに、五週間の間、佛蘭西軍は、何にも爲やうとせずに、莫斯科に居坐つて居る、で、全く不意に、何等新たな理由も無しに、彼等は逃げ歸りだす、彼等は、カルウガ海道へと突出する(而も、それは、彼等がマレエ・ヤロスラヴツツでは、戦場の領有者で居たのであるから、勝利の後なのだ)、それから彼等は、取り立て、いふべき程の一つの戦闘も無しに、だん／＼速くスモレンスクへと逃げ

ヴァルナへと逃げ、ベルジイナ川へと逃げ、それから、それを越へて逃げる。

八月二十六日の晩には、クツウヅフも、露西亞軍全體も、ボロディノの戦は勝利であつたと確信して居た。クツウヅフは、さういふ意味に、皇帝に上表した。

クツウヅフは、軍の諸隊に、敵の敗軍を完全に爲す爲めに、今一戦の用意を爲して居るやうに命令した、これは、彼が誰かを欺さうと思つたといふ譯では無く、彼が、その戦に與かつた誰もが知つて居たやうに、敵が敗北したことを、知つて居たからであつたのだ。

が、その晩ちう及び次の日には、未曾有の損害、軍の半分の損失の、報告が來た、で、今一戦することは全く不可能だと知れたのであつた。

情報が來ず、負傷者が收容されず、彈藥が補充されず、死者の数が算へられず、新將校が死者の代りに任命されず、兵が、食も、睡眠も得無いうちは、戦を開くことは、全く不可能であつた。

而も、それと同時に戦の直ぐ翌朝、佛蘭西軍が、自然に、今はその終極の目的地からの距離の自乗に逆比例した加速度になつたそれ自身の推動の力で動かされて、露西亞軍へと襲ひ掛つて來た。

クツウヅフの願望は、戦の翌日敵を攻撃することであつた、そして、全軍がその願望を共にして居た。けれども、攻撃を爲すのには、さうし度いと思つたばかりでは駄目である、それは又さう爲ることの可能が無ければなら無い、所が、その可能が無かつたのだ。

一日の行程だけ退か無い譯には何うしても行か無かつた、で、さうして見ると又、同なじやうに、第二日、第三日の行程だけ退か無い譯には何うしても行か無かつた、で、到頭、九月の一日に、軍が莫斯科に達した時に、軍隊間の強まり行く感情の力にも拘らず、事情の力は、それ等の軍隊をば、莫斯科の彼方へ退かざるを得ざらしめた。で、諸隊は、今一日の最後の行程だけ退いて、莫斯科を敵の手に委して了まつた。

戦役及び戦の方略が、將帥等に因つて立てられるのは、吾々のうちの誰でもが、書齋の内、地圖を前に控へて坐つて居て、斯くくいふ位地では吾々は何うするだらうといふ方略を立てると同なじやうなものだと、想像し慣れて居る人々は、何故クツウヅフは、彼が退却し無ければなら無かつたとすれば、この方針に出無かつたらうとか、彼の方針に出無かつたらうとか、何故彼は、ファイリの前面で陣地を占め無かつたらうとか、又何故彼は、莫斯科を捨て、直ちにカルウガ海道に退却し無かつたらうとか、いふやうなさまざま疑問に、思ひ惑うであ

らう。

さういふ風に考へ慣れて居る人々は、何時でも如何なる總司令官の行動をも制限する所の避け難き諸條件があるのを、忘れて居るか、知らぬかであるのだ。戦場に於ける總司令官の行動は、吾々が書齋に安樂に坐つて、兩軍の兵の極まつた數を以つて、極まつて知れた地域に於て、吾々の諸方略をば、或る極まつた刹那から起して、地圖の上の戦役をやつて行く時のやうな、吾々が一人で想像する行動とは、更に似ても似つかぬものなのだ。

將帥は、吾々が何時も事件を考査する時の起點とするやうな、事件の始まりなるもの、位地に居ることは、決して無いものだ。將帥は、何時でも、諸事件のドン／＼變はつて行く連続の眞唯中に居るものなのだ、だから、彼は、決して、如何なる刹那に於ても、起りつゝあるところの事件の有らゆる状態を熟考することの能き位地に居る事は無い。刹那は刹那を追つて、知らず／＼のうちに、事件は、その有らゆる状態を具へて、形を成すのである、そして、諸事件がさういふ風に不斷に、連續的に形を成すうちの各刹那に於て、總司令官は、さまざまの陰謀や、さまざまの心配や、依屬や、權力や、さまざまの企畫や、さまざまの意見や、さまざまの脅迫や、さまざまの考案やの、相互に連關依倚し合つて居るもの、最も複雑な働の中心

に居て、而も、その上に、自分に向つて問ひかけられる相互に矛盾し合つて居るさまざまの尋問に答へ無ければならぬ間斷無き必要の下に居るのである。

吾々は、軍事に通曉した人々から、非常な眞面目さで、クツクツフは、ファイリに達するより餘程前に、カルウガ海道に彼の軍を進ませるべきであつて、而も、さういふ方略を建言した人が誰かあるのだといふことを、話される。が、一軍の司令官たるものは、彼の前に、特に難局に方つては、一方略では無く、數十の方略を持つて居るものだ。所で、戦略や、戦術の諸法則に基づいて居るさういふ方略の各個が、それ自身以外の他の總てとは相互に矛盾し合つて居る。司令官の任務は、さういふ諸方略の中から一つを選びさへすれば宜いのだらうと、誰でも想像するだらう、所が、それさへ、彼は爲ることが能き無いものなのだ。時も、事件も、待つて居ては呉れ無い。

例へば、彼に向つて、二十八日に、カルウガ海道の方へ動いたら何うだらうといふ意見を提出した者があるとしやう、けれども、その途端に、ミロラアドヴィイチの許から副官が駆け付けて来て、直ぐに佛蘭西軍との戦に加はらうか、それとも、退却しやうかと、尋ねて来る。彼には、即刻直ちに返答を爲無ければなら無い。で、退却といふ命令は、吾々のカルウガ海道へ

轉ずるのを妨げるのだ。

で、それから又、その副官の後では、兵站部長が、輜重を何處へ持つて行けば宜いか、尋ねに来る、野戦病院長が、負傷者どもを、何處へ移せば宜いか、尋ねに来る、それから、彼得堡からの使者が、莫斯科の放棄の可能を飲み込み得無い皇帝の手紙を持つてやつて来る、またその外、司令官の足の下から、その立脚地を切り離してしまはうと骨折りつゝある（さういふ連中は、何時でも、一人二人では無いのだが）司令官の競争者が、カルウガ海道へ行進するといふ方略とは正反對の新企畫を提出する。

司令官自身の精力も、睡眠も、補助をも要するのだ。それから、勳章授與の際に見落されたチャンとした將官が、不平を訴へて来る、地方の住民が保護を懇請する、地理を視察しにやられた將校が、直ぐ前に同なじ任務でやられた將校とは全く異つた報告を持つて歸つて来る、それから、間諜や、捕虜や、偵察をやつた將官が、皆な相互に異つた敵軍の位地の報告を爲る。その下に司令官が行動し無ければなら無いそれ等の避け難い諸條件を、忘れて居るか、或はそれを了解し得無い人々は、フィイリに於ける諸隊の位置を吾々の前に提出して、總司令官は九月の一日に於ては、莫斯科を捨てるか、守るかといふ問題を決めるのが、全く自由であつた

のだと、憶斷するけれども、莫斯科から僅に五露里の所に居た露西亞軍の位地を以てしては、最早その問題には何の疑問もあり得無かつたのだ。

その問題は何時決せられたのか？

ズリツサで、スモレンスクで、そして、八月の二十四日に、最も明白に、シヅァアルディノで、二十六日に、ポロディノオで、それから、ポロディノオからフィイリまでの退却の毎日、毎時間、毎分時のうちに、決せられたのだ。

(三)

ポロディノオから退却して来た露西亞軍はフィイリで駐まつた。位置を視察に出て居たエルモオロフが、總司令官の所へ騎り付けて来た。

『この位地では、何うしても戦へません』と、彼は云つた。

クツウゾフは、吃驚して彼を見た、そして、彼の今云つたばかりのことを繰り返へさせた。彼がそれを爲るといふと、クツウゾフは、彼に向けて手をさし出した。

『君の手を見せろ』と、クツウゾフは云つた、で、エルモオロフの脈搏を見るかのやうに、

その手を引つ繰り返して、彼は云つた、「病氣だぞ、君は。飛んでも無いことを云つては不好」クツウゾフは、未だ、一戦もせずに莫斯科を放棄してしまつて、退却するといふことがあり得べきだといふ考察を、飲み込むことは能き無かつた。

ドロゴミロオフスキイ門から六露里のボクロナヤ丘の上で、クツウゾフは、馬車から降りて、路傍の腰架の上に腰を下した。將官等の大勢の群が彼の周圍に集まつた。莫斯科から馬車で出て来た伯爵ラストオブチンも、その裡へ加はつた。

この華々しい一群は、幾つもの小團に割れて居た、そして、位置の利益や不利益や、軍隊の状態や、提言された諸方略や、莫斯科の状況など——實際、軍事上の問題全般に涉つて——の談話を、各自の小團でやつて居たのだ。彼等はその目的で招集されたのでは無いけれども、誰も彼も、それは、表面的にはさうで無いにしても、實際上では、軍略會議であるのだと感じた。總ての談話が公共の問題に限られたのであつた。若し、誰でもが、個人的の報知を何か繰り返し又は尋ねることが有つたとしても、それは囁語を以つてであつて、談話が直ちに一般的の諸題目へと戻つて行くのであつた。總てこれ等の人々の間には、一つの冗談も、一つの笑も、一つの微笑さへも、見られ無かつた。

彼等は、誰も彼も、その時の情態の平準へ上ぼらうとする露白な努力を爲つ、あつた。で、總ての集團が、各個の間で談話を爲て居ながら、總司令官——その人の腰架は群集の真中になつて居た——の直ぐ傍に居るやうにと骨折り、彼が彼等の談話を聞くやうにと、話さうと骨折つて居た。

總司令官は、聞いて居た、そして、時々、自分の傍で何ういふことが云はれて居るか、尋ねた、が、自分では、談話にも加はらず、何等の意見をも洩らさ無かつた。大抵は、或る集團の談話を聞いて居た後で、彼等が、彼が少しでも聞き度く思つて居るやうな事柄を少しも話して居無かつたかのやうに、失望の風で、傍へ振り向いたのであつた。

或る者どもは、陣地の可否を論じて居た、尤も、それを選んだ人々の智力上の器量を批評する方が主で、陣地その物の方はそれ程批評され無かつた。他の者等は、その少し前からのやり方が間違つて居たので、もう二日前に一戦すべき筈であつたのだと、論じて居た、尙他の者等は、西班牙の軍服を着たクロサアルといふ佛蘭西人が、彼等に物語つて居たサラマンカの戦のことを話し合つて居た。

着いてから間の無いこの佛蘭西人は、露西亞軍に加はつて居た獨逸の公爵等の一人と共に、

サラゴッサの攻圍を批評して、莫斯科の防守に同様な方法が用ゐられ得るといふやうなことを、云つて居た。

第四の集團では、伯爵ラストオプチンが、彼は、莫斯科の市衛兵と共に、市の城壁の下で死ぬ覚悟ではあるが、それでも、此様な不確定のなかに置かれるのは困る、若し、もつと早く何とか分つて居たら、事情は餘程違つたのだと、云つて居た。

第五の集團は、軍隊が今何うしても取らなければならぬ方向を論ずることに因つて、自分等の深遠な戦術上の洞察力を表はして居た。第六の集團は、全く愚にも付かぬ下らぬ無ことを話し合つて居た。

クツウゾフの顔は、だん／＼心配さうに、陰鬱になつて來た。斯ういふ總ての談話から、彼は、唯だ一つの事のみを知つた、即ち、莫斯科の防守は、實體的不可能事——さういふ言語の最も十分な意義に於ての——であつた。その防守は、誰か狂氣の司令官があつて、それが戦を開くといふ命令を出したとした所で、それに次いで來る事柄は一切滅茶々なことで、戦は少しも戦はれる氣遣ひは無いと思はれる程までに、全く不可能なことであつた。司令を掌る總ての將校が、その陣地は到底駄目だと認めて居たばかりか、彼等は、今その陣地を捨て、から

後で何う爲べきかといふことを論じてばかり居るのであつたから、戦は何うしても開かれる氣遣ひは無かつたのだ。何うして、將校等は、自分等が踏み止まることが到底能き無いと認めて居る戰場へ自分等の部下を率ゐて行けやう？。

それより下級の將校等や、兵卒等さへも（彼等も又彼等自身の決論を下して居た）、その陣地の守れ無いものであることを認めて居た、だから、彼等も、必然敗北するといふ確信を持つて居ながらでは、到底戦に進み得無いのであつた。ベニグセンがこの陣地の防守を主張し、他の者等も未だそれを論じて居たといふことは、それ自體に於ては何の意義も無い事實であつて、それは、抗議と陰謀を行ふ辭柄に過ぎ無かつたのだ。クツウゾフはそれを知つて居た。

ベニグセンは、莫斯科の防守を主張して、彼の露西亞的愛國心を熱心に表白して居た（クツウゾフは、避易ずにそれを聞いては居られ無かつた）。クツウゾフには、ベニグセンの目的が晝の日光のやうに明白に分つて居た、それは、防守が不成功であつた場合には、一戦も爲すに、雀山まで軍を持つて來て了まつたクツウゾフにその責を刎ね掛けるし、若し又、その防守が成功した場合には、その功を自分の物にしてしまふし、更に又、それが全然試みられ無い場合には、莫斯科放棄の罪から身を潔よくして了まはうといふのであつた。

が、陰謀のそれ等の問題も、今は老人の心を占有しては居無かつた。恐ろしい一つの疑問が彼の心を領して居た。そして、その疑問に對しては、彼は、誰からも何の答をも聞か無かつた。今彼に取つての疑問は斯ういふのであつた――

「實際、俺はナポレオンを莫斯科へ來させたのだらうか、然すれば、何時さう爲たのであらうか？ 何時それが起つたのか？ それは、昨日俺がブラアトフに退却しろと云つて遣つたあの時であつたのか、それとも、その前の晩俺が一寸と眠て、ベニグセンに命令を出させた彼の時であつたのか？ それとも又、もつと前のことなのか？ ……何時、何時この恐ろしいことが起つたのか？ 莫斯科は放棄されなければならぬ。軍は退却し無ければならぬ、そして、俺は、その命令を出さなければならぬのだ」

その恐ろしい命令を出すのは、彼には、軍の司令を辭するのと同なじに思はれるのであつた。所で、彼が權勢を愛し、且それに慣れて居た（彼が土耳其に居る間、頭に頂いて居た公爵プロゾロフスキイの尊敬されるのが、彼には太く厭であつた）といふことは別として、彼は、自分が露西亞を救ふべき人間と定まつて居て、そして、それが爲めに、自分が、皇帝の意に反して、人民の意志で、總司令官に選ばれたのだと確信して居た。彼は、さういふ國歩艱難の場合

に於て、自分より外には、軍の頭に立つ位地を保ち得るものは一人も無く、自分ばかりが、狼狽せず敵手としてナポレオンに當り得べき、世界中の唯一の人間だと、自ら信じて居た。で、彼は司令官の位地を辭するといふ考想に對して、慄然とした。けれども、彼は、何等かの處置を決し無ければならぬ、餘り不謹慎なものになりかけて居た自分の周囲のこの饒舌を止めさせて了まは無ければならぬ。

彼は、古參の將官等を自分の傍へ招き寄せた。

「私の頭は、善にしろ悪いにしろ、自分自身で判断を下すより外は無」と、彼は云つて腰から立ち上り、そして、彼の馬車が彼を待つて居たファイリへと騎り去つた。

(四)

農夫のアンドレーエ・サヴォステヤアノフの家の大きい一番良い部室で、二時に、會議が開かれた。農夫の大家内の男や、女や、小兒たちは、悉皆、廊下の他の側の部室に集まつた。唯だ、殿下が可愛がつて、自分の茶を飲む時に、砂糖を遣つたりなどして居た、アンドレーエの孫のマラアシャといふ六歳の兒ばかりが、一番良い部室の大暖爐の蔭に止まつて居た。マラア

シヤは、煖爐の上から羞かしさうに窺き出して、續々部室へ入つて来て、聖像の下の上坐にある幅の廣い腰架へ列んで掛けて居た將官たちの顔や、制服や、勳章を、嬉しがつて見て居た。

「祖父さん」自身は——マラアシヤが心の裡でクツウゾフのことを「祖父さん」と呼んで居たのだ——他の者からは離れて、煖爐の後の暗い隅に坐つて居た。彼は、折り疊みの能きる肱掛椅子に、物を積み重ねたとしても云ひさうに、グチャ／＼となつて坐つて居て、始終咳拂を爲、それから上衣の襟を引き延して居た、上衣の扣鈕は外されて居ただけけれども、尙且それが頭に當るらしかつたのであつた。

相續いてやつて来る將官等は、總司令官の傍へ歩み寄つた、彼は、或る者どもとは握手し、他の連中には唯だ頷いたのみであつた。

副官のカイサアロフは、クツウゾフの正面の窓へ窓帷を引かうと爲た、が、後者は、カイサアロフに向つて腹立たしさうに頭を振つた、副官は、殿下は人々に顔を見られても構はぬ氣で居ることを見た。

地圖や、設計圖や、鉛筆や、紙の置いてあつた農夫の樅板の卓子の周圍には、非常に大勢集まつて居た、席が足りず、從卒等が、今一つ腰架を持つて来て、卓子の傍へ置いた程であつた。

エルモオロフや、カイサアロフや、トオルは、この腰架に坐つた。

聖像の下の一席の上席に、蒼い、弱々しい顔をした、禿げた頭へ續いた凸額のバルクレエ・ド・トオリイが、聖ゲオルギイ勳章を頸へ吊けて、坐つて居た。彼は、この二日といふものは、熱病の峠であつた、で、今は、寒むさうにふる／＼振へて居た。

彼の側には、ウヴァーロフが坐つて、誰もが話して居るやうな同なじ低聲で、速い手眞似で、彼に何か話して居た。

小さい圓々としたドフツウロフは、眉を擧げて、手を腹部の上で拱ぬいて、注意深く聞いて居た。

彼方側には、大振りな顔の道具立ての、爛れた眼の、伯爵オステルマン・トルストイが、一人で考慮に沈んで居るらしい態で、大きい頭を手で支へて、坐つて居た。

ラエーフスキイは、何時も爲るやうに、額の黒い捲き髪を捻りながら、クツウゾフから戸口へと、待ち遠うさうに、見廻して居た。

コノヅニイツインの確乎した、奇麗な、機嫌の好ささうな顔が、微弱な、親切さうな微笑で、晴々として居た。彼は、マラアシヤと眼を見合はせた、そして、眼でその娘に合圖を爲た、そ

れが、小さい娘を微笑ませた。

人々は皆ベニグセンを待つて居た、ベニグセンは、新たに陣地を今一遍視察するといふ辭柄を構へて、自分の贅澤な食事を了まうことに掛かつて居たのであつた。人々は、四時から六時まで彼を待つた、そして、その間は、一切會議はせずに、唯だ低い聲で、餘談ばかりをやつて居た。

ベニグセンが、小家へ入つて來ると、始めてクツツゾフは、彼の隅から出て、卓子の傍へ行つた、が、自分の顔が、卓子の上にあつた蠟燭の光の遠く範圍内に入らぬやうな位地に坐つたのであつた。

ベニグセンは、露西亞の、神聖な、古い都を捨てるか、それを守るか、といふ問題で、會議を始めた。

長い沈黙が次いだ。誰の顔も懇んで居た、と、沈靜の裡で、クツツゾフの腹立たしさうに咳拂するのが聞えた。誰の眼も彼の上に見据ゑられた。マラアシャも又「祖父さん」を見詰めた。

その娘は、誰よりも一番クツツゾフの近くに居た、で、クツツゾフの顔付が動いて居るのを

見た、クツツゾフは、今にも泣き出しさうに見えた。が、それは、長くは續か無かつた。

「露西亞の神聖な古い都」と、彼は、ベニグセンの言語を繰り返して、それで以つて、その言語に籠つて居た虚偽の調子を見せて、腹立ち聲で、不意に叫んだ。「失敬ながら、閣下に申すが、その問題は、露西亞人に取つては、何の意味も有りません」彼は、彼の重い身體を前へ突き出した。「さういふ問題は出さるべきでは無い、さういふ問題には最早何の意義も無いのだ。私が、これ等の紳士諸君に集まつて議して貰ひ度いのは、戦争の問題だ。その問題は斯ういふのである、露西亞の安危は懸つてその軍隊の上にあるのだ。戦を爲すことに因つて、軍隊の滅亡、従つて、莫斯科の滅亡を招く危険を冒すのが宜しいか、それとも、戦はずに、莫斯科を放棄するが宜しいか、孰であらう」といふのだ。これが、諸君の意見を私が聞き度い問題なのだ。彼は、元の通り彼の低椅子へ身體を引き戻した。

討議が始まつた。

ベニグセンは、未だ自分が負けに爲つたとは、認め無かつた。バルクレエーや、その他の連中の爲めに、壓倒されて、ファイリに於て防衛的陣地を保つことの不可能を容認せざるを得無くなつて、彼は、夜に乗じて、陣地の右翼から左翼へと軍を動かして、次の日に、佛蘭西軍の右

翼に一撃を與へやうと建言することに因つて、自分の露西亞的の愛國心及び莫斯科に對する自分の忠愛を説明しやうと進んだ。

意見が割れた、そして、さまざまの議論がこの問題に同じて若くは反對して唱へられた。エルモオロフや、ドフツウロフや、ラエーフスキイは、ベニグセンに賛成した。市を放棄する前に犠牲の行爲が求められるのだといふ感情や、尙又其他の個人的考慮の爲めに、誘はれて、それ等の將官たちは、その時開かれて居た會議が、事件の避け難き進行を動かさし得べきものでは無く、莫斯科は最早事實上放棄されて居たのだといふことを、悟り得無かつたやうであつた。

他の將官たちには、それが解つて居た、で、彼等は、莫斯科の問題は捨て、置いて、退却の場合に軍が取るべき方向のことを話して居たのであつた。

自分の前に行はれて居る事柄の上に始終眼を見据えて居たマラアシャは、その會議をば全く異つた態に見て居た。目前の事件は、『祖父さん』と『長外套』——マラアシャはベニグセンを心の裡でさう呼んで居たのだ——との間の喧嘩ののだと、マラアシャには思はれた。娘は、二人が、話し合ふ時には、兩方とも怒つて居るのを見た、そして、自分の心の裡で、『祖父さん』の肩を持つて居た。

談話の真中で、娘は、『祖父さん』がベニグセンを見た速い、抜目の無ささうな眼付を見、そして、その直ぐ後で、『祖父さん』の言語が『長外套』を全く回ましてしまつたのを認めて、嬉しくつて堪まら無かつた。ベニグセンは不意に顔をカツと赤くして、腹立たしさうに、部屋を横切つて大股に歩いた。さういふ風にベニグセンを動かした言語は、佛蘭西軍の右翼を攻撃する爲めに、夜に乗じて、右翼から左翼へと軍隊を動かさうといふ彼の建言に對してクツウゾフが穩に低い聲で加へた批評であつた。

『私は伯爵の方略には賛成できんよ、諸君』と、クツウゾフは云つた。『敵に極く接近して居て軍隊を動かすのは、何時でも危険である、さういふ行動から生ずる失敗の例は、戦史上に甚だ多い。例へば……』(クツウゾフは、凝乎と考へて、例を索めて居たが、頓て、率直な、如何にも無邪氣らしい表情で、ベニグセンを見た)……『うん、フリードリヒの戦、これは、閣下も必らず覺えて居らるゝだらうと思ふのだが、彼の戦は、敵の餘り附近で、軍隊の位地を變へた爲めに……十分な成功を收め……得無かつたのだ……』

一寸の間沈黙が次いだ、それが、誰もなかく長いやうな氣が爲た。討議が又始まつた、が、間斷が屢それを中斷させた、で、最早話し合うことは何も無いこ

とが、誰にも感ぜられた。

さういふ間斷の一つに於て、クツウヅフが、何か云はうとするかのやうに、深い溜息を爲た。誰も彼も、その方を振り返つた。

「いや、諸君、破れた壺の責任は私が負はにやアならんやうだ」と、彼は云つた。で、徐々と席から立ちあがつて、卓子へと歩み寄つた。「諸君、私は、貴下がたの意見を聞いた。貴下がたのうちの或る人々は、私の意見には賛同せられまい。けれども、私は（彼は止まつた）、『皇帝及び國から私に托された職權に因つて、退却を命じます』」

その後、將官たちは、人が葬式の後で別れる時のやうな嚴肅さと、用心した沈黙でもつて解散し始めた。將官たちのうちの幾人かは、彼等が會議で話して居たのとは全く異つた高さの低い聲で、總司令官へ何か陳述して居た。

他の部室で、晚餐に來るのを長く待たれて居たマラアシャは、煖爐の突き出して居る場所へ跣の足の指を掛けて、煖爐から後さまに跳び下り、將官たちの脚の間をすり抜けて、戸口から跳び出して行つた。

將官たちを歸して了まつてから、クツウヅフは卓子の上に肘を突いて、長い間「何時、何時

莫斯科が放棄され無ければならんといふ、避け難いことにはなつたのであらうか？。それを避け難いことに爲て了まつた事柄が何時爲されたのであらうか、そして、それは、誰の咎であらうか？」といふその恐ろしい問題を考へ込んだ。

「斯うならうとは、全く思ひ掛けが無かつたよ」と、彼は、その夜遅く彼の部室へ入つて來た副官のシュナイデルに、云つた。「斯うならうとは、思ひ掛けが無かつたよ。斯うならうとは、決して思は無かつた」

「お眼みになら無ければいけませんよ、殿下」と、シュナイデルが云つた。

「左様だ、が、土耳其人のやうに、奴等に、馬肉を食はせてやるぞ」と、クツウヅフは、副官には構はずに、卓子を彼の肥つた拳でドシンと叩いて、叫んだ。「奴等にも、それを食はしてやる、唯だ若し……」

(五)

それと同時に、一戦も爲すに軍が退却したことよりも尙一層重要であつた程の事件に於て、即ち、莫斯科の放棄や、それが焼けたことに於て、吾々が、その事件に於て主動者であつたと

思つて居る伯爵ラストオブチンは、クツツゾフとは非常に異つた風のやり方を爲て居た。

この事件——莫斯科の放棄と、その焼けたこと——は、ポロディノオの戦の後では、戦はずして軍が退却したこと、全く同様に避け難いことであつたのだ。

何様な露西亞人でも、起つたその事件を豫言することができたのであつた、それは、智力上の推論の引き續の結果としてでは少しも無く、吾々の心の底に横たはつて居、又吾々の祖先の心の底にも横たはつて居た感情から、さう能きるのであつた。

スモレンスクから此方の、露西亞の地上の何の市でも、何の村でも、伯爵ラストオブチンやその揭示の補助が無くとも、莫斯科で起つたと同なじ事が起つたのであつた。人民は、騷擾無しに、敵の來るのを待つて居て、昂奮を表はさ無かつた、誰をも切々に引き裂きは爲無かつた、が、彼等は、自分等の身體の裡に、自分等が、艱難の場合に於て爲無ければならん事柄を爲る力があるのを感じながら、自分等の運命を靜に待つて居たのであつた。

敵が近づくや否や、住民の中の金持の部分が、彼等の財産を捨て、去つて了まつた、貧乏な者どもが残つて居て、残つて居た有らゆる物を焼いて、滅却したので。

これがさうあるべきこと、而も、何時でもさうあるべきことだといふ感は、何の露西亞人の

胸の底にも、横たはつて居たし、又今も横たはつて居るのである。所で、この感、尙それ以上の、莫斯科が敵に取られるだらうといふ豫想が、千八百十二年には、露西亞の社會に潜んで居た。七月や、八月の初に、莫斯科を去り始めた人々は、彼等が、莫斯科の取られることを豫期して居たことを、示したのであつた。自分等が持つて行けるだけの物を持つて、家や、財産の半分を捨て、市を去つた人々は、潜在的愛國心の結果で、さう爲たのであつた、その潜在的愛國心なるものは、唯の言語や、祖國の爲めに小兒を死なせに遣るとか、其他のさういふやうな不自然な所業に於て、表はれるのでは無くして、極く單純な根本的な風で、殆ど眼には見えぬやうに、現はれるのである、だから、それは、何時でも、最も力強い結果を生ずるものである。

『危険を逃れるのは耻辱だ、臆病者のみが莫斯科から逃げて居るのだ』と、彼等は云つて聞かされた。ラストオブチンは、彼の揭示で、莫斯科を去るのは卑劣なことだといふことを、彼等に説き聞かせた。彼等は、臆病者と呼ばれるのを耻ぢた、彼等は去るのを耻ぢた、それでも、依然彼等は、何うしてもさう爲無ければなら無いことを知つて居たので、去つた。

何故彼等は去つたのであらうか？

ナポレオンが、征服した國々に於て、非常な残酷な事を行つたといふラストオブチンの假作

物語で、彼等が脅されたものとは、想像し得られ無い。最初に去つた人々は、金のある、教育のある人々であつたので、さういふ人々は、維也納や、伯林が何の害も被むらずに居たことや、ナポレオンが占領した時に、さういふ市の住民は、總ての露西亞人、ことに上流婦人たちが、その時分極く好いて居た魅力のある佛蘭西人と、賑やかに日を送つたといふことを、善く知つて居たのだ。

彼等は、自分等が莫斯科で佛蘭西人の支配の下で、心持が好いか、何うかといふ問題は、テンドで露西亞人たる彼等の心には思ひ寄れ無かつたので、去つたのだ。佛蘭西人の支配の下に立つといふことなどは、全然問題になら無いことであつた、それ以上に悪いことは世の中に一つも無かつた。彼等は、ポロディノの前にさへ去つて居た、そして、ポロディノの後では、尙一層ドン／＼去つた、彼等は、市を守れといふ勧誘や、莫斯科總督の布告や、イヴエールスキイの聖母を持つて戦に出やうといふ彼の企や、佛蘭西軍を潰亂させやうといふ輕氣球の目論見や、その他、ラストオブチンが、彼の掲示のなかに満した總ての愚劣しいことなどには、一向構は無かつたのであつた。

彼等は、戦ふのは軍隊の義務であつて、若し軍隊にしてそれが能き無いとすれば、若い婦人等や、家内の隸僕等が、三丘で、ナポレオンと戦ふ爲めに飛び出して行つたつて何の役にも立た無いことを知つて居た、で、彼等は、自分等の財産を破壊に委して了まうのは厭がりながらも、急いで去つたのであつた。

彼等は、この般賑な大都市がその住民に捨てられ、それが爲めに、煽に委せられるといふことが何うしても避け難いことになるといふことの、非常な大きい結果は、少しも考へずに、市から逃げ出したのだ。空家を破したり、焼いたりすることを控へることは、露西亞の農夫等の心には決して一度も思ひ浮べられたことでは無かつた。彼等は、各個自分々の理由で、逃げ出した、が、それでも、露西亞の最高の光榮であるところの壯大なる事件が起るやうになつたのは、その人々のさういふ行爲の結果に外なら無かつたのだ。

ポナバルトの從隸には何うしてもなら無いといふ漠然たる感と、ラストオブチンの命令で去ることを妨げられては困るといふ漠然たる恐怖とで以つて、六月のうちに、自分の黒人等の道化者等を伴つて、サラアトフの領地へ向けて、莫斯科から出發した婦人等は、露西亞を救つたところの大事業をば、單純に、且眞正に、爲し就げつゝあつたのだ。

伯爵ラストオブチンは、一時は、去りつゝある人々を、卑劣だと罵つた、が、次ぎには、總

ての官衙を他所へ移し、次ぎには、役に立たない武器を酔拂つた暴民に配付し、次ぎには、聖像を持ち出し、そして、師父アツギヌチンが聖遺物と聖像を他所へ移さうとするのを妨げ、次ぎには、莫斯科にある有らゆる私有の車馬を差し押へ、次ぎには、百三十六輛の荷馬車でレピッチが造つた輕氣球を引き出し、それから又、或る時は、莫斯科に火を付けるといふ意見を洩らし、又或る時は、彼が自分の家を焼いた有様を述べ、それから、佛蘭西人に與へる宣言書を書いて、その中で、彼等が、彼の小兒の時分からの家郷を、破壊するのを嚴肅に責めた。彼は、莫斯科に火を付けたのは自分の功だと主張するかと思れば、直きにそれを取り消し、總ての間諜を捉へて、さういふ者どもを、自分の所へ連れて來いと命令して置いて、やがて、人民がさうするのを非難し、有らゆる佛蘭西人の住人を莫斯科から追ひ出して置きながら、莫斯科で佛蘭西人の社交界の中心になつて居たマダム・オオベル・シャルミイは、殘つて居させた。何の然したる理由も無く、彼は、世人から尊敬されて居た老郵便局長のクルウチャアロフをば捉まへさせて、追放に處した。彼は、佛蘭西人と戦ふ爲めに、三丘へ人民を集めた、そして、彼等を振り捨てる爲めに、彼等に一人の人を渡して虐殺させて置いて、自分は裏口から逃げて了まつた。彼は、何うしても、莫斯科の災厄を見るまで生きては居無いと誓つて置きながら、

後になつて、莫斯科の事件に自分が與かつたことに對して、下のやうな佛蘭西語の歌を、書畫帖へ書いた。

「私は韃靼人に生れた、
私は羅馬人になり度い、
佛蘭西人は私を野蠻人と呼び、
露西亞人は私をジョルジュ・ダンダンと呼ぶ」

この男は、起りつゝあつた事柄の意義をば寸毫も覺り得無かつた。彼が欲したのは、唯だ自分が何事かを爲、人民を驚かし、愛國心から生ずる何か勇者的な功績を立てやうといふのに過ぎ無かつたのだ、で、彼は、小兒のやうに、莫斯科の放棄及び焼失といふ壯大な避け難き事件の周圍を踊り廻つて、彼の力弱き手で、彼をも一緒に推し流して行く大いなる民衆的潮流の進行をば、最初のうちは、促し進めやうとし、その後では、それを止めやうとしたのであつた。

(六)

エレンは、宮庭がヴィルナから歸るのに隨いて、彼得堡へ歸つて來た、そして、其所で、難

局のうちに、自分自身を見出した。

彼得堡では、エレンは、政府に於て最高の位地の一つを占めて居た或る傑い人物の特別な鼠負を受けて居た。ヴイルナでは、若い外國の皇族と戀愛關係を結んだのであつた。

エレンが彼得堡へ歸るといふと、その皇族と、大官とが、兩方とも、その都に居た、兩方が各自の權利を主張した、で、エレンは、自分の生涯には前には未だ嘗て起つたことの無い問題——即ち、孰も怒らせずに、孰とも極く密接の關係を維持して行かうといふ問題——に打つかつて了まつた。

何様な他の女にも、困難な、不可能な爲事だと思はれるやうな事柄でも、明白に最も惻巧な女だといふ評判を得て居た伯爵夫人ベズウホフには、決して瞬時の考慮にも足ら無かつた。若し、隠さうと爲たのであつたら、又若し、何か瞞着手段に因つて、その拙い位地を脱れやうと爲たのであつたら、自分に罪があるものと自分から認めたことになつて、總てオヂャンになつて了まうのであつた。が、何時でも、自分の爲度いと思ふことを爲得る眞に傑い人のやうに、エレンは、直ちに、自分でも實際心から信じて自分の位地の正しいことを辯明することに取るかゝり、當事者一同の罪のある責任を自分で負はうと爲たのであつた。

若い外國の皇族が、自分を責めた最初の時は、エレンは、美しい顔を擧げて、彼に對して傲然たる調子で、確乎として云つた——

『男の自我主義と残酷は、その通りですわね。私は必然さうだらうとは思つて居たんです。女が、貴下の爲めに、身を捧げるとすると、その褒美は此様なものなんです。殿下、貴下は、何様な權利がお有りなすつて、私の友情や、私の愛情にご干渉なさるんですね？。彼の人は、私に取つては、父親よりもつと大切な人なんですからね』

皇族は、何か云はうと爲た。エレンはそれを遮ぎつた。

『え、勿論、彼の人は、私に對して、父親の愛情以外の感情を持つて居ます、けれども、それは、私が彼の人を家へ寄せ付けぬやうにする理由には爲ら無いんですよ。私は、思知らずになるやうな人間では無いんですからね。宜ごんすか、殿下、私は、自分の心の裡の感情に關する一切の事に就ては、神と、私自身の良心に對して責を負ふ限りなんですからね』と、エレンは、言語を結んで、自分の美しい、波立つ胸へ手を置いて、天を見上げた。

『でも、何卒、私の話を聞いてください』

『私と結婚なさいまし、私は、貴下の奴隷になりますわ』

「でも、それは能き無い話ではありませんか」

「貴下は、私なんぞとは一緒になつてはくだきませんのねえ、貴下は……」と、エレンは泣き出した。

皇族は、エレンを慰めやうと爲た。エレンは、全然惑亂して了まつたかのやうに、自分が結婚することを妨げる物は何も無いといふことや、それには幾つも先例があるといふことや、(それは、その時分には極く僅であつたのだが、エレンはナポレオンやその他の高い階級の幾人かの人々の例を引いたのだ)、自分は自分の夫に對して眞正の妻では無いことや、自分は結婚へと厭がる犠牲となつて引き摺られて行つたのだといふことを、涙の裡から、云つた。

「でも、法律や、宗教は……」と、皇族は、讓歩しさうになつて、咳やいた。

「宗教や、法律なんて……若し、それにそれ位なことが能き無いのなら、それは何の爲めに發明されたものなんでしょうかねえ？」と、エレンが云つた。

皇族は、其様な單純な考慮が未だ一度も彼の心に思ひ付け無かつたのに驚いた、で、自分が密接な關係を持つて居たジエズイト教派の會議に訴へた。

二三日経つと、エレンがカメンニイ・オスツロフの夏別荘で屢くやつて居た非常に心持の好い

宴會の一つに於て、心持の好いモシユウ・ジョベールといふ男が、エレンに紹介された、それは、最早若く無い男で、雪のやうに白い髪、爛れた黒い眼、短衣級のジエズイトであつた、その男は、音楽の調子に合はせて、庭園の飾燈の裡をエレンと一緒に長い間歩いて、神の愛や、基督のことや、聖母の心のことや、唯一の眞正の加特力の信仰に因つてこの世及び次の世に於て與へられる慰藉のことを、エレンと話した。

エレンは感動した、で、幾度も涙がエレンの眼と、モシユウ・ジョベールの眼に出た、そして、二人の聲が振えた。

エレンの相手がエレンを舞踏へ伴れて行つて了まつたので、それが爲めに、エレンと「エレンの良心の(將來の)案内者」との談話は中斷された、が、次の晩に、モシユウ・ジョベールは單獨でエレンに逢ひに来た、そして、その日からして、彼は、度々来る訪問者になつた。

或る日、彼は、伯爵夫人をば、加特力派の教會堂へ伴れて行つた、其所では、エレンは、自分が伴れられて行つた神壇の前で跪づいた。

非常に心持の好い、中年の佛蘭西人が、エレンの頭へ手を置いた、そして、エレン自身が後でその時の物語を爲たところでは、新鮮な空氣の息吹のやうな何物かが、自分の靈魂へ漂つて

来たやうな氣が爲たといふのであつた。それが『神の恩寵』であつたと、エレンに説明せられたのであつた。

それから、長衣級の僧侶がエレンの所へ伴れて來られた、彼はエレンの懺悔を聞いた、そして、エレンの罪を赦した。

次の日、聖體の入つて居る函が持つて來られた、そして、エレンの家に置いて行かれた。

五六日経つて、エレンは、自分が最早今は眞の加特力派の教會へ入れられたことや、二三日のうちに、法皇その人が、エレンの事情を聞いて、何か書類を送つて來て呉れるといふことを聞いて、大いに満足した。

この時分に、エレンに對し、又その周圍で、爲されて居た總ての事——それ程多くの人々からエレンに向つて拂はれた、そして、非常な心持の好い、微妙な形式で表はされた親切や、エレンの改宗の間の鳩のやうな純潔さ（エレンは、始終白い衣服と白い平紐の外何にも着け無かつた）——さういふ總ての物が、エレンに満足を與へた。が、この満足が、エレンをして自分の目的をば寸時の間でも見失なはせるやうなことは爲無かつた。

で、狡猾の戦では、何時も、間拔けな人間の方が、伶俐な奴よりも、利益を得ると同様な

で、エレンは、總てそれ等の言語や、手段の動機は、自分を加特力派に改宗させることに因つて、ジズイト派の利益の爲めにエレンから纏まつた額の金錢を取らうといふのであること（實際、さういふことが仄めかされも爲たのだが）を十分覺つて居て、金錢はなか／＼出さずに置きながら、自分の結婚の縁の糸を切り離して、自分を自由の身にするやうなさまざまな方法を、飽くまで續けて居た。

エレンの考想では、何の宗教の目的も、人間の所欲を満たす爲めに、合宜の世間一般に認められた形式を供給するのにあるのだといふのであつた。

で、この目的を何時も眼前に置いて、エレンは、自分の靈魂上の相談相手との談話の一つに於て、自分の結婚が、何れ位の程度までに、破り難いものであるかといふ問題に對する返答を求め、このことを、主張した。

二人は客間の窓に坐つて居た。窓から花の香氣がして來て居た。エレンは、胸や、肩が全部透いて見えるやうな白い衣服を着て居た。細そりした、營養の好い僧は、圓々とした清潔に剃つた腮で、愛嬌深い、強さうな口で、白い手を膝の上へ溫和しやかに組み合はせて、エレンの傍にくつ付いて坐つて居た。唇に伶俐さうな微笑を湛へ、眼には、憤み深い嘆賞の様子を表は

して、彼は、時々エレンの顔を見詰めながら、問題に對する彼の意見を述べ立てた。

エレンは、落着か無い笑顔で、彼の縮れた髪や、清潔に剃つた、黒味がかつた頬部を見詰めて居て、談話が新たな方向を取るのは今か今かと、待ち設けて居るやうに見えた。が、僧は、自分の同席者の美しさには確に氣が付いて居たらしかつたに拘らず、尙又、自分がその問題を巧妙に取り扱ふ技術にも、氣を取られて居たのであつた。

その靈魂上の相談相手は、次のやうに論歩を進めた――

『ご存じ無しで』と、彼は云つて、『貴女の約束の意義をね、貴女は、或る男に對して婦としての貞節の誓約を爲た、所が、その人の方では、結婚といふもの、宗教上の意義に對しては何等の信仰も無しに、結婚の聖禮に入つた爲めに、瀆神の罪を犯したのであります。その結婚は普通の場合にはそれが持つべき筈であるところの雙方に對する結合力を、持た無かつたのです。けれども、それに拘らず、貴女の誓約は、貴女に取つては破ることの能き無いものなのです。貴女がそれを破つたと爲ます。すると、貴女は何ういふ罪を犯したことになりませう。肉の罪でせうか、靈魂上の罪でせうか。肉の罪です、何故なれば、貴女は悪い事を爲る積りは少しも無くして、それを犯したからなのです。が、今、若し、貴女が、お子さんをお儲けに

なるお積りで、新に結婚をなさるとすれば、貴女の罪は赦されるだらうと思はれます。けれども、問題は、其所で二つに分れます。第一……』

『でも、私想像しますわ』と、デレだしたエレンは、不意に、何時もの人を魅するやうな笑顔で、云つて、『真正の宗教に改宗した後では、虚偽の宗教で私の上に置かれた義務に縛られる譯は無い筈ではありませんか』

エレンの靈魂上の相談相手は、この解き方の單純さが、全然コロムバスの卵の解き方と同なじ位なものであつたのに、吃驚させられた。彼は、自分の弟子の上達の豫想外の速さを、非常に嬉しく思つた、が、それでも、彼は、彼に取つて精神上の努力を要した巧妙な議論の建て上つた物を捨て得無かつた。

『お互に理解し合はうぢやありませんか』と、彼は、微笑んで、云つた、そして、自分の靈魂上の娘の議論を駁する議論を見出し始めた。

(七)

エレンは、その事件は、宗教上の見地からは極く單純で容易なことなのだが、それに對して

自分の靈魂上の相談相手等がさまざまに異論を唱へるは、唯だ彼等が、俗界の有力者のその問題の見方を慮れて居たからに過ぎぬのだと見て取つた。

で、それだものだから、エレンは、社會が眞の意味に於てその問題を見得るに至るやうに道を付けて行か無ければなら無いと、決心した。エレンは、老大官の嫉妬を煽り起させた、そして、自分が自分の今一人の戀人に云つたと同なじ事を云つた——即ち自分に對しての占有的權利を得る唯一の手段は、自分と結婚することなのだといふことを、その老大官に理解させやうと爲たのであつた。

老大官は、若い外國の皇族と同なじやうに、最初は、生きて居る夫の妻からの結婚の相談に睦若とした。が、それは、未だ嫁づいたことの無い娘の結婚と同なじに單純な自然なものだといふことを主張するエレンの逡巡が無い確信が、又その老大官に對しても効果を持つた。躊躇や、愧耻や、遠慮の一寸とした痕跡でも、エレン自身の方に見えたのであつたら、エレンの企畫がオヂヤンになるのであつた。が、なか／＼何うして、それどころか、全くの眞率と、如何にも他意の無ささうな無邪氣さで、エレンは、皇族と、大官の兩方から結婚を申し込まれたのであるが、自分は兩方とも愛して居るので、孰かを悲しみますやうなことを爲度く無いのだと、

自分の別戀な朋友等（その別戀な朋友等といふ言語は、彼得堡全體を指したものであつた）に話した。

風説が直ぐに、彼得堡ちうへ廣がつた——それは、エレンが夫から離婚しやうとして居るといふ風説では無く（若し、さういふ風説が論ぜらるゝのであつたら、随分多勢の人々が、さういふ不合法な處置には、反對の側に立つのであつたのだ）——併し、不幸な、誰の氣にも入つて居たエレンが、二人の結婚申込者の孰へ結婚すべきかに迷つて居るといふ風説であつたのだ。問題は、最早何ういふ程度まで結婚するといふことが可能なものであるかといふのでは無くして、單に、孰の男がエレンに取つてより善い配偶者であらうかといふこと、及び、宮中ではその問題を何う見るだらうかといふに過ぎ無かつたのだ。尤も、その問題のさういふ高い水準まで上ることが能き無いで、その企畫は、結婚の神聖を濫用するものだと思つた或る潔癖な人はあるにはあつた、けれども、さういふ人々は、數も少なく、そして、口を噤んで居た、所が、大多數は、エレンの幸福の問題や、孰がエレンに取つてより善い配偶者であらうかといふ問題に興味を寄せたのであつた。夫が生きて居るのに、妻が他に結婚するのは、正しいか、悪いかといふやうなことは、論ぜられ無かつた、何故だといふと、さういふ問題は、確に、（所

謂る「貴下や私よりはもつと賢い」人々には、疑ふべき問題では無かつたらしく、で、さういふ人々の決定の是非を疑ふのは、自分の無學や、世間見すなことを、曝け出すことになるかも知れぬ虞があつたからであつた。

自分の息子たちの一人に逢う爲めに、その夏彼得堡へ来て居たマアリヤ・ツミイツリエヅナ・アフロオシモフが、衆皆と反對した意見を遠慮無く公言した唯だ一人の人であつた。舞踏會でエレンに出會つて、マアリヤ・ツミイツリエヅナは、部室の真中でエレンを引き止めた、そして、一般の沈黙の最中で、突慥貪な聲で、エレンに云つた――

「亭主を取り換へやうとして居るさうだね。お前さんは、新流行を始めやうと思つて居るんだらう。だが、お前さんが最初では無いんだよ、奥様。それは、極く古い思想ですぞ。奴等は同なじことをします、總ての……」

さういふ言を云つて、マアリヤ・ツミイツリエヅナは何時も特質の恐ろしい權幕で廣い袖をたくし上げて、四邊を嚴かしくさうな顔で見返りながら、舞踏室を横切つて歩いて去つた。

人々は、マアリヤ・ツミイツリエヅナを恐れて居たけれども、彼得堡では、人々は、マアリヤ・ツミイツリエヅナをば道化者扱にして居た、で、その言語全體の中で、人々は、最後の卑野な

言語のみを耳に留めた、そして、その言語の全要點がそのうちにのみあるのだと、想像して丁まつて、相互に囁語で、その最後の言語を繰り返したのであつた。

公爵ヴァシイリは、近頃は、自分が云つた事を随分度々忘れて、同なじ語句を百度も繰り返すやうになつて居た、で、娘に逢う度毎に、彼は何時も斯う云つた――

「エレン、お前に話して置き度いことがある」と、彼は、娘を傍へ引張つて行き、そして、娘の腕を下の方へ引いて、云ふのであつた。「私は然る企畫の噂を聞いたよ、それは、彼の何に……關する、ね。ねえ、お前、父親としては非常に嬉しいことなのだ、お前が、ね、……何だといふことを聞くのはね。お前は随分苦勞した。だが、お前、孰く篤くとお前の真心に聞いて極めるが宜いよ。私がお前に話して置き度いのは、それだけなんぢや」

で、何時も何時も同なじものであつた感情を隠して、彼は、娘の頬へ自分の頬を押し付けて、娘と別れた。

頼才家としての名聲を未だに失は無かつたピリイピンは、エレンの無私な朋友であつた、即ち、華々しい女たちの後立としては、何時も見られる朋友等の一人、決して、戀人の位地へと上つて行くことの能き無い男朋友的の一人であつた。或る日、「小さい、別戀者の集會」で、ピリ

イビンは、自分の朋友のエレンに、結婚問題に對する自分の意見を話して聞かせた。

「ねえ、ピリイビンは、何時も、ピリイビンの種類の朋友をば、その姓氏で呼び掛けるのであつた)で、エレンは指輪を箱めた白い指で、ピリイビンの上衣の袖へ、觸つた。『私を妹だとして見て、私が何う爲たら宜いのか、教へて下さいませんか?。二人のうちの孰?』」

ピリイビンは、眉の上の皮を皺に爲た、そして、唇に微笑を持つて、考へ込んだ。

「それは、私に取つては不意討で有りません、ねえ」と、彼は云つた。『信友として、私は貴女の事件を、幾度も考へましたよ。ねえ、若し、貴女が若い皇族に結婚すれば』——(若い方の結婚申込者)彼は、指を屈めた——『貴女は他の一方と結婚する機会を失ひます、さうすると、貴女は宮中のご機嫌を損ひます。(其所には何か知らの關係があるんです、ね)。けれども、若し、貴女が年取つた伯爵の方と結婚なれば、貴女は、彼の人の晩年を幸福に爲てお遣りなさる譯です。で、それから、傑い人の未亡人となつて……公は貴女と結婚して損は決して無いでせう……』で、ピリイビンは、自分の顔から皺を消して了まつた。

「貴下は眞正の朋友ですわねえ」と、エレンは、晴々しい顔になつて、云つて、今一度ピリイビンの袖に、觸つた。『ですけども、實は、私兩方を愛して下さるので、で、孰も不幸福に爲度

く無いんですもの。私、兩方の幸福の爲めには、私の生命を捧けても宜いと思つてますわ」と、エレンは、思ひ切つたことを云つた。

ピリイビンは、肩を揺つて、さういふ難局に對してさへ、彼は救濟法を教へ得るのだといふことを見せた。

「多情婦奴。遠慮無く云へばそれなんだ。此女は一遍に三人と結婚し度がつてる」と、ピリイビンは思つた。

「けれども、貴女のご良人のこの問題に就てのご意見は何うなんですわ?」と、彼は、云つた、といふのは、自分の名聲の安固な爲めに、其様な率直なことを尋いても、自分の不信用を來たす虞は、少しも無かつたからなのであつた。『承諾なさいますかね?』

「え、彼の人は、私を非常に好いて居るんですよ」と、エレンは、何ういふ理由からかして、ピエールまでも自分を崇愛して居るのだと想像して居て、云つた。『彼の人は、私の爲めには何でも爲て呉れますわ』

ピリイビンは、警句を出す前觸に、顔を擧げた。

「離婚でも?」

エレンは哄笑つた。

その企畫れた結婚の是非に敢て疑を挾れた人々の間に、エレンの母親、公爵夫人クラアギンが居た。公爵夫人は、何時も、自分の娘に對して嫉妬の苦痛を感じて居た、で、今、さういふ嫉妬の根據が、自分には一番可愛い者であるのだから、何うしても、それを堪え切ることができ無かつた。

公爵夫人は、露西亞の僧に、夫の生きて居るうちに、女が、離婚するとか、再縁するとかいふことが、何れ程まで可能なことだかと、いふ事を、聞き合はせた。僧は、それは全然不可能だと、公爵夫人に保證して、聖書の中の、(僧にはさう見えた)夫の生きて居るうちに、妻の再縁を明白に禁じてある條下を、公爵夫人に教へたので、公爵夫人は大喜悦であつた。

何うしても論破し難いものだと思はれたさういふ議論を提げて、公爵夫人クラアギンは、娘一人居る所へ行かうと思つて、或る日の朝早く、娘のうちへ馬車を着けた。

エレンは、母親の異議を終末まで黙つて聞いた、そして、溫和しい皮肉の笑顔を爲た。

『ね、そら、出されたる婦を娶る者も……』と、判然と云つてあるぢやア無いかね』

『あら、母上様、冗談でせう。貴女は、お解りになら無いのよ。私の位地では私には種々義

務があるんです……』と、エレンは云ひ始めて、露西亞語から佛蘭西語に移つた、何故だといふと、前者の國語では、何時も、自分の事情を瞭然と言ひ表はすことが能き無いことを感じたからであつたのだ。

『でも、お前……』

『あら、母上様、貴女は、斯ういふことがお解りになつて居無い爲めよ、それはね、宥恕をお與へになる權利をお持ちの神聖な父が……』

その途端に、エレンの家に住まつて居た伽相手の婦人が、殿下が客室へ來て居て、エレンに逢ひ度いと云つて居るといふことを、取り次ぐ爲めに、入つて來た。

『いゝえ、不好意思、私お目にかゝりませんと申しあげてください、私は、約束を守つてくださら無いのを、甚く腹を立て、居ますつて』

『伯爵夫人、何様な罪に對しても慈悲が有るものですよ』と、麻色の髮の、長い顔の、長い鼻の若い男が云つた。

老公爵夫人は、その男が入つて來ると、叮嚀に立つて、會釋を爲た。若い男は、公爵夫人の方は見も爲無かつた。公爵夫人クラアギンは、娘に向つて、頷づいて、戸口へと泳いだ。

「左様、彼の子の云ふのが眞實だ」と、老公爵夫人は思った、公爵夫人の總ての確信は、その舞臺へ殿下が表はれた爲めに消散してしまつたのであつた。「彼の子の云ふ通りだ、だけれども、私どもの若い時分——最早常久に去つてしまつた——その時分は何うだつたのだらう、私どもは、斯様なことは少しも知ら無かつた。で、眞個に何でも無い程單純なものだねえ」と、公爵夫人クラアギンは、馬車の裡へ身體を落着けながら、思つたのだ。

八月の始めには、エレンの事情は極まりが付いた、で、エレンは、自分の夫（エレンが、自分に非常に深く戀着して居ると想像して居た）へ、自分がN・Nに結婚する積りだと知らせる手紙を書いた。エレンは、又、自分が唯一の眞正の宗派に改宗したことを知らせて、離婚を爲ることに關する一切の必要な手續を踏んで呉れと、頼み、それに就ては、その手紙の持参者から、尙詳しく話させることにしてあるからと、書いてやつた。「私は、神が、彼の神聖な力強き保護の下に貴下を保ち給はんことを祈ります。貴下の信友、エレン」

この手紙は、ビエールがポロデノオの戰場に居た間に、ビエールの家へ達いたのであつた。

(一八)

ポロデノオの戦の終期に於て、ビエールは、二度目にラエーフスキイ砲臺から逃げ出し、そして、兵卒の群集と一緒に、コニヤズコヴァの方へと、溪間を横斷つた。其所で、彼は、救護所の天幕に達した、で、血を見たり、叫喚や、唸り聲を聞いて、前方へと急いで、兵卒の亂集の裡へ捲き込まれてしまつた。

ビエールが、彼の心全體を以て望んだ唯だ一つの事柄は、彼がその日感じた恐ろしい感覺から逃れて人生の日常状態に歸つて、そして、屋内で自分自身の寢床に靜に眠ること、あつた。彼は、人生の日常状態の裡に於てのみ、自分は、自分自身及び、自分が見たり、感じたりするこの總てを、理解し得るのだと感じた。が、人生の日常状態は何處にも見出さるべくも無かつた。彼が騎つて行つて居た路には、銃丸も砲彈も唸つて居はし無かつたのだが、それでも、彼は其所でも、戰場と同じ光景を見た。何處にも、同なじ苦んで居る、儘れ切つて居る、そして、時には異様に無頓着な、幾つもの顔があつた、何處にも、同なじ血と、兵卒等の外套と、遠距離ではあるが、それでも、同なじ恐怖を起させる砲聲の同なじ轟音が、あつた。その上に、暑

さと、塵埃があつた。

モザアイスク路を三露里程歩いてから、ビエールは、路傍に坐つた。

夜のさまじい影が、地上へ落ちて來始めた、そして、砲の轟音も止んだ。ビエールは腕を突いて、長いこと横になつて、薄暮の裡で自分の傍を過ぎて行くさまじい影を見詰めて居た。彼は、絶えず、砲弾が、恐ろしい唸り聲をして、自分の上へ落ち掛つて來るやうな気が爲て居た。彼は、愕然として、起き直つた。自分が何れだけ長く其所に居たのか、一向分ら無かつた。夜の最中に、樹の枝を引摺つて、三人の兵卒が、ビエールの傍へ落ち着いて、火を焚き始めた。

ビエールの方を横眼でジロ／＼見ながら、兵卒等は、火を點けて、その上へ鍋を置き、その裡へ乾菓を碎き込み、そして、豚脂を少し入れた。旨さうな、脂ぎつた食物の心持の好い香が烟の嗅と混り合つた。ビエールは、起ち上がつて、溜息した。兵卒等——三人であつたのだが——は、自分等ばかりで、食つたり、相互に話したりして居て、ビエールの方には少しも構は無かつた。

「お前は孰の隊の者なんだい？」と、兵卒等の一人が不意にビエールに尋いた、この間で、丁度ビエールが考へて居た事柄を暗示したらしかつた。「お前、腹が空つてるんなら、少し遣る

せ、だが、チャンとした人間だか何うだか、判然云つて呉れよ」

「私かね？……」と、兵卒等に近い、彼等と餘り甚く身分の違ひ過ぎ無いやうに見せる爲めに、能きだけ自分の社會上の位置を低くする必要を感じて、ビエールは云つた。

「私は、實際民兵の將校なんだが、私の隊は何處にも見え無いんだ、私は、戦に出て來て、戦友たちに、はぐれて了まつたんだよ」

「やれ／＼。それは何うも」と、兵卒等の一人が云つた。

今一人の兵卒は、頭を振つた。

「もし、宜くば、雑炊を少し食りませんか」と、最初の兵卒が云つた、そして、木の食七を喋めて、それをビエールに渡した。

ビエールは火の傍に蹲んだ、そして、鍋の裡の食物を食ひ出したが、それは、彼がこれまで味はつたうちの一番旨い料理のやうな気が爲た。彼が、鍋の上におつ被さつて、食七滿々づつ、幾度も口へ入れ、一生懸命に幾杯も続けざまに食つて居る間に、兵卒等は、黙つて、彼を見詰めて居た。「何處へ行く積りだね？。云つて聞かさない」と、兵卒等のなかの最初の男が再尋いた。

「モザアイスクへ」

「お前さん、旦那衆かね？」

「左様だよ」

「で、お前さんの名は何てえんだね？」

「ビョートル・キリイロヴィーチ」

「ちやア、ビョートル・キリイロヴィーチ、一緒に来なさい、其所へ伴れてつてあげるから」
真の闇の裡を、兵卒等とビエールはモザアイスクへと歩いた。

彼等が、モザアイスクへ着いて、険しい小山を町へと登り始めた時には、鶏が鳴いて居た。
ビエールは、自分の旅舎は小山の麓にあつたので、それを通り越して了まつたのを全然忘れて了まつて、兵卒等と一緒に歩いて行つた。若し、彼が、その途中で、自分の馬丁に計らず行逢は無かつたのであつたら、彼はそれに気が付かずに居るところであつた——それ程彼は何か他の事を考へ込んで居た——で、その馬丁は、ビエールを町へ探しに行つて、空しく今引返して来た所であつたのだ。馬丁は、闇で輝つて居たビエールの帽子で以つて、ビエールをそれと見分けたのであつた。

「閣下」と、馬丁は叫んで、「いや、何うも、私どもは、最早到底お目には掛れまいと諦めて

居りましたせ。何うして、お徒歩でおいでなさるんです？。それに、まア、こりやア一體何處へ入らつしやらうといふんです？」

「やア、成る程……」と、ビエールは云つた。

兵卒等は立ち止まつた。

「やア、では、知つてる者に逢ひなすつたんだね？」と、そのうちの一人が云つた。

「ちやア、左様なら——ビョートル・キリイロヴィーチ、と云ひなすつたね？」

「左様なら、ビョートル・キリイロヴィーチ」と、他の聲々が云つた。

「左様なら」と、ビエールは云つた、そして、馬丁と共に、旅舎の方向へと振り向いた。

「彼者等に、何か遣る方が宜かア無いか」と、ビエールは思ひながら、衣囊を探つた。「いや、遣ら無い方が宜い」

旅舎には一部室も無かつた、何れも一杯であつた。ビエールは、庭へ出て、頭を全然包んで、自分の馬車の内で、横になつた。

枕に頭を着けるや否や、ビエールは眠つて行くのを感じたが、不意に、殆ど現實のやうにまざ／＼と、砲のブーン、ブーン、ブーン、ブーンといふ音や、唸り聲や、叫喚や、落ちる爆弾の鈍いドシンといふ音を聞き、血や、烟硝の臭氣を嗅いだ、そして、慄然とする感と、死の恐怖が彼を襲つた。

彼は、周章狼狽して眼を開け、外套から頭を出した。庭は全く静であつた。唯だ一つの物音は、門の所で門番と話を爲、泥濘をボチャ／＼やつて居る誰かの下僕の聲ばかりであつた。ビエールの頭上、暗い木の庇の下では、ビエールが起き直る爲めに爲た身動きに驚かされた幾羽かの鳩の羽叩く音が聞えた。旅舎らしい強い臭氣——ビエールに取つては、平和な暗示と、落ち着せる安堵に充ちた——干草、肥料、爹兒の臭氣が、庭ぢうに満ち渡つて居た。二つの暗い小舎の間には、澄み渡つた、星の多い空が少し見えて居た。

『有り難いぞ、彼様なことは最早全然終末だ』と、ビエールは、再頭を包みながら、思つた。

『いや、實に恐怖といふものは甚いものだ、俺がそれに打負けたのは、實に見苦しかつたな。けれども、彼の人々は……彼の人々、全然終末まで、確乎して、平然として居た……』と、彼は思つた。彼の人々といふのは、ビエールの心では、兵卒等、即ち、砲壘に居た者等、彼に食

物を呉れた者等、それから、聖畫に向つて祈つた者等を、指したのであつた。彼の人々——さういふ不思議な人々に就ては、彼はこれまで何にも知つて居無かつたのだが——その彼の人々といふのが、他の總ての人々から畫乎と區別されて、瞭乎と、彼の心の裡に立つた。

『兵卒になつたら、單に一兵卒になつたら』と、ビエールは、睡入りながら、思つた。

『彼の共同の生活へ俺の全存在を以て入つたら、彼の人々をして彼の人々が今有るところの者にならしめて居る物で、俺が満たされるやうになつたら。けれども、何うすれば、自己の裡にある餘計な、可厭な悪い一切の物、外部的人性の總ての重荷を投げ捨てる事が能きるのか？。嘗ては、さういふ者で俺が有ることが能きたかも知れ無かつたのだ。俺は、俺の思ひ通りに、父親の所から逃げ出したかも知れ無かつたのだ。俺は、ドロオホフとの決闘の後で、兵卒にされるのであつたかも知れ無いのだ』

すると、ビエールの想像の裡には、彼がドロオホフに決闘を挑んだ時の俱樂部の宴會の光景が、閃めき、それから、トルゾオクで自分の恩人に逢つた時のその人の姿が、閃めき出した。と、又、共済組合の會堂の嚴肅な集會が、彼の心の前へ出て來た。それは、英吉利俱樂部での事であつた。で、彼が知つて居る誰か、彼に近く、彼に取つて親愛な誰かが、卓子の終の所に着席

して居た。

「やア、彼の人だ。俺の恩人だ。が、確に死んだ筈だが？」と、ビエールは思った。「左様だ。彼の人は死んだんだ、そして、俺は、彼の人の生き返つたことを知ら無かつたんだ。彼の人死んだ時には、實に悲しかったが、彼の人再生き返つたのは、實に嬉しいぞ」

卓子の一方の側に、アナトオルや、ドロオホフや、ネスヴィイツキイや、デニソフや、彼等と同じ種類の人々が坐つて居た（ビエールの夢の裡では、それ等の人々は、ビエールが自分で彼の人々と呼んで居たそれ等の他の人々と同様に、他の人々とは引離れた一種類を成して居ただけで、アナトオルとか、ドロオホフとかいふやうなそれ等の人々は、大聲で怒號つたり、謔つたりして居た。が、彼等の騷擾の裡で、ビエールの恩人の何か云つて居る聲は善く聞えた、そして、その聲の響は、戦場の音のやうに重々しく且間斷の無いものであつた、が、それは、心持の好い、心を慰めるものであつた。

彼の恩人が何ういふ事を云つて居たのか、ビエールには解ら無かつた、が、彼は、彼の觀念の種類も又彼の夢の裡では判然と分たれて居たので、その恩人が、善のこと、及び、「彼の人々」のやうになり得る可能のことを、話して居るのを、知つて居た。で、「彼の人々」は、彼等の眞が裸で、寒いのに、氣が付いた。

彼は、耻かしく感じた、で、手で脚を隠さうと爲た、脚から實際外套が滑り落ちて居たのであつた。一寸の間、ビエールは、眼を開けて外套を引張り上げた、と、同なじ屋蓋、柱、庭が見えた、が、それは、今は、青味が、つた光で満されて、露だか、霜だかで、キラ／＼して居た。

「夜が明けかゝつてゐるな」と、ビエールは、思った。「が、其様なことは何うでも宜い。俺は、恩人の言語を聞いて、それを解し度いんだ」

彼は、再外套に纏まつた、が、其濟組合の正餐會も、恩人も最早出ては來無かつた。残つたものは、言語で瞭然と言ひ表はされた思想、觀念のみであつた。誰かの聲が話して居たのか、ビエールが考へて居たのか、孰らだか分ら無かつた。

後になつてそれ等の思想を追想するといふと、それ等の思想はその日の印象の爲めに喚び起

されたものではあるが、ビエールには、それが、自分以外の誰かに因つて言ひ表はされたものだと、確信されたのであつた。

彼には、起きて居る時に、それ等の思想を持ち、さういふ形でそれを言ひ表はすことは、何うしても能き無かつたのだ、といふやうに思はれたのだ。

「一番難かしいことは、人間の意志を神の法則に従はせる事なんだ」と、誰かの聲が云つた。「眞率は神に對する服従だ、彼」から逃れやうは、何うしても無い。所で、「彼の人々」は、眞率だ。「彼の人々」は饒舌ら無いで、實行する。言ひ出される言語は銀だが、言ひ出され無い言語は黄金だ。誰でも、死を恐れて居るうちは、何物の主人でもあり得無い。で、有らゆる物が、死を恐れ無い人の支配の下に歸するんだ。苦難に因らなければ、人間は自分の局限を知らず、自分自身を知り得無い。一番難かしいことは「ビエールは、夢の裡でさう思つたか、聞いたか、孰かであつた」全體の意義を自分一個の靈の裡で合一させることなんだ。全體を合一するのは？と、ビエールは、自分自身に向つて云つた。「いや、合一するのは無い。人間は自分の思想を合一することは能き無い、さういふ總ての觀念を繋ぎ止めるのだ、全くそれなんだ。左様だ、人間は、一緒に繋ぎ合は無ければなら無い、繋ぎ合は無ければなら無い」と、ビエー

ルは、歡喜の戰慄を以て、自分自身に向つて繰り返して、それ等の言語が、そして、それ等の言語のみが、彼が言ひ表はし度いと思つて居た事柄を、言ひ表はし、彼の心を悩まして居た問題全體を解決したのだと、感じたのであつた。

「左様だ、人間は、一緒に繋ぎ合は無ければなら無い、今は繋ぎ合ふべき時機だ……」

「馬を繋げやうと思ひます、最早馬を繋げるべき時です、閣下。閣下」と、誰かの聲が、繰り返して居た、「馬を繋げませう、最早緩然しちやア居られませんか……」

それは、馬丁がビエールを覺して居たのであつた。太陽がビエールの顔へ眞向に照り付けて居た。彼は、塵埃だらけの旅舎の庭を一寸と見た、その眞中にある井戸で、兵卒等が彼等の瘠せた幾匹かの馬に水を遣つて居た、そして、荷馬車が幾個か門から動き出て居た。

彼は、非常に厭に思つて、顔を背けた、そして、眼を瞑つて、馬車の裡の座席で、再急いで圓くなつて臥た。

「いや、彼様なことは何うでも宜い、彼様なことは、見度くも、解し度くも無い、俺は、睡て居る間に、俺に向つて現はされた事柄を理解し度いんだ。今唯つた一秒で、それが一切解るところだつたんだ。けれども、今は、俺は何うすれば宜いんだ？。繋ぎ合ふ、けれども、何

ういふ風にして一緒に繋ぎ合ふんだ？」

で、ビエールは、自分が夢の裡で見たり、考へたりした事柄の意味全體が、何處へか消えて行つて了まつたことを感じて、慄然とした。

馬丁も、馭者も、門番も、一人の將校が、佛蘭西人がモザアイスクへ進軍中であり、我軍は退却して居るといふ報知を持つて、やつて來たのだと、ビエールに話した。

ビエールは、起き上つた、そして、馬車の準備を爲て、後から持つて來いと命じて置いて、自分分は、徒歩で、町を横斷つた。

軍隊は、數萬の負傷者を後へ遺して、行進を始めて居た。負傷者等は、家々の窓でも、見られ、又、庭や、街にも群れて居た。叫喚や罵り聲や、殴り合ふ音が、街で、負傷者を運ぶ爲めの荷馬車の周圍で、聞えて居た。

ビエールは、自分の知り合ひの負傷した將官を、自分の馬車へ乗せて遣つて、その人と一緒に、莫斯科へと向つた。その途中で、彼は、彼の義弟のアナトオルが死んだといふことや、公爵アンドレーが死んだといふことを、聞いた。

(一)

三十日に、ビエールは、莫斯科へ歸り着いた。殆ど都門のところで、伯爵ラストオブチンの副官に行き逢つた。

「やア、諸方貴下を探し廻つて居ました」と、副官は云つた。「伯爵が是非貴下にお目にかゝり度いと云つて居られます。非常な重大な事件だから、直ぐ貴下においでを願ひ度いといふことですよ」

自家へは行かずに、ビエールは、辻馬車を雇つて、總督の所へ駆け付けた。

伯爵ラストオブチンは、その朝、ソコルニキイの彼の夏別荘から、着いたばかりのところであつた。伯爵の家の前室も、應接室も、彼に喚び寄せられたか、で無くば、命令を求めに彼の所に来た、官吏等で充満であつた。ヴァシイルチュコフや、ブラアトフは、既に、伯爵に逢つて、莫斯科の防守は最早問題にならずに、市は降伏するだらうといふことを、報告した。その報知は、市民に向つては隠されて居たけれども、諸局長や、種々な種類の官吏たちは、莫斯科が直きに敵の手に落ちるといふことを、伯爵ラストオブチンがそれを知つて居たと全く同なじや

うに、知つて居た。で、さういふ官吏の總てが、自分等の責任を脱れやう爲めに、各自の擔當の官務を何う處分して宜いか、その方針を尋ねにと、總督のところへ來たのであつた。

ビエールが、應接室へ入つて行くといふと、丁度、軍からの使者が、伯爵との會見を終つて出て來るところであつた。

使者は、さまざまの間で、自分が圍まるのに向つて、絶望の風で、手を振つた、そして、部室を横斷つて、去つて了まつた。

自分が待つて居る間、ビエールは、部室に集まつて居た種々な官吏たち——若い、年取つたの、武官、文官、高官、下官——をば、疲れた眼で見守つて居た。誰も彼も、不安らしい態に見えた。

ビエールは、官吏等の一團の裡で、知り人が一人居るのを見付けたので、それへと行つた。ビエールに挨拶してから、彼等は、彼等の談話を續けた。

『いや、送り出しとして、再持つて歸るのは、別に差支は無いよ、だが、今の事態ではね、何だつて保證は能き無いかからね』

『でも、見給へ、斯ういふ書面ぢやア無いか』と、今一人が云つて、自分の手に携つて居る

印刷物を指した。

『それは、問題が別だ。それは、庶民どもに對して必要なものなんだからね』と、最初の男が云つた。

『何ですか、それは？』と、ビエールが尋いた。

『新しい布告です』

ビエールは、それを取つて、読み始めた。

『公爵殿下は、彼に合同せんとする軍隊に合同せんが爲めに、モザアイスクを過ぎて、敵が不意には何うしても攻撃し得無い強い陣地を占められた。四十八門の砲に、破裂弾を添へて、本市より殿下の許へ送つた、そして、殿下は、血の最後の一滴までを護いで莫斯科を守るべき事を宣言され、市街戦さへも行はれる積りであるのだ。兄弟等よ、裁判所が休止して居る事を憂うる勿、吾々は、吾々の方法を講じ無ければならぬ、で、吾々は、吾々自身の行り方で、悪行者等を處分しやう。その時が來れば、予は、幾人かの勇敢な徒輩を要するに至るだらう、が、今はその要は少しも無い、で、予は、未だ黙つて居る。斧は役に立つものだ、矛も、捨てるべきも

のでは無いが、何よりも良いのは、三叉熊手である、佛蘭西人は、裸麥の一束よりも重くは無いのだ。明日、正餐後に、予は、イヴェールスキイの聖母を携つて、聖カタリナ病院へ行つて、負傷者を見舞はう。其所で、吾々は、水浄めの式を行なはう、彼等は直ぐ癒つて了まう。予も、今は癒くなつた、予の隻眼はこれ迄疾かつたが、今は、兩方で善く見えるのだ」

「いや、軍人たちから聞いたのでは」と、ビエールは云つて、「市その者の裡では、到底も戦の能きるものではないといふことでしたし、それに、陣地は……」

「全く左様です、私も左様云はうと爲て居た所でした」と、話手が云つた。

「だが、それは、何ういふ意味ですね、予の隻眼はこれ迄疾かつたが、今は兩方で善く見えるのだ」といふのは？」と、ビエールが尋ねた。

「伯爵は、眼に麥粒腫が出来て居たんです」と、副官は云つて、微笑んだ、「で、伯爵は、私が、人民が事態が何様な模様なのか伯爵に尋きに来るところだと、云つたので、甚く慌てられたんです。いや、時に、伯爵」と、彼は、不意に、笑顔で、ビエールを呼び掛けて、「貴下はご一家内のご心配事があるといふ噂なんです、伯爵夫人、奥様が……」

「私は、其様なことは何にも聞きませんよ」と、ビエールは、無頓着に云つた。「貴下がお聞

きなすつたのは、何ういふ事なんですか？」

「いや、ねえ、噂なんぞといふ物は、何うも當になら無いものですよ。私は、聞いたことを唯だその儘に申し上げるまでですよ」

「何ういふ事をお聞きでしたかね？」

「いや、噂ではね」と、副官は再前と同じ笑顔で云つて、「伯爵夫人、貴下の奥様が、外國へ行かうとなすつておいでだといふんです。何うも始めから虚説らしい噂ですね」

「左様かも知れませんか」と、ビエールは云つて、憎然と四邊を見廻した。

「彼者は誰ですか？」と、彼は、尋いて、清潔な青い上衣を着た、大きい、雪のやうに白い髭と、眉毛の、赤ら顔の老人を指した。

「彼者？。いや、彼者は商人です、彼者は、料理屋の亭主で、ヴェレシチャギンといふ男です。布告の話はお聞きでせうね、多分」

「いや、では、彼者が、ヴェレシチャギンですかね」と、ビエールは、云つて、その老人の確乎した、穩かな顔を精しく見て、その裡に何か反逆の徴になるものがあるかと、探して居た。「彼者はその男ではありません。彼者は、布告を書いた奴の父親なんです」と、副官は云つ

た。「若者の方は、拘禁中です、随分奴に取つては甚い事になるでせうよ」

星章を着けた少さい老紳士と、頸に十字章を着けた獨逸人の官吏が、その一團へ加はつた。

「なか／＼混み入つた物語でさア、ね」と、副官は話して居た。「布告は今から二月前に出たんです。それが伯爵の前へ持つて来られました。伯爵からは、取調べろといふ命令が出たんです。所で、ガヴリイラ・イヴァニチが、捜査を爲しました、布告は六十三人の手を通つて来て居たんです。吾々は、その一人の所へ行つて、誰からお前は、此を貰つたのか？」と、訊きますとね、誰某からだといふんです。それから、その次へ行つて、訊くと、又誰某からだといふんです。左様いふ風で、到頭ヴェレンシチャアギンといふ……教育の碌に無い商人の息子の所まで手繰つて行つたんです、例の、可愛らしい色男の一人なんですさア、ね」と、副官は、微笑みながら云つた。「其奴も、誰から、此を貰つたのか？」と、訊かれたんです。吾々の方では、それを實際誰から持つて来たのか、分つて居たんです。其奴は、郵便局長より他の者から、それを貰つた氣遣は無かつたんです。ですが、その二人の間には、確に相談が出来て居たらしいんです。其の息子は、誰からも貰つた物では無い、全く自分一人で作つたんだと、云ふんですな。で、脅さうが、詰問しやうが、何處までも、自分で書いたんだと、強情を張るんです。で、事

件が報告されました。それで、伯爵が、その男を喚び出されました。「誰からお前は、布告を貰つて来たかね？」と、私が自分で書きました。所で、ご承知の通りの伯爵のことですからね」と、副官は、誇りと、嬉しさの笑顔で、云つた。「伯爵は非常に腹を立てられました、何しろ、奴の無禮、虚言、頑強といふのは、無かつたんですからね」

「あ、伯爵は、其奴にクルウチャリヨフから貰つたのだと云はせ度かつたんですね」と、ビエールは云つた。

「い、や、決して左様ぢやありません」と、副官は、ギョツとした態度で、云つた。「クルウチャリヨフは、それが無しでも、他に免がられぬ罪を澤山持つて居ました、それなればこそ、彼奴は追放されたんです。が、それは左に右、伯爵は甚い立腹でした。何うしてお前にこれが書けたんだ？」と、伯爵は、云はれます。伯爵は、卓子の上に在つた「ハムブルグ公報」を取り上げられました。「見ろ、此れだ。お前は、それを作つたんだやア無い、翻譯したんだ、而も間違だらけの翻譯だ、お前は佛蘭西語さへ知ら無いんだから、痴人奴」。所が、何うでせう、諸君、「い、え」と、其奴は云ふんです。私は何の公報も決して讀んだことはありません、私が作りましたんです。「けれども、左様だとすれば、お前は、逆徒だ、俺はお前を裁判所へ送

るぞ、お前は絞罪になる。誰から、それを貰らつたのか、云つてしまへよ。」「私は、何の公報も見ません、私が作りましたんです。事件は、其れ限りになつて居ます。伯爵は、父親を喚び出しました、けれども、其奴も同なじ物語を繰り返すに過ぎません。息子を審問して、其奴は、重懲役に處せられたと思ひます。今、父親は、息子の爲めに哀訴しに來て居るんです。けれども、息子の奴は、無用な、若い悪黨なんです。甘かされて育つた商人の息子の風といふのは、何方もご存じでせう、全たくの色男、女殺です、何か二つ三つ講演を聴いて、それで誰よりも傑くなつた氣で居る奴なんですからね。全くの若い無頼漢なんです。父親の方は、カアメソニイ橋で、飲食店を開いて居るんですが、店には、ご承知でせうが、隻手に笏を持ち、隻手に帝國を持つた宇宙の支持者たる神の大きい畫像があるんです、所が、奴は、その像を自宅へ四五日持つて行つて居たんです、で、何うでせう、諸君、奴はそれを何うしたと思ひますね。奴は、何處かの下手畫家を雇つて來て……」

(十一)

この新しい物語最中に、ビエールは總督の許へ喚ばれた。

彼は、伯爵ラストオブチンの書齋へ行つた。ビエールが入つて行くと、ラストオブチンは、顔を擧げて、自分の額と眼を撫でた。一人の背の低い男が、何か云つて居るところであつた、が、ビエールが入つて行くや否や、止めて、出て行つた。

「やア、善うこそ、盛なる勇者」と、他の男が、部屋を出て去つてしまふや否や、ラストオブチンが、云つた。『君の勇猛な行爲のことは、今聞いたよ。いや、話はそのことでは無い。君、これは此所だけの話だがね、君は共済組合員かね?』と、伯爵ラストオブチンは、嚴しい調子で云つた、さういふものであるのは罪惡であるのだが、俺は宥してやる積りだぞといふ意味を見せた調子であつたのだ。

ビエールは、何とも云は無かつた。

「君、私は、十分に調べさせて、善く知つて居るよ、私は、何處にも彼處にも共済組合員が居るのは知つて居るよ、君は、人類を善くするといふ主張の下に、露西亞を滅亡させやうと爲て居る彼様な奴等の仲間ぢやア無からうね」

「え、私は共済組合員です」

「いや、それでは、君、善く聞き給へ。君は未だ多分知るまいけれども、スベラアンスキ

イヤ、マグニツスキイが、處分——彼等に相當なもの——を受け、クルウチャリヨフ其他の奴等も同なじやうなことに爲つたんだ、奴等は、ソロモンの宮堂を建てるといふ辭柄の下に、自分等の祖國の宮堂を破壊しやうと爲て居たんだ。さういふ處分を爲るには、歴然とした據りどころが有るのは、勿論さ、若し危険な人間で無かつたら、私が、郵便局長を追放する譯は無いちやア無いか。所で、私の耳に入つたところでは、君は、彼の男を君の馬車で、市を退去させ、それから、彼奴の書類を保管して居るといふぢやア無いか。私は、君が好きだ、君に對しては何の悪意も持つて居無い、それに、君は私の年齢の半分にしきやなら無いんだから、私は、父親のやうに、君に勸めるんだがね、彼様な奴等とは一切關係を絶つてしまひ給へ、そして、能きだけ早くこの市を去つてしまひ給へ」

「ですが、クルウチャリヨフの罪といふのは何ですかね？」と、ビエールは尋いた。

「それは、私の方の爲事だ、君の間ふべき事ぢやア無い」と、伯爵ラストオブチンが叫んだ。

「彼の男がナポレオンの布告を配布させたといふのでしたら、その罪にはまだ證據が擧つて居ません……」と、ビエールは、ラストオブチンの顔を見ずに、云つた。「それから、ヴェレンツァアギン……」

「それだ」と、ラストオブチンは不意に口を挟んで、顔を顰めて、尙一層聲高く怒號つた。

「ヴェレンツァアギンは逆徒で、虚言者だ、罰を受けるのは、自業自得だ」と、彼は、人々が侮辱を受けたことを憶ひ出す時に云ふやうな、如何にも怨重なつて居るやうな態度で、云つた。「いや、私は、私の行爲を非難して貰う爲めに、君に來て貰つたんでは無い、君に忠告しやうと思つて、君を喚んだんだ、その忠告は、或は、命令と云つて宜いかも知れ無いのだ、君の考慮次第でね。何卒、君、クルウチャリヨフなんぞの連中とは一切關係を絶つて、そして、市を去つて呉れ給へ。さうすれば、私は、愚劣な考慮をば、發見し次第、奴等の頭の裡から叩き出してやる」さう云つたところで、伯爵ラストオブチンは、未だ何の罪も犯して居無いベズウホフに對して、餘り烈しい調子で物を云つて居るといふことに、氣が付いたらしく、ビエールの手を親しげに撃つて、斯う云ひ足した。「吾々は國難の前宵に居るんだ、用談に來る誰に對しても叮嚀なことを云つて居る間隙が無いんだ。私の頭は時々全然ぐるぐる廻るんだ。おい、君、君は何う爲るね、君自身のこととは？」

「いや、何にも爲ません」と、ビエールは、尙且眼を下げたまゝで、彼の夢みて居るやうな顔の表情を少しも變へずに、云つた。

伯爵は顔を擧げた。

「信友の忠言だよ、君。逃げ給へ、能きだけ早く、これが、私の忠告だ。善く聴く人には好運が来る。左様なら、君。やア、時に」と、彼は、戸口でビエールを呼び戻して、「伯爵夫人が、ゼズイットの師父等に捉まつて了まつたといふのは眞實かね？」

ビエールは何とも返答し無かつた。彼は、顔を擧めて、未だ嘗て無かつた程腹を立て、ラストオブチンの部室を歩み出た。

家へ歸り着いた時には、暗くなりかけて居た。それ／＼異つた種類の人が八人、その晩、彼に面會を請うた。それは、委員會の書記、民兵のビエールの大隊の大佐、執事、支配人、それから、請願に來たその他の數人であつた。さういふ人々は残らずビエールが決し無ければならぬ用談にやつて來たのであつた。ビエールはさういふ人々の間も何の事やら解し得ず、又、それに對して何の利害も感じ無かつた、で、さういふ人々を早く歸して了まはうといふ目的ばかりで、問に答へたのであつた。

到頭彼は獨になつた、で、妻の手紙の封を破つて、それを讀んだ。

「彼の人々」——砲臺の兵卒等——や、公爵アンドレエーは、殺された……老人……眞率は、神の意志に従ふことだ。人間は苦難を受け無ければならぬ……全體といふものの意義……人間は一緒に繋ぎ合はなければならぬ……俺の妻が結婚しやうとして居る……人間が、忘れて、理解し無ければならぬことは……」

で、衣服を脱がずに、彼は、寢床へ跳び込んだ、そして、直ぐに就睡して了まつた。

彼が次の朝目を覺ますといふと、執事が入つて來て、伯爵ベズヴホフは市を去つて了まつたか、或は、去らうと爲て居るか、を調べる爲めに伯爵ラストオブチンから差遣された警察官吏が階下に来て居ることを、取り次いだ。

十二人程の種々な人々が、用事でビエールに逢はうと、客室で待つて居るのであつた。ビエールは、急いで、衣服を着た、そして、さういふ人々には逢ひに行かずに、裏階段を駆け降りそれから裏門を通つて、街へ出て去つて了まつた。

その時から莫斯科の占領が終るまで、その行方を種々と手を盡して探したに拘らず、ベズヴホフ家の誰もが、ビエールを見無かつたし、又、彼が何處に居るかを、知ることが能き無かつた。

(十二)

ロストオフ家の人々は、九月一日、即ち、敵が市に入る前の日まで、莫斯科に居残つて居た。ベエティヤが、哥薩克騎のオボレエンスキイ聯隊に入つて、その聯隊が兵を集めて居たビイエリイ・ツエルコフへ去つて了まつてから以來、伯爵夫人は、恐怖の狼狽に陥つて了まつた。息子が兩方とも戦争に出て居ることや、彼等が二人ながら自分の羽翼の下から遁げ出て去つて了まつたことや、彼等の孰かが——いや、自分の知り合ひの婦人の三人の息子のやうに、二人とも一遍にかも知れ無いのだが——何時殺されるかも知れ無いといふ考案が、その夏始めて、残酷に現然とした風で、伯爵夫人の想像を驚かしたやうであつた。

伯爵夫人は、ニコラアイを喚び返さうと爲た、それから、ベエティヤを追掛けて自分が行くか、彼得堡で彼の爲めに何か官務を得て遣るか、爲やうと思つた、が、さういふことは何れも同なじやうに不可能に見えた。ベエティヤは、彼の聯隊が歸つて来るか、今現務に就いて居る他の聯隊へ彼が移されるかで無ければ、返つて來させることは能き無かつた。ニコラアイは、戦地の何處かに居た、そして、公爵嬢マリイヤと出會つたことを詳しく云つてよこした手紙以來、何

の音信も無かつた。

伯爵夫人は、夜睡られ無かつた、そして、眠るといふと、息子が殺された夢を見るのであつた。

種々と話し合ひ、朋友とも度々相談してから、伯爵は到頭伯爵夫人を安心させる一策を思ひ付いた。彼は、ベエティヤをば、オボレエンスキイ聯隊から、莫斯科附近で造られて居たベズウホフの聯隊へ、移させたのであつた。それでも、ベエティヤは尙且軍隊に居たのではあるが、その移動の爲めに、伯爵夫人は、少くとも再自分の羽翼の下に一人の息子を見ることが出来る。持つた、で、伯爵夫人は、再とベエティヤを自分の手許から逃さ無いやうに爲て置いて、彼が戦に出るやうな虞の更には無いやうな位地を何時も彼に得させることに成功しやうと思つた。

ニコラアイの方は、危なげな位地に居た時には、伯爵夫人は、自分が、他の兒ども等よりは長男を一番愛して居るやうな氣が爲た（で、それが爲めに、幾許か良心の苛責を受けたのであつた）が、末の息子の、何時も稽古を怠けた、何時も悪戯で、誰もを虐待めた、漂々者のベエティヤ、獅子鼻の、道化たやうな黒い眼の、血色の好い、和かな柔毛が頬部へ見え出したばかりの、自分の小さいベエティヤが、自分の手許から逃げ出して、何處かで何物の爲めかで戦ひ而

もそれを楽しんで居るやうなそれ等の大きい、恐ろしい、残酷な男たちの仲間へ入つたことになつて見れば——今、さうなつて見ると、その息子が他の子たちよりも眞に、すつと眞に、母親たる自分に取つては、可愛いやうに思はれるのであつた。待ち焦れて居たベエティヤが莫斯科へ歸つて来る時が近づけば近づく程、伯爵夫人の不安がだん／＼甚くなるのであつた。伯爵夫人は、眞個、それ程の嬉しさに逢ふまで決して生きて居ることは能き無いやうに思つたのであつた。ソオニヤが傍に居ることのみならず、自分の氣に入りのナタアシヤや、夫が傍に居るのが、伯爵夫人には腹立たしかつた。

「彼様な人たちが私には何になるものか、ベエティヤの外は誰も要ら無い」と、伯爵夫人は思ふのであつた。

八月の終頃の或る日に、ロストオフ家ではニコライからの二度目の手紙を受け取つた。彼は、補充馬を得る爲めにヴォロネエスへ遣られて居て、其所から手紙をよこしたのであつた。この手紙が、伯爵夫人を安心させはし無かつた。一人の方の息子に危険が無いことになつたと知るといふと、伯爵夫人は、ベエティヤのことを尙一層心配しだしたやうであつた。

八月の二十日までは、ロストオフ家の知り合ひの人々は殆ど残らず莫斯科を去つてしまつ

たけれども、誰も彼も、能きるだけ速く去つてしまへと、伯爵夫人に勤めやうとしたのだけれども、伯爵夫人は、自分の寶であるところの大切の——ベエティヤが歸つて来るまでは、去ることを承知し無かつた。

八月の二十八日に、ベエティヤが歸り着いた。母親がそれで以つて彼を迎へやうと爲て居た病的に熱烈な優しさは、十六歳の將校に取つては少しも満足では無かつた。母親が、最早二度と自分の羽翼の下から彼を通しはし無いやうにしようといふ量見は隠して居ただけけれども、ベエティヤは母親の計畫を看破つたで、母親が自分を和か過ぎるものにするに、自分を「愚人」左様彼はそのことを心の裡で云つて居たのだに爲て了まうのを本能的に虞れて、彼は、母親を少し冷然と扱ひ、母親の傍に居ることを避け、そして、莫斯科に居る間は、ナタアシヤとばかり遊んで居た、そのナタアシヤに對しては、彼は、何時も最も暖かな兄弟の愛情、殆ど崇愛に近いやうなものを、を持つて居たのであつた。

伯爵は、何時もの特質の投げ遣りで、二十八日になつても、市を去る準備を少しも爲て無かつた、で、家から有らゆる財産を運び出す爲めに、莫斯科やリヤザンの領地から来る筈になつて居た荷馬車は、艱然三十日になつて着いた。

二十八日から三十日まで、莫斯科が、混雑、騒動の極であつた。毎日、ポロディノの戦場からの數千の負傷者が、ドロゴミイロフ門から運び入れられて、莫斯科を通り抜けて、持つて行かれ、住民や、その財産を満載した幾個もの馬車が、市の反對の側の諸門から、駈け出て行くのであつた。

ラストオブチンの諸揭示に拘はらず——それとは全然關係無しに起るのか、それとも、或はその爲めに起るのか——最も不思議な、最も相矛盾したさまじい風説が、市ちうに行なはれて居た。誰も市を去ることは禁せられて居ると云ふ者があれば、又、總ての聖像が寺院から取られて、誰も彼も、強て莫斯科から追ひ出されるのだと主張する者があつた。或る者どもは、ポロディノの後で、今一つ戦があつて、それでは佛蘭西軍が全く破られて了まつたのだと云ひ、他の者どもは又、露西亞軍が全滅して了まつたと云つた。或る者どもは、僧たちを眞先に立て、三丘へ進んで行く筈であつた莫斯科の民兵のことを話し、他の者どもは又、師父アウギヌスチンが市を去ることを禁じられたとか、逆徒等が捉まつたとか、農夫等が暴動を起して、市を去つた人々を掠奪して居るとか、いふやうなことを、囁くのであつた。

が、さういふことは總て唯だ物語のみに過ぎなかつた、實際に於ては、莫斯科を放棄するといふことに極めたファイリの會議が未だ開かれ無かつたうちであつたのに、誰も彼も——市を去りつゝあつた人々も、止まつて居た人々も——遠慮無く口へこそ出しては云は無かつたけれども、莫斯科が降服するのだとは、感じて居、そして、各自大急ぎで逃げ出して、自分等の財産を助けて了まは無ければならぬのだと、感じて居た。

全般的崩壊と大變動が来るに違ひ無いといふ感じが在つた、けれども、九月の一日までは、何も彼も、何の變化も無く、行つて居た。絞首臺へ牽いて行かる、罪人が、今一分のうちには自分が死ぬるのだと知つて居ながら、四邊を眺め廻し、頭の上で曲つて居る帽子を直すのと同じに、莫斯科は、人生の通常の状態が終局になつて了まう滅亡の時が近づきつゝあるとは覺つて居ながら、本能的に人生の日常徑路を尙且たどつて居たのであつた。

莫斯科の占領に先き立つ三日の間、ラストオブ家の家内ちうが、さまざまに實際上の爲方に忙がしく取り掛つて居た。家族の長の伯爵イリヤ・アンドレーチは、絶えず町ちうを馬車で乗り廻して、行なはれて居る總ての風説を聞き集め、それから、家に居る間は、出發の準備に對する皮相的な、思慮の足らぬ指圖を爲るのであつた。

伯爵夫人は、荷造りを爲すべき物品を揃へることを、監督して居た。伯爵夫人は誰に對しても

不機嫌であつた、そして、始終ベエティヤの後を追つ掛けて居たが、ベエティヤの方は、何時もそれを逃げて居て、ナタアシャと一緒に彼の時の全體を送つて、母親の嫉妬心を刺戟したのであつた。

物品を荷造りさせる實際の爲事をやつて居たのは、唯だソオニヤ一人であつた。が、ソオニヤは、この頃は、殊に黙り込んで鬱ぎ勝ちであつた。公爵嬢マリイヤのことを書いたニコライの手紙が來るといふと、伯爵夫人は、ニコライが公爵嬢マリイヤに出會つたのは、神の直接の仲介だと云つて、非常に喜んだのだが、その席に、ソオニヤは居たのだ。

「私は、眞個には嬉しく無かつたのだよ」と、伯爵夫人は云つて、「公爵アンドレーがナタアシャと約婚した時はね、だけれども、私は、何時もニコライが公爵嬢と結婚すれば宜いと思つて居たのさ、私は、必然さうなるといふ氣が爲て爲方が無かつたよ。さうなれば、眞個に宜いことなんだがねえ」

ソオニヤは、それは眞個その通りだと感じた、ロストオフ家の状態を救ふことの能きる唯だ一つの手段は、ニコライが金持の娘に結婚することであつて、そして、公爵嬢がニコライに取つては非常な好い配偶なのだ、感じたのだ。

が、その考想は、ソオニヤに取つては甚く苦しいものであつた。自分の悲しさに拘はらず、いや、或はその爲めであつたかも知れぬが、ソオニヤは、家内の物品を選び分けたり、荷造を爲たりする難かしい爲事を引き受けた、そして、毎日々々終日それに忙しく掛つて居たのであつた。

伯爵も、伯爵夫人も、何か指圖を爲無ければならぬ場合になると、何時もソオニヤに頼むのであつた。

ベエティヤとナタアシャは、ソオニヤとは全然反對に、自分等の両親の手助けになることは何も爲無いで、反つて、大抵誰も邪魔に爲り、唯だ妨害になつたのみであつた。で、終日、家ぢうに、その二人の駆け歩く足音や、叫聲や、閑氣な騒ぎの金切り聲が、響き渡つて居た。彼等は、哄笑を爲るやうな事由があつたが爲めに、笑つたり、騒いだりしたのでは、決して無かつた。唯だ、彼等は、心の裡が快活で、嬉しかつたのだ、だから、起つて來る事が何でも彼でも、彼等に取つては、快活さや、哄笑の種になるのであつた。

ベエティヤは、自分が、男兒で家を出て、今は、好い若者（左様誰もが彼に云つた）になつて歸つて來たが爲めに、それから、自分が自家に居た爲めに、現務に直きに就く望の少しも無い

ビイェリイ・ツエルコフを去つて、二三日経てば戦のある莫斯科へ歸つて来たが爲めに、それから、殊に、自分が何時もその人の爲る通りに爲て居たナタアシャが、非常な上機嫌であつたが爲めに、自分も上機嫌であつたのだ。

ナタアシャが快活であつたのは、自分の悲しさが餘り長かつたのに、今はその悲しさを憶ひ出させるやうな物が何も無くつて、自分は再全然健全になつて居た爲めであつた。ナタアシャの快活であつた今一つの理由は、ナタアシャは、自分を崇愛する者を誰か持つて居無いで居られ無かつたのだが（他の者からの崇愛は、車輪の脂のやうなもので、それが無いと、ナタアシャの機械は決して十分に滑かに運轉し得無かつたのだ）、今は、ベエティヤが自分を崇愛して呉れて居たからであつた。

それから、何よりも彼によりも、二人とも、快活であつたのは、莫斯科の全くの入り口で戦がありさうであつたことや、城壁の所で戦闘があることになつて居たことや、武器が配布されつゝあつて、誰も彼もが駈け廻つて居ることや、全く非常な何事か——さういふことのあるのは、殊に若い人々に取つては、何時も痛快に思はれるのだ——が起らうと爲て居たことなどの爲めであつた。

(十三)

土曜日、八月三十一日には、ロストオフ家の家ぢうが引つくり覆されるやうな騒ぎであつた。何處の戸口も開け放されて居て、有らゆる家具が動かされたり、擔ぎ出されたりして居、姿鏡や、繪が取り下されて居た。部屋々々は、幾個もの箱や、干草や、包み紙や、繩が、散らばつて居た。農夫等や、家内の隸僕等が、荷物を擔いで、寄木細工の床をドン／＼踏んで通つた。前庭には、農夫等の前馬車が群れて居て、最早荷物を高く載せて、繩の掛つて居るものもあれば未だ空虚のまゝで立つて居るものもあつた。

僕従等や荷馬車に附いて来た農夫人等の非常な群集の聲や足音が、前庭や、家ぢうへ、響き渡つて居た。

伯爵は、朝早くから、不在であつた。伯爵夫人は、音や、騒ぎの爲めに、頭痛が爲て来た、で、酔に浸した壓定巾を頭に附けて、新しい喫煙室で臥て居た。ベエティヤは家に居無かつた、兼て一人の同僚と、民兵から、戦地に居る聯隊へ、移して貰はうといふ企畫を爲て居て、その同僚に逢ひに行つたのであつた。ソオニヤは、大廣室で、陶器、硝子器の荷造りを、監督して

居た。

ナタアシヤは、道具の無くなつた自分の部室で、衣服や、平紐や、襟飾の積層の間で、床に坐つて居た。ナタアシヤは、手に古い舞踏服を持つて、床の上で、身動きもせずに、凝乎と見詰めて坐つて居た、それは、今は流行後れになつて居るが、自分が、最初の彼得堡の舞踏會へ出た時のその衣服であつたのだ。

ナタアシヤは、家の裡の誰も彼もがそれ程忙しいのに、自分ばかり何にも爲無いで居るのは耻かしかつた、で、その朝は幾度か何か爲やうと爲たのであつたが、自分の心がそれに向て居無かつた、一體、ナタアシヤは、自分の全心、全靈魂がそれへ注がれて居るので無ければ、何事を爲ることも全然能き無かつたのであつた。

ナタアシヤは、ソオニヤが、陶器の荷造りを爲して居る間、ソオニヤの上から被さるやうに立つて、手傳はうと爲て居た、けれども、直ぐそれを投げて了まつて、自分の物品を荷造りしやうと、自分の部室へ歸つて行つた。最初のうちは、女中たちに衣服や、平紐を遣るのを面白がつて居たのであつたが、その後で、残つて居る物品を掲げる段になるといふと、それが面倒くさくなつた。

「ヅウニヤシヤ、これを悉皆拵けてお呉れね？。宜くつて？。宜くつて？」

で、ヅウニヤシヤが、快く、ナタアシヤの爲めに、悉皆それを拵けることを引き受けて呉れるといふと、ナタアシヤは、古い舞踏服を手に持つて、床の上に坐つた、そして、その時自分の心を占領すべき筈であつた事柄とは眞然離れた問題を夢みだした。自分が落ちた沈思の裡から、ナタアシヤは、次の部室での女中たちの話し聲や、その部室から裏階段へと行く急いだ多勢の足音で、喚び覺まされた。ナタアシヤは、起ちあがつて、窓から戶外を見た。

負傷者を満載した荷馬車の大きい列が、街に止まつて居た。

女中等や、従僕等や、女中頭や、年取つた乳母や、料理人等や、馭者等や、馬丁等や、厨僕等が、悉皆門々に出て、負傷者を眺めて居た。

ナタアシヤは、白い手巾を髪の上へ投げ冠つて、両手で兩隅を持つて、街へ出て行つた。

年取つた女中頭の、マアヅラ・クズミイニシナが、門に立つて居る群集の間を出て、上へシナの皮の蓆の覆物を掛けた荷馬車の傍へ行つて居た。女中頭は、その荷馬車の裡に臥て居る顔の蒼い若い將校と話して居た。ナタアシヤは二三歩前方へ出た、そして、手巾に手を掛けたまゝ、で、オツ／＼と立ち止まつて、女中頭の云つて居ることを聽いて居た。

「では、莫斯科には誰も知つた人が無いんですか？」と、マアヅラ・クズミイニシナは云つて居た。「何處かの座敷へ入つた方が樂でせう……私どもの家でも。主人の方たちは、今日お發ちなんですから」

「いや、それが許るして貰へるか、何うか分らんのだよ」と、將校は弱々しい聲で云つた。

「彼者が私どもの主任將校なんだ……彼の人に尋いてください」で、彼は、今丁度振り返つて、荷馬車の列に沿うて、街を歩いて來るのであつた肥つた少佐に指しした。

ナタアシャは、怖々な眼付で負傷した將校の顔を覗いた、そして、直ぐ少佐の方へと行つた。

「負傷者たちは、私どもの家に居ても宜いでせうか？」と、ナタアシャは尋いた。

少佐は、笑顔になつて、帽子に手を舉げた。

「何ういふご用ですか、お嬢様？」と、彼は、云つて、眼を圓くして、微笑んだ。

ナタアシャは、落着いて疑問を繰り返した、そして、手巾の隅を尙且捉へて居たけれども、

ナタアシャの顔と舉作全體が何處までも眞面目であつたので、少佐は、微笑を止めて了まつて、一寸の間——何ういふ程度に於て、それが可能であるか、自問して居るかのやうに——考へ込んで居た後で、肯定的の返答を、ナタアシャに與へた。

「え、勿論です、それは宜しうございます」と、彼は云つた。

ナタアシャは軽く點頭を爲た、そして、依然若い將校につくつく同情した態で話して居たマアヅラ・クズミイニシナの所へ、速歩で歸つて行つた。

「宜いつて、彼の人宜からうと云つたの」と、ナタアシャは囁いた。

覆被を爲た荷馬車の裡の將校は、ロストオフ家の前庭へ、向つた、それから、負傷者の荷馬車の十二輛程が、住人たちの招きに從つて、ボヴァアルスキイ街の家々の入口へと乗り付け始めた。ナタアシャは、日常生活とは全然異つた状況で、新な人々と交渉を持つのを、如何にも嬉しがつて居るらしかつた。ナタアシャは、マアヅラ・クズミイニシナと一緒になつて、自分たちの庭へ、能きるだけ多くの馬車を入らせやうと骨折つた。

「ですが、父上様に申しあげませんでは」と、マアヅラ・クズミイニシナが云つた。

「愚劣なことよ、愚劣なことよ。何で構うものかね？。一日ぐらゐ、私たちは客室へ行つて居りやア宜いぢや無いの。私たちは、彼の人たちに家の半分だけを悉皆貸して遣れるんだわ」

「まア大變なことを仰やいますね、その次は何様なことを仰しやるでせうね？。別家は宜いでせう、従者衆の部室、乳母の部室は宜しうございませう、それにしても、貴嬢はお許を受け

ていらつしやら無ければいけませんよ」

「あゝ、私尋いて来るわよ」

ナタアシヤは、家へ駆け込んだ、喫煙室の半開きになつて居た戸へと、足を爪立て、行くと、其所では、酢とホフマン液の強い臭氣が爲て居た。

「睡んでいらつしやるの、母上様？」

「あゝ、何うして睡られなんぞするものかね」と、伯爵夫人が云つたが、實は、その時丁度うつら／＼しかけて居たのであつた。

「母上様、私の好きな母上様」と、ナタアシヤは云つて、母親の傍に跪いて、母親の顔へ自分の顔を凭たせかけた。「済みませんわねえ、ご免なさいよ、私最早二度とは爲ませんからね、お睡つてるところを起すなんて。マアヅラ・クズミイニシナがさう云ふもんだから、私來たのよ、負傷者たちを伴れ込んだのよ、將校たちよ、許可してくださいさる？。何處も行くところの無い人たちの、母上様許可してくださいさるでせう、ね……」と、ナタアシヤは、息も次かすに、速語に云つた。

「將校だつて？。誰が伴れ込まれたんですね？。私には何の事だか解ら無いぢや無いか」と、

伯爵夫人は云つた。

ナタアシヤは哄笑つた、伯爵夫人も微弱に微笑んだ。

「許可してくださいさるでせう、ね……ぢやア、左様云つて来るわ」で、ナタアシヤは、母親に接吻して、起つて、戸口へと行つた。

廣室で、ナタアシヤは、悪い報知を携つて歸つて來た父親に行き會つた。

「吾々はぐす／＼して居過ぎたよ」と、伯爵は、聲に我知らず怒氣を含ませて、云つた、「俱樂部も閉鎖て了まつたし、警官も市を去つて居るところなんだ」

「父上様、家へ少し負傷者たちを入れてやつても宜いでせう、ね？」と、ナタアシヤは云つた。

「勿論、構はん」と、伯爵は憤然して云つた。「が、左様なことは最早何うでも宜い。何卒下らんことにかゝらはずに、荷物をこしらへて、發つことの手傳を爲てお呉れ——明日發つ爲めの……」

それから、伯爵は、給仕長にも、從僕等にも、同なじ命令を與へた。ベエティヤは正餐時に歸つて來た、彼も、種々な物語を聞いて來たのであつた。

彼は、亂民がその日内廊で武器を執つたことや、ラストオプチンの掲示には最二日経つて命令すると云つてあつたに拘らず、總ての人民が次の日に武装して三丘へ行くといふことに、實際の手筈は出来て居て、其所で大戰が行はれるのだといふことを、話した。

伯爵夫人は、左様いふことを人々に話して居る息子の熱心な昂奮した顔を、慄然と恐がつた態で、見て居た。伯爵夫人は、若し、自分がベエティヤをこの戦に出無いやうに勸やうと爲たら（伯爵夫人は、ベエティヤが何れ程この戦に出られるといふことを樂みに爲て居たか知つて居たのだ）、彼が男の義務とか、面目とか、祖國の爲めとかいふやうなことを——不合理な、男性的な、變に捻ぢくれた何事か——を云つたらうし、さてさうなればそれに反對しても到底無益であつて、彼を戦に出さ無いやうにするといふ希望は全然無くなつて了まうことを、知つて居た。だから、この戦以前に出立して、自分等を途中守護するやうに、ベエティヤと一緒に伴れて行つて了まひ得るやうにと思つて、伯爵夫人は、息子には何にも云はずに置いて、正餐が済むと、良人を傍へ喚んで、涙を滾しながら、能きだけ早く、若し能ければその夜にでも、自分を伴れて市を出て呉れろと、懇請した。戀の本能的な、女性的な、詐略で以つて、伯爵夫人は、その時までは、心配の一寸とした微さへ見せ無いで居たのに、その時になると、人々がその夜直ぐ發

つて呉れ無ければ、自分は恐怖の爲めに死んで了まうかも知れぬと、云ひ出した。

伯爵夫人は、實際、今は、虚偽では無く、何も彼も恐がつて居たのであつた。

(十四)

自分の娘に逢ひに行つて来たマダム・シヨツスが、ミヤスニツキイ街の酒類商の店で見えたといふ光景の物語が、伯爵夫人の恐怖をますます強めた。マダム・シヨツスは、歸途に、その街へ入るといふと、酒類商の店の周圍に暴れて居る亂民の爲めに、その街を通ることが能き無かつたのだ。

マダム・シヨツスは、辻馬車を雇つて、迂回路を爲て歸つて来たのだが、馭者の物語では、左様しろといふ命令が出たので、亂民は酒桶を叩き開けたのだと云ふのであつた。

正餐後に、ロストオフの一家ぢうが、一生懸命な急ぎで、荷造を爲て、出發の準備を爲ることに、かかりだした。老伯爵も、不意に眼を覺して爲事の捨て置き無いに気が付き、その日ぢう絶えず前庭から家へと往つたり來たりして、急いで駆け廻つて居る僕従どもに、無順序な指揮を怒號り、彼等をば尙一層急がす程に爲せやうと爲て居た。ベエティヤは、庭に出て居る

物の方を引き受けた。ソオニヤは、伯爵の前後矛盾勝ちな命令の爲めに顛倒はされて了まつて何うして宜いのか分ら無いやうに爲つた。僕従たちは、部室を駆け廻り、大聲を挙げ、喧嘩しをして、ワア／＼騒ぎ立てた。

ナタアシャも又、何様な事を爲る場合でもその特質であつたところの熱心で以つて、不意に爲事にかゝりだした。最初のうちは、ナタアシャの手出しは、半信半疑で迎へられた。

誰あつて、ナタアシャから本氣な事を期待せず、ナタアシャの指圖に従はうとは爲無かつた。が、熱中と、忍耐で以つて、ナタアシャは、何處までも人々に自分の指圖を聴かせやうとし、人々が自分に構ひ付けぬのを、怒り、殆ど泣きさうになるまで口惜しがつた、で、到頭、人々に感動を與へ得たのであつた。

ナタアシャに取つて非常な盡力を要したと同時に、一方では、ナタアシャの權威を動か無いものと爲たナタアシャの最初の功績は、毛氈の荷造りであつた。家には、高價なゴブランの壁掛と波斯毛氈があつたのだ。ナタアシャが爲事にかゝりだした時には、二つの箱が蓋の開いたまゝで廣室に立つて居た、一つは、陶器が殆ど一杯詰まつて居て、今一つの方には、毛氈が詰まつて居た。卓子の上には未だ多數陶器が置いてあり、そして、物置部室から未だもつと持つ

て來られる筈であつた。まだ今一つの箱が入用であつた、で、人々はそれを取りに行つて居た。

「ソオニヤ、少しお待ちなさいよ、彼方の箱が無くつても、悉皆詰めて了まへるわよ」と、ナタアシャが云つた。

「到底駄目ですせ、お嬢様、最早やつて見たんです」と、従僕が云つた。

「い、え、少し待つてお呉れよ、何卒ね」で、ナタアシャは、紙に纏んである盆や、皿を引き出し始めた。

「皿は此方の毛氈と一緒にの方が宜いわ」と、ナタアシャは云つた。

「いや、三つの箱にやア入り切りません程の毛氈が未だ残つて居りませア」と、従僕が云つた。

「でも、少し見て居てご覧よ、ね」で、ナタアシャは、速く、手際よく、物品を擇り分け始めた。此様なのは要ら無いの」と、キイフ製の盆を指して云ひ、「これとこれは、毛氈の間へ入るわ」と、サキソニイ製の皿を擇り出して、決定した。

「さア、其様なことは捨てときなさいよ、ナタアシャ、さア、それで澤山よ、彼方のを荷造

りませうよ」と、ソオニヤが、謹責めるやうに、云つた。

「お嬢様、何うも困りますな」と、従僕が異議を云つた。

が、ナタアシャは、聞き入れ無かつた。ナタアシャは、何も彼も引摺り出した、そして、ざらな毛氈や陶器は更に持つて行くには及ば無いのだと決断して、再良い物ばかりを手速く荷造り爲始めた。

何も彼も引摺り出してしまつて置いて、ナタアシャは、持つて行くべき分だけを、再荷造りし始めた、で、持つて行くだけの價値の無い廉價の品物を殆ど總て擇り捨て、了まうといふと、價格の有る物品全體が二つの箱へ入ることになった。唯だ毛氈の詰まつた方の箱の蓋が閉まら無かつた。二つ三つの物品を出して了まう方が宜かつたらしかつた、が、ナタアシャは、自分の流義でやつ付けて了まはうと爲た。ナタアシャは、品物の包を紆き、又包み、或はぎうぐ推し込み、爲事を手傳はせる爲めに引つ張つて來た従僕とベエティヤに、蓋を推し付けさせ、ナタアシャ自身も躍起となつて、同なじやうに推したのだ。

「最早お止しなさいよ、ナタアシャ」と、ソオニヤはナタアシャに云つた。「そりやア貴女の見込み通りよ、だけど、まあ、一番上の物を除つておしまひなさいよ」

「嫌よ」と、ナタアシャは叫んで、隻手ではほつれ掛る髪を汗の流れて居る顔から押し除けながら、今一つの手で毛氈をぎうぐ押し付けた。「壓してくださいよ、ベエティヤ、壓してくださいよ。ヴァシリイチ、思ひ切つて壓しとくれよ」と、ナタアシャは叫んだ。毛氈が押し付けられた、そして、蓋が閉まつた。

ナタアシャは、手を叩いて、叫んで嬉しがつた、涙が眼へ出て來た。が、それはホンの一秒の間であつた。ナタアシャは、直ぐ新な爲事に取り掛つた、それから、最早従等はナタアシャに全く信頼して了まつた、で、彼等が、ナタアシャ・イリイニツシナが、伯爵の命令を無効にするやうな指圖を爲たことを伯爵に話した時にも、伯爵はそれを何とも思は無かつた、さういふ風で、僕従たちは、荷馬車に最早一杯積めたかとか、荷を縛り付けて宜いかとか、いふやうなことを尋きに、ナタアシャのところへやつて來るのであつた。荷造りは、ナタアシャの監理のお蔭で、ドン／＼抄取つて行つた、不用な物は何も彼も捨てられ、一番大切な物ばかりが、能きるだけ十分に荷造りされた。

が、人々のさういふ有らゆる盡力を以てしても、夜遅くまでかゝつても悉皆の準備は出來あがら無かつた。伯爵夫人は睡て了まつた、で、伯爵は、朝まで出發を延して、寢床へ入つた。

ソオニヤとナタアシヤは、衣服を脱すに、喫煙室で睡た。その夜、今一人の負傷將校が、ボヴァアルスキ街を馬車で来た、門に立つて居たマアヅラ・クズミイニシナは、その將校をロストオフ家の庭へ伴れて來させた。負傷將校は、マアヅラ・クズミイニシナの考慮では、なかく重い身柄の人らしかつた。彼は、車蓋を下して膝掛で全然蓋はれた四輪馬車に乗つて居た。老人の非常に品格のある侍僕が、駟者と一緒に駟者臺に坐つて居た。醫者と、二人の兵卒とが、今一つの馬車で、後から隨いて來て居た。

「私どもの家へおいでなさい、お入りなさいよ。お上の方々は、お發ちのところですよ、家ぢうが空いてるんですから」と、老女は、老僕に聲を掛けて、云つた。

「え」と、侍僕は、答へて、溜息して「それに、實は、家まで生かして行くことの能きる希望は無いのです。私どもは、莫斯科に邸宅は有るのですが、此所からは未だなかく有りますし、それに、今其所にも誰も居ませんのでな」

「何卒、お入りなさい、私どもの主人たちは、何も彼も澤山持つておいでですよ、貴方がたのおいでなさるのを喜びますから」と、マアヅラ・クズミイニシナは云つた。「旦那は甚くお疾いんですか、それでは？」と、老女は尋いた。

「最早危篤しいですよ。醫者に尋いて見ませう」で、侍僕は駟者臺から跳び降り、今一つの馬車へ行つた。

「あゝ、結構だよ」と、醫者は云つた。

侍僕は、再四輪馬車へ行つて、裡を覗き、頭を振つて、庭へ馬車を入れるやうにと駟者に云ひ付け、そして、マアヅラ・クズミイニシナの傍に立ち止まつた。

「主耶蘇基督、慈悲を垂れ給へ」と、老女は口の裡で云つた。

マアヅラ・クズミイニシナは、負傷者を主家へ入れたら宜からうと云つた。

「主人方では何とも仰しやりはしません……」と、老女は云つた。

が、昇降段の上へ負傷者を擔ぎ上げる譯には行か無かつたので、人々は負傷者を別家へ擔いで行つて、マダム・ショツスの部屋であつたのへ彼を入れた。

この負傷將校は公爵アンドレーエであつた。

(十五)

莫斯科の最後の日が来た

それは、麗らかな秋の日であつた。それは日曜であつた。鐘が、總ての他の日曜と全く同じやうに、總ての寺院で、勤式の爲めに、鳴つて居た。誰あつて、莫斯科の上に落ちて來つ、ある事柄の意義を覺つて居るものは未だ無いらしかつた。

社會の狀態のうちに、莫斯科のその時の狀況を指し示めす徴といつては唯だ二つしか無かつた、それは、烏合の民衆、即ち、貧民と、種々の物品の時價であつた。

職工、家内の隸僕、農夫等が、その朝早く、非常な群集を爲して、それに又、番頭や、紳士や、紳士等が加はつて、ますますその大きさを増して、三丘へ出て行つた。彼等は、其所で少時ラストオブチンを待つたが、來無かつたので、莫斯科は何うしても敵の手に渡されるといふ確信を得て了まつて、亂民は莫斯科の居酒屋や、酒店の近傍へと散らばつて行つた。

物價も、その日には、事態の傾向を指示した。武器や、荷馬車や、馬などの時價、黄金の價格は、だん／＼騰貴つて行くのであつたが、紙幣の價格や、町で入用な品物の時價は、ドン・ドソ下落つて行くのであつて、正午頃になると、辻馬車の馭者が、高價な物、例へば反物のやうな物をば、平常の半價で買つて行つたといふ實例が少く無くなることになり、又、一方では、それに反して、農夫の馬一匹が五百露貨で買はれ、家具、鏡、青銅物などは、無代で貰へるやう

なことになつた。

ロストオフ家の古風な、裝飾の多い家の内では、人生の有らゆる平常狀態の崩れて了まつたことは、極く一寸としか眼に見え無かつた。非常な數の僕従のなかで三人だけが、夜の間逃げて了まつたが、何にも盜まれた物は無かつた。ロストオフ家の人々は、田舎から持つて來させた三十の荷馬車が、非常な價値のものになつて、多くの人々に羨まれ、非常な金額で譲り受け度いと云ひ込む者があるのを見て、始めて、物品の比較上の價格が變つたことに氣が付いたのであつた。さういふ買手だと稱する人々の外に、前の晩ちう、及び九月一日の朝早くから、從卒等や、僕従たちが、負傷將校等からロストオフ家の前庭へ絶えず遣され、又負傷者等が、ロストオフ家や近邊の家々から、身體を引摺つて其所へ來て、ロストオフ家の僕従等に向つて、自分たちを莫斯科から伴れ出して呉れるやうに、懇願した。

さういふ懇願を受けた給仕長は、自分では負傷者等を氣の毒には思つただけれども、悉皆頭から刎ね付けた、そして、自分は何うしても伯爵には其様なことは仄めかすことさへ爲はし無いと、言ひ切つた。さういふ負傷者等の身の上は如何にも氣の毒には相違無かつたが、若しさういふ人々の爲めに、荷馬車一つ渡すことになれば、やがて悉皆の荷馬車を渡すことになり

「乗り馬車さへもその人々の用に供さなければならなくなるのは明白であつた。荷馬車三十では、負傷者残らずを救ふことは能き無いたのであつた、で、誰も残らず危険に臨んで居る場合には、人は自分のことや、自分の家族のことを第一番に考へざるを得無いのだ。斯ういふ風に給仕長は自分の主人の爲めを思つて、論断したのであつた。」

その朝目が覺めるといふと、伯爵イリヤ・アンドレーチは、朝まで起きて居た妻に眼を覺まさせぬやうにと、寢室からソツと脱け出した、そして、薄紫色の絹の寢衣のまゝで、昇降段へ出て來た。

荷を積んだ幾個もの荷馬車が前庭に立つて居た。幾個かの乗り馬車が昇降段の所に列んで居た。給仕長は、入口に立つて、年老つた従卒と、吊紐で腕を吊るして居る顔の蒼い若い將校とを相手に話を爲て居た。給仕長は、自分の主人を見るといふと、その二人に去れといふ意味の明白な、斷乎した手眞似を爲た。

「おい、最早何も彼も宜いか、ヴァシリイチ」と、伯爵は、自分の禿頭を撫でながら、云つた、そして、將校や従卒を親切さうに見て、その二人に目禮した。(伯爵は何時も新しい顔が好きであつた)。

「最早直ぐ馬を附けますばかりでございませう、閣下」

「うん、そりやア結構だ、伯爵夫人も直きに起きる、で、都合が好ければ、發つよ。何かご用ですか、貴下？」と、彼は、將校に向つて、云つた。「貴下は私の家にお宿りですか？」

將校は、近寄つて來た。彼の蒼い顔が不意にカツと赤くなつた。

「伯爵、實に恐れ入つたお願ですが、何うぞ……後生です……貴下の荷馬車の何れかへ私を乗せて頂き度いんです。私は、何にも持つて居ません……お荷物と一緒に結構なんです……」

將校の言語が終はら無いうちに、従卒も、主人の爲めに同なじことを頼まうと、傍へやつて來た。

「え、宜しい、宜しい、宜しい」と、伯爵は、大急ぎで云つた。「喜んで承知しました。」

ヴァシリイチ、宜しくやつて呉れ、一つ二つ荷馬車を空けろ……うん……うん……必要なものが、將校の顔へバツと出た感謝の様子が、彼の命令を決定させた。伯爵は四邊を見た、何處にも彼處にも——庭にも、門にも、別家の窓にも——負傷者や、従卒等が見えるのであつた。

彼等は悉皆、伯爵を見て、昇降段へと動いて来るのであつた。

「何卒、美術室の方へおいでくださいませんか、閣下、彼所の繪を何う致したら宜しうございませうか？」と、給仕長が云つた。

で、伯爵は、彼と一緒に家へ入りながら、一緒に伴れて行つて呉れと頼んで居る負傷者等を斷つてはならぬといふ指圖を繰り返して云つた。

「荷物を幾何か降したら宜からう、なア」と、彼は、傍聞をされては大變だともいひさうな態で、低くした、神祕らしい聲で云ひ足した。

九時に、伯爵夫人が目を覺ました、と、結婚するまでは伯爵夫人附の女中であつた、そして、今は、伯爵夫人の爲めに警務長の役目をやつて居たマツロオナ・ティモフエーナが、マダム・シヨツスが非常に困つて居ること、若い婦人たちの夏衣を持つて行かぬ譯には行かぬであらうといふことを、伯爵夫人に報告しに入つて來た。

伯爵夫人がマダム・シヨツスの怒つて居る理由を尋ねるといふと、その婦人の革函は荷馬車から下されて了まつたし、荷馬車が皆な荷を下されて居るし、そして、何時も直きに欺され易い伯爵が、自分たちと一緒に伴れて行つてやると承諾した負傷者等に、荷馬車を明け渡すのであ

つたが爲めに、荷物が取り下されて居るといふのらしかつた。

伯爵夫人は良人を喚びに遣つた。

「何うしたことなんですね、良人？、荷物を下して居るといふぢやありませんか？」

「いや、それはね、お前、そのことは話さうと思つて居つたのだがね……私の可愛い、小さい伯爵夫人……一人の將校が私のところへ來てね——彼等は、負傷者に荷馬車一二輛貸して呉れと、懇願して居るのだよ。吾々に取つては、左様しては金銭が損になるのは分つて居るのだがね、勿論、だが、取り残されるとね……それが彼等に取つては何ういふことになるだらうか、それを思へば實に氣の毒千萬ぢや無いかね……彼等は、所もあらうに吾々の庭に居るのだ、吾々の方から入れと云つたのだ、將校等も居るのだよ……ねえ、私は眞個に思ふのだがね、お前……まア、彼等に荷馬車をやらうぢや無いかね。吾々は、別に急がんでも宜いのだからね」

伯爵はオド／＼して云つた。彼は、問題が少しでも金銭に關することだといふと、何時でも左様であつたのだ。伯爵夫人は、その調子には慣れて居た、それは、何時も、例へば、家の裡へ新に、美術室とか、植物室とか、劇場を造へるとか、奏樂團の養成を爲るとか、いふやうな、

自分の小兒等の利益にさしはりのあるやうな何事かを持ち出すものであつたのだ、で、伯爵夫人は、何に依らず、その調子で話し込んで来る物には一切反對することを、自分の習慣に爲す、さう反對するのを自分の義務だと見做して居たのであつた。

伯爵夫人は、涙を含んだ忍従の態を装つた、そして、良人に云つた――

「ねえ、伯爵、良人のなさり方が悪かつたので、吾々は、何にも無くなつてしまつたではありませんか、それに、此度は、吾々の――いえ、あの、小兒たちの――財産を残らず投げ捨ててしまはうとなさるんですね。もし、良人、家には十萬露貨もするだけの品物があると、良人ご自身のお口で仰しやつたではありませんの。私は何うしても反對です、何處までも反對ですよ。良人。何うなるものですか。負傷者たちのことを見るのは政府の爲事ぢやありませんか。彼の人たちもそれは承知でせう。まア、考へてもご覽なさい、お向うのロブウヒン家では、一昨日杖一本も残さず、家から持ち出して、去つてしまつたぢやありませんか。他の人々の爲方は、悉皆さうなんですわね。斯様なに愚物なのは、吾々ばかりなんですよ。私の爲めには何とも考へてはくださら無いにしても、良人、責めて何卒小兒たちの爲めを考へて遣つてくださいましな」

伯爵は、絶望して手を振つた、そして、何にも云はずに部屋を出た。

「父上様、何故其様なことをなさるのよ？」と、母親の部屋まで、父親の後を追つて来て居たナターシャが云つた。

「何でも無いよ。お前たちの口を出すべきことぢやア無い」と、伯爵は腹立たしげに云つた。

「でも、私聞いたわ」と、ナターシャは云つた。「何故母上様は承知し無いの？」

「お前たちの口を出すべきことぢやア無いのだといふのに」と、伯爵は叫んだ。

ナターシャは窓の所へ歩いて行つて、考へ込んで居た。

「父上様、ベルグが尋ねて来てよ」と、ナターシャは、窓から外を見て、云つた。

(十六)

ロストオフ家の婿のベルグは、今では最早大佐であつて、ヴラディイミルとアンの勳章を頸に掛けて居て、そして、依然、第一軍の歩兵の左翼の司令官の幕僚の次長のその又幕僚の次長といふ前と同じ安氣な心持の好い職に就て居たのであつた。

九月の一日に、彼は軍から莫斯科へ歸つて来た。

彼は、莫斯科には全く何の用事も無かつたが、軍のなかの誰も彼もが莫斯科へ行く爲めの賜暇を得て、其市で忙しさに何事か爲て居ることに、氣が付いた。で、自分も又、急を要する一家の用があるからと云つて、賜暇を請ふのが宜いと、思つたのであつた。

ベルグは、さる公爵の持物と寸分違は無い一對のすつきりした茸毛馬の附いた氣の利いた二輪馬車で、舅の家へ乗り附けた。彼は、庭の荷物を凝平と熱く見て、それから、昇降段を駆けあがりながら、清潔な手巾を取り出して、その中へ結び目を造らへた。

ベルグは、玄關から客室へと、泳ぐやうな急ぎ込んだ歩調で、駆け込んで、伯爵を抱擁し、ナタアシャとソオニヤの手に接吻し、それから、直ぐに姑の健康を尋ねた。

「健康のことどころかい、此様な時に。さア、軍の情報を私に話してください」と、伯爵が云つた。「退却して居るのかね、それとも、戦があるのかね？」

「吾々の祖國の運命が何うなるかは、全能の神のみが知り給ふのです、父上様」と、ベルグは云つた。「軍は、勇者的精神の最も熱烈な元氣で活氣づけられて居ります、で、唯今は、所謂、將帥たちが、會議を開いて居るのです。何うなることだか、誰にだつて分つて居ません。けれども、實際、父上様、吾々の勇者的元氣、露西亞軍の眞に古代ながらの勇氣、それは彼等

が——いや、それが、です」と、彼は云ひ直して——「二十六日の戦で表はしたのですが……え、何様な言辭を以てしても、その壯烈だつたことは十分には云ひ表はし得られんですよ。」（彼は、自分の前でこれに餘程似寄つた言辭を用いた或る將官がやつたのを見た通りに、自分の胸を叩いた——が、それは少し遅かつた、何故だといふと、將官が胸を叩いたのは、「露西亞軍」と云つたところであつたのだからだ。）「眞個のところ、父上様、吾々將校は、兵を激勵するどころの、話では無く、この……いや、左様だ、古昔ながらの勇氣のこれ等の働を抑制するのに、非常に骨が折れたのでした」と、彼は、調子に乗つて、語り進んだ。「將軍バルクレエー・ド・トオリイは、何處でも軍隊の先頭に立つて、危険を省み無かつたのです、實際の話ですがね。吾諸軍は、丘腹に配置されて居ました。所が、實に何うです。」で、ベルグは、自分が、その戦に就て繰り返して話されるのを聞いて居た物語を残らず話しました。

ナタアシャは、ベルグの顔のうちで何かの問題の解決を探して居るとも云ひさうに、ベルグを見詰めて居た、で、ナタアシャの眼がベルグを顛倒させた。

「詰まり、露西亞の兵が表はした勇者的精神は、如何なる賞讃も及ぶところで無く、又、筆紙の盡すべきところでも無いのであります」と、ベルグは云つて、ナタアシャを見た、で、

ナタアシヤの心を柔げやうとでもするかのやうに、彼は、ナタアシヤの何時までも疑乎と見詰めて居る眼に答へて、微笑んだ……「露西亞は莫斯科のうちに在るのでは無い、露西亞は、その國の兒等の心のうちに生きて居る」。え、父上様、何うですな？」と、ベルグは云つた。

丁度その途端に、伯爵夫人が、疲れ切つた、當惑した顔付をして、喫煙室から、入つて来た。ベルグは跳び上つて、伯爵夫人の手に接吻し、その健康を尋ね、そして、頭を同情的に振つて、伯爵夫人の傍に立つて居た。

「左様です、母上様、眞個のところ、今は何様な露西亞人に取つても、辛らい、悲しい時です。でも、何故左様までご心配なさるんですかね？。お發ちなさる間は未だ十分あるんです……」

「僕從たちが何ういふ積りで働いて居るのか、私には全然解かりませんよ」と、伯爵夫人は良人に向いて、云つた。「今の先、彼の者たちの云ふのでは、準備が何も出来て居無いんださうですよ。何うしても、誰か行つて、見張つて居無いぢや、無効ですわ。斯様な時になると、ミイテンカが居て呉れたらと、つくづく彼の男が惜しくなるんですわねえ。何時まで待つても限りはありませんわ」

伯爵は、何か返答を爲やうと爲た、が、それを強て控へたことの明瞭な態度で、起つて、一言も云はずに戸口へへ行つた。

ベルグは、その間に、鼻をかまうと爲るかのやうに、手巾を取り出した、そして、その中の結び目を見て、少時考へ込んで、悲しさうな様子で頭を振つた。

「それで、もし、父上様、折入つてお願がありますか……」と、彼は云ひ始めた。

「うむ？」と、伯爵は云つて、立ち止まつた。

「ホンの今先刻のことですが、ユスウポフの家の前を通りますとね」と、ベルグは云つて、笑つた。「執事、私も知つてる男なんです、それが、駈け出して來ましてね、家の道具を買つて呉れる氣は無いかと、私に尋くんです。私は入りました、いや、勿論、ホンの好奇心からなんでした、さうすると、小さい小箆の附いた化粧卓子がありました。ねえ、ヴェルウシカが何時か欲がつて、私と喧嘩になつて了まつた物と、丁度同なじやうな物なんではありませんか？」（ベルグは、我知らず、自分の家内の、非常に良い設備を、嬉しがつて居ることを表はす聲調になつて了まつた）。「而も、實に好い心持の爲る物なんですせ——え、英吉利製の隠し錠で、前方へ動く物なんではありませんか。で、ヴェルウシカが欲しいと云つた物其儘の物なんです。

ですから、私は、其物を買つて行つて、彼女を驚かしてやらうと思ふんです。お宅の庭には農夫が随分居るやうですがねえ。何卒、一人私の方へ貸してくださいませんか。賃銀は十分に遣りますよ、それから……」

伯爵は顔を顰めて、鼻を鳴らした。

「伯爵夫人に頼みなさい、私は命令を出さないのでから」

「もしご迷惑なんでしょう、何卒、お聞捨てに願ひますよ」と、ベルグは云つた。「唯だヴェーラの爲めに、さう爲て遣り度いと思ひますのでね」

「あゝ、五月蠅い、誰も彼も、畜生、畜生、畜生」と、老伯爵は怒號つた。「頭がぐる／＼廻るやうだ」で、彼は、部室から出て行つた。

伯爵夫人は泣き始めた。

「えゝ、眞個、恐しい時節ですなア、母上様」と、ベルグは云つた。

ナタアシャは、父親と一緒に、出て行つた、そして、何か面倒な問題に就いて心を定め兼ねても居るかのやうに、最初は父親の後から随いて行つた、が、やがて、引返して、階下へ駆けて行つた。

ベエティヤは、入口に立つて、莫斯科を去ることになつて居た農夫たちに武器を渡すことに、掛かつて居た。荷物を積んだ幾個もの荷馬車が未だ庭に立つて居た。そのうちの二つが捆げ繩を解かれて了まつて居た。そして、その一つの上へ、負傷將校が自分の從卒に扶けられて、這ひ上つて居るところであつた。

「彼事は何だつたか知つてますか？」と、ベエティヤは、ナタアシャに尋いた。(ナタアシャは、ベエティヤが、父親と母親とが喧嘩して居た事柄を指して云つたのだと知つた)。ナタアシャは返答し無かつた。

「父上様が負傷者たちに荷馬車全體を渡して遣らうとお思ひなすつたからなんだよ」と、ベエティヤは云つた。「ヴァシリイチから聞いたんだがね。それで、僕の考慮ぢやア……」

「私の考慮ではね」と、ナタアシャは、不意に殆ど叫ぶやうに云つて、凄じい權幕の顔をベエティヤに向けて、「私の考慮ではね、實に卑劣で、眞個に可厭なことだわ……何と云つて宜いか私には分から無いわ。吾々は下等な獨逸人の集合なのかねえ?……」

ナタアシャの咽喉が歎歎でブル／＼震えた、が、弱くなつて了まつては、若くは、自分の憤怒の勢を失なつては不好と思つたのか、向直つて、驀地に階段を飛び上つて行つた。

ベルグは、伯爵夫人の傍に坐つて、孝行な叮嚀さで、伯爵夫人を安心させやうと骨折つて居た。伯爵は、手に烟管を携つて、部室の裡を歩き廻つて居た、と、其所へ、憤怒で顔を擦撃せて、ナタアシヤが、暴風のやうにその部室へ跳び込んで来て、速い歩調で母親の傍へと駆け寄つた。

「卑劣ですよ。眞個に可厭なことだわ」と、ナタアシヤは叫んだ。「貴女の命令だつて筈は無いわよ」

ベルグと伯爵夫人とは、驚いて、顛倒つて、ナタアシヤを見詰めた。伯爵は、窓の所で立ち止まつて、耳を傾けた。

「母上様、左様なことは有る筈が無いわ、庭の状態を見てご覧なさいよ」と、ナタアシヤは、叫んだ、「彼の人たちは置いてかれます……」

「何うした事だね？。彼の人たちつて誰のことなの？。何うして呉れとお云ひのかね？」

「負傷者たちのことだわよ。其様な筈は無いわ、母上様、無法だわ。……いゝえ、母上様、私の可愛い母上様、それは全然間違つてる事よ、ご免なさいよ、母上様、何卒ね、私の可愛い母上様……母上様、私たちが持つて行く物なんぞ、私に取つては、何でも無いわ、まア、一寸

と庭を見てご覧なさいよ……母上様。……さういふことは能きる筈が無いわよ……」

伯爵は、窓の所に立つて、頭を振り向けずに、ナタアシヤの言語に聞き入つて居た。

不意に、彼は、何か呑み込むやうな音を爲せた、そして、窓の方へもつと顔を接近けた。

伯爵夫人は、ナタアシヤの顔を一寸と見た、母親の爲めに耻入つたナタアシヤの顔を見た、ナタアシヤの感情を見た、何故良人が今ナタアシヤを見無いのかその理由を感じた、そして、狂亂しさうな態度で、四邊を見廻した。

「あ、何うとも宜いやうになさいませよ。誰かの爲ることの邪魔を私が爲たんですか？」と、伯爵夫人、未だ直ぐには譲歩せずに、云つた。

「母上様、私の可愛い母上様、ご免なさいよ」

が、伯爵夫人は、娘を突き除けて、伯爵の傍へと行つた。

「良人、宜いやうにお指圖なすつて下さい……私には斯ういふ事は解かりませんから、ねえ」と、伯爵夫人は云つて、如何にも濟ま無いことを爲たといふ態度で、眼を下げた。

「鶏卵だ……鶏卵が母鶏に教へたのだ……」と、伯爵は、嬉し涙の間から呟やいた、そして、妻を抱擁すると、妻は、喜んで、良人の胸へ自分の恥ぢ入つた顔を隠した。

「父上様、母上様、私がさう云ひ付けて宜くつて？。え、？……」と、ナタアシャが、尋いた。「さう爲ても、依然、何うしても無きやアなら無い物だけは悉皆持つて行けてよ」と、ナタアシャは云ひ足した。

伯爵は頷いた、と、ナタアシャは、何時も鬼遊戯の時に駆けたのと同じ迅速で、廣室から玄關の室へと突き切つて出て、それから、昇降段を降りて、庭へと、飛んで行つた。

僕従等は、ナタアシャの周圍に集つたが、ナタアシャが與へた不思議な命令を眞實だと信じ得無かつた。そのうちに、伯爵が自身で出て来て、伯爵夫人の命令だと云つて、荷馬車全體を負傷者の用に供し、物品の箱は悉皆物置部屋へ入れるのだといふ命令の眞實であることを保證した。僕従等は、それが解るといふと、その新な爲事に、威勢よく、一生懸命に、掛りだした。その命令は最早寸毫も異様だとは思はれ無かつた、いや、それ所か、彼等は、それより外の方は無いやうな氣がしたのであつた、それは、十五分程前には、負傷者等を放つて置いて、家具を持つて行くのが、寸毫も不思議に思はれずに、それをも、實際、唯一の方だと承知したのと、丁度同なしやうに。

家ぢうの者が、もつと早く負傷者等の肩を持た無かつた埋合せを爲やうとでもするかのや

うに、非常な熱心で荷馬車へ負傷者等に乗せることをやりだした、負傷兵等は、各自の部屋から這うやうにして出て来て、蒼いが、嬉しさうな顔で、荷馬車の周圍に集まつた。噂が、近邊の家々へも廣がつた、で、負傷者等は、他の家々からも、庭へやつて來だした。

負傷兵の中には、箱を下さ無いで呉れと頼み、自分等はの上へ乗せて貰へば宜いのだからと云つた者も多かつた。が、一度荷を下す爲事が始まつた以上は、それを止めやうは無かつた。悉皆置いて行かうが、半分置いて行かうが、孰でも太した相違は無いやうに思はれたのであつた。陶器や、青銅道具や、繪や、鏡の、前の夜のうちに非常に念入りに荷造りされた幾個もの箱が、庭に横はつて居た、それでも尙、人々は、殘餘をます／＼取り下して、負傷者等の乗り場所をます／＼多く造へる可能を求め、且それを見出すのであつた。

「まだ四人乗せられるせ」と、執事が云つた。「俺の荷物は置いてかア、それで無いと、彼の人たちやア何うなるか知れんのだからな」

「あ、私の箆筒の載つてる荷馬車に入れてお遣り」と、伯爵夫人が云つた、「ゾウニヤシヤは、私の馬車と一緒に乗せてやるから」

婦人たちの箆筒の積み込んであつた荷馬車が、荷を下された、そして、二軒隔いて隣家から

負傷者を伴って来る爲めに、人が遣られた。

家族ちうも、僕従等も、一生懸命で、面白がつて居た。ナタアシャは、此頃では随分長いこと無かつたやうな大喜悅の状態であつた。

「何處へ此物を縛り付けませう？」と、僕従が、馬車の後の狭い踏板の上へ革函を置かうとしながら、云つた。「今一馬車取つとか無きやアならんのですが」

「何なの、それは？」と、ナタアシャが尋いた。

「伯爵のご書籍」

「置いといでよ。ヴァシリイチにしまはせるが宜いよ。要るもんぢやア無いわ」

車蓋を掛けた二輪馬車は、乗者で一杯であつた、ビオトル・イリイチは何處へ乗れるのか分ら無かつた。

「箱の上へ乗つてけば宜いわ。箱の上でも宜いでせう、え、ベエティヤ？」と、ナタアシヤが叫んだ。

ソオニヤも、逡巡が無い熱心で働いて居た、が、ソオニヤの努力の目的はナタアシャのとは正反對であつた。ソオニヤは、置いて行く物品の藏ひ方を引き受けて、伯爵夫人の望に依つて

さういふ物品の目録を造つた、そして、能きだけ多くの物品を携つて行けるやうにと、骨折つたのであつた。

(十七)

二時には、ロストオフ家の四輪の馬車が、最早直ぐ發てるやうに悉皆支度が出来て、玄関前に立つて居た。負傷者等の乗つた荷馬車は、續々と庭から列を爲して出て行きつゝあつた。

公爵アンドレーを乗せて行く四輪馬車は、正面の入口から出た、で、女中に手傳つて、大きい、高い馬車の裡で伯爵夫人の座を坐り心地の好いやうに爲て置かうと爲て居たソオニヤの注意を引き付けた。

「彼者は誰の馬車なの？」と、ソオニヤは尋いて、馬車の窓から頭を突き出した。

「え、未だお聞きなさら無かつたの、お嬢様？」と、女中は答へた。「負傷した公爵です、昨夜は此家でお宿りでしたんですが、今吾々と一緒にお發ちなさるんですよ」

「あら、何方なの？ 何といふ方なの？」

「吾々の約婚者、だつた方……公爵アンドレーご自身」と、女中は答へて、溜息した。「最

「早お危篤しいご容態ださうでございますよ」

ソオニヤは、馬車から跳び出した、そして、伯爵夫人の所へと駆け込んで行つた。伯爵夫人は、旅行支度を爲て、帽子を着、肩掛を掛けて、客室の裡を退屈さうに歩き廻りながら、家ぢうの者等が、入つて来て、發つ前に何時もの黙禱を爲る爲めに、戸を閉めて坐るのを待つて居た。ナタアシヤはその部屋には居無かつた。

「母上様」と、ソオニヤは云つて、「公爵アンドレーが、此の家に居ますよ、負傷して居て危篤しいんですつて。吾々と一緒に行くんですよ」

伯爵夫人は、ギョツとして眼を開いた、そして、ソオニヤの腕を掴んで、四邊を見廻した。

「ナタアシヤは」と、伯爵夫人は云つた。

ソオニヤに取つても、伯爵夫人に取つても、この報は、最初の刹那には、唯だ一つの意義しか持た無かつた。彼等は自分等のナタアシヤの性質を知つて居た、で、二人とも公爵アンドレーが好きであつたに拘らず、その報がナタアシヤに何ういふ効果を及ぼすかといふ心配の方が、公爵その人に對する同情全體よりも、眞然強かつた。

「ナタアシヤは未だ知りません、でも、彼の方は吾々と一緒に行きますよ」と、ソオニヤが

云つた。

「最早危篤しいとお云ひのだね？」

ソオニヤは頷いた。

伯爵夫人はソオニヤを抱擁して、はら／＼と涙を滾ぼした。

「主の踪跡は索ね難し」と、伯爵夫人は思つて、今起つて来て居る總ての事柄のうちに、全能の御手——これまでは見え無かつた——が、表はれだしたのを感じた。

「さア、母上様、最早悉皆支度が出来てよ。え、何なの？……」と、一生懸命な顔で、部屋へ駆け込んで来て、ナタアシヤが尋いた。

「何でも無いよ」と、伯爵夫人は云つた。「最早支度が出来たのなら、發ちませう」

で、伯爵夫人は、動搖した顔を隠す爲めに、手提袋の上へ顔を曲げた。ソオニヤはナタアシヤを抱擁し、そして、ナタアシヤに接吻した。

ナタアシヤは不審さうにソオニヤを見た。

「何なの？ 何事が出来たの？」

「何でも無いのよ……い、え、眞個よ、何でも無いのよ……」

「何か極く悪い事、私に關係した事ね？……何なのよ？」と、察しの速いナタアシヤは尋いた。

ソオニヤは、溜息したきりで、何の返答も爲無かつた。

伯爵と、ベエティヤと、マダム・シロツスと、マアヴラ・クズミイニシナと、そして、ヴァシリイチが、客室へ入つて来た、で、戸を閉めて、衆皆坐つて、五六秒相互に見合すに、黙つて坐つたまゝで居た。

伯爵が真先に起ち上つた。高い溜息の音をさせて、彼は聖像の前で十字を切つた。餘の衆皆も同なじやうに爲た。それから、伯爵は、莫斯科に残る筈であつたマアヴラ・クズミイニシナとヴァシリイチを抱擁しやうと爲た、で、彼等が伯爵の手を捉へ肩に接吻して居る間、伯爵は、曖昧な愛情の籠つた、安心させる言語で、彼等の背部を撫でた。

伯爵夫人は、小さい禮拜堂へ行つて了まつた、ソオニヤが行つて見ると、伯爵夫人は、未だ壁の其所所に残つて居た幾個もの聖像の前に跪びて居た。家族の傳説に關係のある爲めに最も貴重であるといふやうな聖像は悉皆、人々と一緒に持つて行かるところであつたのだ。門口や、庭では、發つ筈になつて居る僕従等は——衆皆ベエティヤから渡された劔や短劔を持

つて居て——下袴を長靴の内へたくし込み、肩帶や、革帶を緊然締めて、後へ残る者どもに別を告げて居た。

必らず、旅行の發際にはある通りに、いよ／＼となると、忘れた物や、間違つた場所に包みこまれた物が、多數あるのが、分かつた、で、二人の馬丁が、馬車の踏段を伯爵夫人を扶け上げやうと、開いた馬車の戸の兩側に立つて、長いこと控へて居るのに、女中等が、家から、馬車、四輪馬車、二輪馬車へと、枕や、袋を持つて、飛ぶやうに行つたり來たりした。

「彼奴たちは、生きて居る限りは、何時も何物でも忘れて了まうんだねえ」と、伯爵夫人が云つた。「私は左様いふ風ぢやア坐れ無ことは解かつてるぢやア無いか」で、ゾウニヤシヤが、齒を嚙ひ切り、非常に心配した顔付で、何にも云はずに、坐褥を直す爲めに、馬車へと跳び込んで行つた。

「あゝ、彼様な僕従ども」と、伯爵は、云つて、頭を振つた。

伯爵夫人は、安心して自分の馬車を馭させるのはその男きりであつた老馭者のエフィムは、馭者臺の上に坐つて、自分の後の方で何がありつゝあるのか、振り返つて見も爲無かつた。彼の三十年間の經驗は、彼に教ゆるに、何時でも、「さア、いよ／＼、出せ」と、人々が云ふまで

には未だ大部間が有るし、又、それを云つてからも、何か知らされた物を取りに歸らせる爲めに、彼を止め、それから、その後でも、伯爵夫人自身が窓から頭を出して、何卒、下り阪は用心して、取して呉れと彼に頼むので、それを聞く爲めに彼は今一度止め無ければならぬことを以てした。彼は、これを知つて居た、だから、彼の馬どもより、殊に左方の馬より、一層の忍耐で、それから起り来ることを待つて居た、その左方の馬といふのは、隼鷹といふ栗毛馬で、絶えず前脚で地を掻き、轡をガチ／＼囁んで居たのだ。

到頭衆皆席に就いた。馬車の踏段が引き上げられた。戸がドンと閉まつた、それから、忘れられた旅行箱が取りに遣られた。やがて、伯爵夫人が頭をヒヨイと出して、常例の命令を下した。其所で、エフィムは、緩然と帽子を脱つて、十字を切り始めた。馬丁や、僕従全體がそれと同じに爲た。

『さア、いよ／＼』と、エフィムは云つて、帽子を冠つた。『出せ』馬丁は馬を出した。右方の車轆馬が轆き始めた、高い激條がギイ／＼鳴つた、そして、馬車がゆら／＼と出た。従僕が、馬車が動き出してから、臺の上へ跳び乗つた。馬車は、ゴトン／＼と動きながら、庭から凸凹な敷石の路へと出た、他の馬車も同じやうに、ゴトン／＼と動きながら、行列をして街を上つ

て行つた。馬車の裡、四輪馬車や、車蓋附の二輪馬車の裡に、居る人々は、誰も彼も、對側の寺院を見ると、十字を切つた。莫斯科に残つて居ることになつて居た僕従たちは、馬車の兩側を歩いて、發つ人々を見送つて行つた。

伯爵夫人の傍に坐つて、自分の側を緩然と動いて行く、捨てられた、動搖した、莫斯科の城壁を見守つて居るその刹那に、ナタアシャが經驗したやうな、さういふ愉快な感覺を、覺えたことは、ナタアシャに取つては、これまで滅多に無いことであつた。ナタアシャは、時々、馬車の窓から頭を出して、後方を見返り、それから、前面の、自分たちより先に立つて行く負傷兵を満載した荷馬車の長い列を見るのであつた。さういふ荷馬車どもの真先に、公爵アンドレーの扉を閉めた馬車がナタアシャに見えるのであつた。ナタアシャは、その馬車の裡には何ういふ人が居るのか知ら無かつた、そして、荷馬車の行列を見渡す度に、ナタアシャは、その四輪馬車は何處へ行つたかと、見るのであつた。ナタアシャは、その馬車が何時も真先であるのを、知つて居た。

クヅリイナでは、ニキイツキイ街からも、ブリエスニイからも、ボヅノヴィンスキイからも、ロストオフ家のと同じやうな馬車の幾個もの列が、駈け出て來た、で、彼等がサドヴォイ街

に達した時分には、馬車や、荷馬車が、見渡す限り二列になつて居た。

スハアレフ塔を廻り越した所で、馬車で通つたり、歩いて通つたりして居る群集を、物珍らしさうに、一寸々々と、見調べて居たナタアシャが、喜悅と驚愕の叫聲を出した――

「あら、まア。母上様、ソオニヤ、あれ。彼の方よ」

「誰なの？。誰よ？」

「あれ、ご覧なさいよ。ベズウホフ」と、ナタアシャは云つて、馬車の窓から頭を出して、馭者の長外套を着た、その様子から見ると、直きに變装した紳士だと分る、背の高い、肥つた男を見詰めた。その男は、粗羅紗の外套を着た、黄色い顔の、髯の無い、小さい老人と列んでスハアレフ塔の穹窿の下を通つて居るのであつた。

「まア、何うしたんでせう。ベズウホフが馭者の外套を着て、奇異な風の老爺さんと歩いて居るなんて」と、ナタアシャは云つた。「ご覧なさいよ、ご覧なさいよ」

「いゝえ、彼の人ではありませんよ。途方も無いことを云ふのね、お前は」

「母上様」と、ナタアシャは叫んだ。「何うしたつて左様よ、私請け合ふわ、彼の方なのよ。

止めてお呉れ、止めてお呉れ」と、ナタアシャは、馭者に向いて、叫んだ、が、馭者は止める

ことが能き無かつた、それは、もつと多くの荷馬車や、馬車が、ミエシチャンスキイ街から出て來つゝあつて、人々は、ロストオフ家の馬車に向つて、止まつて往來の邪魔を爲すに、ドン進んで呉れと、怒號つて居たからであつた。

が、今は餘程遠くなつて居ただけれども、ロストオフ家の衆皆が、ビエール、即ち、馭者の外套を着て、小さい、髯の無い老人の、従僕らしい男と列んで、頭を垂げて、如何にも眞剣な顔を爲て、街路を歩いて居る、ビエールに非常に善く似た男を、見た。その老人が、自分等を見詰めて居る、馬車の窓から突き出された顔に氣が附いた、そして、丁寧にビエールの脰に觸つて、彼に何か云つて、馬車の方を指した。

少時の間は、彼が云つて居たことは、ビエールに通じ無かつた、ビエールは、何か深く考へ込んで居るらしかつた。到頭、彼は、指された方向を見た、そして、ナタアシャを認めて、眞最初の衝動に身を委せたかのやうに、直ぐ馬車の方へと動いた。

が、その方へと十二三歩行つてから、彼はビタリと止まつた。何か憶ひだしたことがあるらしかつたのだ。

ナタアシャの顔が、馬車の窓から、親しげな、抑捺ふやうな風で、晴々と覗き出した。

「ピョートル・キリリイチ、此所へおいでなさいよ。私たちは、貴下だと知つたのよ、ね。眞個に、不思議だわねえ」と、ナタアシャは、叫んで、手を彼へとさし出した。「何うしたことになるの？。何で貴下は其様な風で居るの？」

ビエールは、ナタアシャのさし出した手を撃つた、そして、依然動いて居る馬車の側を駆けながら、ぶきつちやうに、その手に接吻した。

「何事かおありでしたの、伯爵？」と、驚いた、惑むやうな調子で、伯爵夫人はビエールに尋いた。

「え、？。何故？。尋か無いでください」と、ビエールは、云つた、そして、ナタアシャを見上げた、ナタアシャの、晴々とした、愉快さうな眼の魅力をば、彼は、ナタアシャを見無いでも、感じたのであつた。

「何うしていらつしやるの、それとも、莫斯科に居残つていらつしやるの？」
ビエールは黙つて居た。

「莫斯科にですか？」と、彼は尋ねた。「え、莫斯科に。左様なら」

「あ、眞個に男であつて見度いわねえ、私貴下と一緒に居残るのにねえ。あ、まあ眞個

に立派なことなんだわ」と、ナタアシャは云つた。「母上様、私を居残らしてくださいよ」

ビエールは、惘然としてナタアシャを見た、そして、何か云はうと爲た、が、伯爵夫人が彼を遮ぎつた。

「戦争におでなすつたつてねえ、人から聞きましたんですが」

「え、行つて居ました」と、ビエールは答へた。「明日、再戦がありませう……」と、彼は云ひ始めて居た、が、ナタアシャが口を挟れた――

「でも、何うしたことなの、伯爵？。貴下は何うかしていらつしやるやうなのね……」

「私に尋か無いでください、尋か無いでください、自分で自分が分らないんです。明日……い、や。左様なら、左様なら」と、ビエールは云つた、「恐しい時ですなア」で、彼は、馬車を離れて、敷石へと歩み去つた。

長い間、ナタアシャの頭が馬車の窓から依然突き出されて居た、そして、ナタアシャは、親切な、が、少し抑揄うやうな、嬉しさうな笑顔で、晴々とビエールを見て居た。

二日前の、失踪の時から以來、ビエールは、自分の死んだ恩人のオーシップ・バズデーフの空住居で、暮して居た。

何うしてさうなつたかといふと、それは、下のやうな次第であつたのだ。

莫斯科へ歸つて來て、伯爵ラストオブチンと會見した次の朝、眼が覺めるといふと、少時はビエールには、何處に自分が居るのか、何ういふことが、自分に向つて期待されて居るのか、分ら無かつた。自分に逢う爲めに待つて居る人々の名が取り次がれるといふと——その中には、彼の妻、伯爵夫人エレナ・ヴァシイリエヴナからの手紙を持つて來て居た佛蘭西人も居たのだが——ビエールは、彼が殊に感じ易かつた、自分の位地が、何うにも爲やうが無く、且、非常に複雑なものであるといふ感覺をば、不意に感じた。

彼は、不意に、萬事休してしまひ、何も彼も滅茶々に混亂してしまひ、何も彼も破れて行きつゝあり、正や不正の區別が無くなり、自分には何の將來も無く、そして、自分の位地からの通れやうが更に有りさうも無いのだと、感じたのであつた。不自然に微笑み、何か獨り語を云ひながら、彼は、全く、絶望を表した姿勢で長椅子へ掛けて居たが、やがて、起つて、戸に近寄り、隙間から、客たちが自分を待つて居る應接室を覗いた、それから、絶望の手眞似で後

へ戻り、書籍を取り上げた。給仕長は、今一度入つて來て伯爵夫人からの手紙を持つて來た佛蘭西人が、一分間でも宜いから是非彼に逢ひ度いと云つて居るといふことと、オーシップ・アレクセエーヴィチ・バズデーフの未亡人から、自分は、田舎へ行くのだから、何冊かの書籍を預つて呉れといふ使が來て居たといふことを、取り次いだ。

「うん、宜しい、今直ぐ、待て……いや、いや、行つて、直ぐ行くと云つて呉れ」と、ビエールは云つた。

給仕長が、部屋を出てしまふや否や、ビエールは、卓子の上に置いてあつた帽子を取り上げた、そして、他の方の戸へ行つた。廊下には誰も居無かつた。ビエールは、廊下を何處までも眞直に行つて、階段へと出た、そして、顔を擧めて、兩手で額を擦りながら、二階の降り口まで、降りて行つた。戸口番が表口の戸の所に立つて居た。第二の階段が、二階の降り口から裏口へと、通つて居た。ビエールは、裏階段を降りて、庭へと出た。誰も彼を見た者は無かつた。が、門から街へ出やうとするや否や、馬車の傍に立つて居た取者と、門番が、彼を見て、彼に向つて、帽子を脱いだ。さういふ者どもの眼が、自分の上に注がれて居るのだと知つて、ビエールは、駝鳥が人に見られ無いやうにと、低い樹の間へ、頭を隠すのと同じやうに爲て、

頭を縮め、歩を速めて、街を急いで行つた。

その朝、ビエールを待つて居た用全體の中で、オーシップ・アレクセエヴィチの書籍と書類を整理するといふ爲事が、ビエールには一番急要なことだと思はれた。

彼は、彼が行き逢つた最初の辻馬車を喚び止めて、バズデエーフの未亡人の家がある家長池まで、乗せて行けと云つた。

四方八方から、莫斯科から出て行かうと爲て来る何れも一杯の馬車を、絶えず見ながら、今にも破れさうな古い二輪馬車から滑り落ち無いやうにと、自分の大振りな體軀を、氣を付けて、平衡を取りながら、ビエールは、逃げ出した小學生のやうな愉快な感覺で以つて、馭者と雑談を爲た。

馭者は、此の日、武器が内廓で渡されて、その明くる日、誰も彼も、三丘の彼方へと追ひ遣られて、其所で大きい戦がある筈になつて居るのだと、ビエールに話した。

家長池に達するといふと、ビエールは、彼が、最早餘程長く行か無かつたバズデエーフの家を探した。彼は、小さい庭門へ行つた。ビエールが五年前に、トルゾオクで見た黄色い顔の、髯の無い老人のグラシムが、ビエールの叩くのを聞いて、出て來た。

「お在宅かね？」と、ビエールは尋いた。

「唯今のやうな世間の様子ですから、ソフィヤ・ダニロヅナは子供衆を伴れて、田舎へ參つて了ましましたです、閣下」

「でも、私は入るよ、書籍に眼を通し度いんだ」と、ビエールは云つた。

「え、何卒、結構です、亡くなりました主人——天國に居られることを祈ります——の弟マカアル・アレクセエヴィチが居残つて居ります、ですが、貴下は、彼者が病身なことをご承知でございませうな」と、老僕は云つた。

マカアル・アレクセエヴィチは、ビエールの知つて居たところでは、オーシップ・アレクセエヴィチの弟で、酒の爲めに白癩になつた、半狂氣の男であつた。

「うん、うん、知つて居るよ。さア入らう」と、ビエールは云つて、家の内へと行つた。

寝衣を着て、裸の足に外靴を穿いた、鼻の赤い、禿た、背の高い老人が、玄關の室に立つて居たが、ビエールを見るといふと、腹立たしさうに何か口の裡で云つて、廊下へと歩み去つた。

「彼の方は、傑い學者でした、が、今では、ご覽の通り、彼様弱くなられました」と、グラシムが云つた。「書齋へおいでになりますか？」

ビエールは頷いた。

「封印を付けたまゝになつて居ります。ソフィヤ・ゲニロヅナの申し付では、貴下から書籍を取りにおよこしてしたら、お渡し申せといふのでございました」

ビエールは、陰気な書齋へ行った、其所へは、彼は、恩人の生きて居る時分には、ピクビクもので入つたのであつた。今は、オーシップ・アレクセエヴィチが死んで以來、塵埃で蓋はれ、誰も手を付けぬので、部屋は一層陰氣であつた。

ゲラシムは、窓扉を一つ開けた、そして、足を爪立て、部屋を出て去つた。ビエールは、書齋の裡を歩き廻り、寫本の入れてある書箱へ行つて、嘗ては、組合の神聖な遺物であつた最も重要なもの、一つを取つた。これは、組合の蘇格蘭の長い條規であつて、バズデーフの書き入れや、註解があるものであつた。

ビエールは、塵埃だらけの書物卓子へ坐つて前に寫本を置き、それを開けたり、閉ぢたりして居た、が、到頭、それを突き遣つて、卓子に肘を突き、頭を手の間へ埋めて、考慮に沈んだ。五六度、ゲラシムが、ソオツと書齋を覗いた、と、何時でも、ビエールが、同なじ姿勢で坐つて居るのを見た。

二時間餘り経つた。ゲラシムは、思ひ切つて、ビエールの注意を引く爲めに、戸口で、微弱な音をさせた。ビエールにはそれが聞こえ無かつた。

「馭者を歸して宜しうございませうか、貴下様？」

「あ、宜しい」と、ビエールは云つて、黙想から覺めて、急いで起ち上つた。「おい」と、彼は云つて、上衣の扣鈕を執つてゲラシムを捉まへて、濕つた、輝いた、熱心な眼で、その老人を見下した。「おい。明日戦があることを知つてるか……」

「左様いふ噂で……」

「宜いかい、私が何ういふ者だか、誰にも云は無いで呉れよ。それから、私の頼む通りに爲て呉れ……」

「畏まりました、貴下様」と、ゲラシムは云つた。「召しあがる物を何か持つて参りませうか？」

「いや、他に欲しい物があるんだ。農夫の衣服に、短銃が欲しいんだ」と、ビエールは云つて、不意に眞赤になつた。

「畏まりました、貴下様」と、ゲラシムは、寸時考へて居てから、云つた。

その日一日ちう、ビエールは、彼の恩人の書齋に一人で居たが、彼が隅から隅へと、苛々と歩きながら、何か獨言を云つて居るのが、ゲラシムに聞えた、で、ビエールは、その書齋の裡で自分の爲めに造られた寢床の裡で、夜を送つた。

ゲラシムは、その生涯に於てさまざま不思議なことを見來つた從僕の平氣さで以つて、ビエールの其家に住うことを、納得した、そして、彼は、尙又、自分が仕へる人が誰か出來たのを喜んだのであつた。何の爲めに要るだらうかなどとは更に怪みも爲すに、彼は、ビエールの爲めに、その晩、馭者の上衣に帽子を調へた、そして、次の日にはビエールの要する短銃を手に入れやうと約束した。

マカアル・アレクセエヴィチは、その晩二度戸口へ寄つて來て、外靴をバタ／＼させ、其所に立つて、ビエールに向つて、機嫌を取るやうな態で、見詰めた。が、ビエールが、彼に振り向くや否や、耻かしさうな、怒つた顔付で、寢衣で身體を纏つて、そして、急いで、退いて行つた。

ビエールは、ゲラシムが彼の爲めに調べて、念入りに熨した馭者の上衣を着て、スハアレフ塔で、短銃を買はうと、ゲラシムと一緒に外へ出た。彼が、ロストオフ家の人々に逢つたのは

其所でであつたのだ。

(十九)

九月一日の夜、クツツゾフは、莫斯科を通過して、リヤザン海道へ退けといふ命令を露西亞の諸隊に與へた。

第一の諸隊は、その夜、行動を始めて、緩徐と、整然とした秩序で、行進したが、退却して居る諸隊は、ドロゴミロフ橋に達するといふと、自分たちの前にも、彼方側にも群れ、橋を急いで渡つたり、同なじ側の街や横町を塞ぎ、後方から自分たちの方へ突つ掛けて來る、兵卒の非常な集團を見た。

で、諸隊は、原因の無い狼狽と急燥に襲はれた。橋の方へ、橋の上へ、淺瀬へ、舟へ、の全體の突進が始まつた。クツツゾフ自身は、裏街を馬車で通つて、莫斯科の彼方側へ出て居た。

九月二日の朝の十時には、ドロゴミロフ郊外に立つて居る軍隊といふのは、後衛の諸聯隊のみで、混雜は全然止んで了まつた。軍は、最早、莫斯科の彼方側に居て、全く市から出て了まつて居た。

それと同時に、九月二日の朝の十時に、ナポレオンは、ボクロナヤ・ゴオリイで、彼の軍隊の真中に立つて、彼の前に横たはつて居る光景を凝視して居た。

八月の二十六日から九月二日まで、即ち、ポロディノの戦から莫斯科入城に至るまでの、その動搖の烈しかった、その記憶すべき一週ちう、何時も意外の感を生せしめる爲めに來るやうな、例の非常に麗らかな秋天氣が續いた、で、さういふ天氣の場合には、太陽は空の低い所で輝いて居るに拘らず、春よりも暖かに照らし、何も彼も、清い、澄み渡つた空氣の裡で、キラキラして居て、眼は眩しくなるが、それと共に、胸は、香ばしい秋の空氣を吸い込んで、強まり、且、快くせられるのであつて、又、さういふ天氣の時には、夜でも暖で、さういふ暗い暖な夜には、黄金色の星が、絶えず空から墜ちて、それを見守る人々を喜ばせ、或は、恐怖せしめるのだ。

九月二日の十時には、朝の光は、仙郷の美しくさに満て居た。ボクロナヤ・ゴオリイから見ると、莫斯科は、その川々や、庭園や、寺々と共に、眼下に廣々と横はつて居て、それ自身の生命が生きて居るやうに見え、その幾個もの圓屋蓋は、日光に星のやうに燦めいて居た。見慣れ無い建築の目新しき形を持つたその奇異なる市を見るといふと、ナポレオンは、人々が

自分等の一向知ら無い奇異なる生活の外様を見る時に感ずるその美み深い、不安な好奇心を幾干か感じた。その市が、強い生命を以つて榮えて居たことは明瞭であつた。生きたものと、死んだものとは、遠方から見ても、必らずそれを識別し得べき明瞭な一種の表徴があるものであるが、さういふ表徴に因つて、ナポレオンは、ボクロナヤ・ゴオリイから、その市の裡の生命の鼓動を察知し、その美しい、大きい生物の、謂はゞ、呼吸のやうなものを、感じ得たのであつた。

莫斯科を凝視すれば、何様な露西亞人の心にも、それが自分の母であるといふ感が起るのだが、母の都としてのその意義を知らずに、莫斯科を凝視する有らゆる外國人も、市の女性的特質に氣がつかざるを得無いのだ、今ナポレオンはそれを感じた。

『無数の寺々のあるこの亞細亞の都、聖なる莫斯科。到頭、その名高い都が此にある。最早その時機であつたのだ』と、ナポレオンは云つた、そして、馬から下りて、自分の前に莫斯科の地圖を廣げさせ、それから、通譯官のルロム・デイドヴィルを呼びに遣つた。

『敵に占領せられた都は、操を破られた處女と同一だ』と、ナポレオンは思つた（これは、彼が、スモレンスクで、ツウチエフに云つた言辭であつた）。で、彼が、始めて彼の眼の前

に横たはつた東洋の美人を見たのは、『花の散つた處女』として、あつた。彼れ程長く抱いて居た願望、彼れ程不可能であつた考案が、到頭事實になつて來たのが、自分ながら、不思議に感ぜられた。澄み渡つた朝の光の裡で、彼は、市を凝視めた、それから、地圖を見詰めて、その細かな點を見上げた、と、その都を占有することの確なことが、彼の心を動搖させ、彼の心に畏怖の念を満した。

「が、何うして、斯様ならず居られるものか？」と、彼は思つた。『此にこの都がある、それは、俺の脚下に伏して、その運命を待つて居る。アレクサンドルは、今何處に居るか、何様な事を彼は考へて居るのか？。不思議な、美しく、壯大な市だ。そして、これは、不思議な、壯大な刹那なんだ。何ういふ風に、俺が奴等には見えるだらうかな？』と、彼は、自分の兵卒等のことを思ひながら、考へ込んだ。『此にその市がある——信じて居無かつた彼様いふ奴等に對する褒美なんだ』と、彼は思つて、彼の幕僚と、近付いて來て、隊伍を整へつゝ、ある軍隊とを、見返つた。

『俺の一語、俺の腕の一振り、露帝の古都はなくなつて了まうのだ。けれども、俺の慈悲は、何時でも、直ぐ敗者に示されるのだ。が、いや、俺は、未だ莫斯科に居るのでは無い』、さういふ考慮が不意に彼を襲つた。『だが、その市は、今俺の脚下に在つて、その黄金の圓屋蓋や十字架を、日に燦々させて居る。けれども、俺は、この市を助けて置いてやらう。野蠻と壓制の古い記念物の上に、俺は、公平と慈悲の大なる言辭を銘してやらう……アレクサンドルは、それを何物よりも苦しく感じるだらう、俺は彼の男の性質を善く知つて居る』(ナポレオンには、これまでに起つた事柄の重なる意義は、自分とアレクサンドルとの間の個人的の争のうちに在るのだと、思はれたのであつた)。『牙城の高所から——うん、彼が牙城だ、うん——俺は、彼等に、公平の法律を設けることを命じてやる、俺は、眞の文明の意味を奴等に教へてやる、俺は舊貴族の何代にも、彼等の征服者の名を、愛を以て、崇めさせてやる。俺は、市の代表者に、俺は、戦争を求めはし無かつたし、又、求めても居無きことを、云つてやらう、で、俺は、奴等の宮中の虚偽の多い政略に向つてのみ、戦を行つて居たことを、云つてやらう、それから、俺が、アレクサンドルを愛し、尊敬して居ることや、莫斯科で、俺は、俺自身及び俺の人民に取つて耻かしからん平和の條件を受け納れることを、云つてやらう。俺は、戦争の好運に乗じて、奴等の貴んで居る皇帝に屈辱を與へる積りは、決して無いのだ。『舊貴族たちよ』と、俺は、奴等に云つてやらう、予は、戦争を求めめるのでは無い、予は、予の總ての臣民の平和と安寧を求

めるのだ」と。が、奴等の居る前では、必然、俺は勢が付くだらう、俺は何時ものやうに、瞭乎と、重々しく、壯大に、奴等に話すだらう。けれども、俺は本當に莫斯科へ来たのだから。確に、左様なんだ、彼所に市があるのだ」

「舊貴族たちを連れて来いよ」と、ナポレオンは、彼の隨員に向つて、云つた。

副官の華々しい一團を伴れた一人の將官が、直ぐに舊貴族を連れて来る爲めに、駆け去つた。二時間経つた。ナポレオンは、中食を爲た、そして、ボクロンナヤ・ゴオルイの上の同様な場所に立つて、市の代表者の来るのを待つて居た。舊貴族に對する彼の演説が、今は最早、彼の心の裡で極まつた形に纏まつて居た。その演説は、ナポレオンの考では、威嚴と壯大とで満ちたものであつた。

ナポレオンは、自分が莫斯科でやらうと思つて居た寛仁大度の行爲のことを考へて、有頂天になつて居た。想像の裡で、彼は、最早「露帝の宮殿に於ての合同式」即ち、露西亞の大貴族等が佛蘭西皇帝の宮中官等と和合するといふ式の、日取りを極めて居た。心の裡で、彼は、民心を收攬することの能るやうな知事を任命して居た。莫斯科には、宗教上の團體が多數あるといふことを聞いて居たので、彼は、心の裡で、さういふ團體に自分の恩恵を降り注がせやう

と、決心して居た。彼は、阿弗利加で、兜蓋附外套を着て回教寺の裡で坐らなければなら無かつたと同様なやうに、莫斯科では、露帝のやうに、優渥に且、恩惠深く無ければなら無いのだと、想像した。で、有らゆる佛蘭西人と同様に、親愛な母とか、優しい母とか、哀れな母とか、いふ言辭を持ち出さずには、何様な情緒も想像し得無かつたナポレオンは、總てさういふ慈善團體の門頭に「我が愛する母に捧げられたる」とか、又は、單に「我が母の家」とか、大きい文字で銘記させて、それで、露西亞人の心を感動させやうと、最後に決定したのであつた。だが、俺は眞個に莫斯科へ来たのだからか？。確に左様なんだ、彼所にその市があるぢやア無いか、然し、市からの代表者等は何だつて斯う遅いんだらうな？」と、彼は怪しんだ。

それと同時に、低聲の、如何にも心配さうな相談が、隨員の後方に居る將軍や元帥たちの間で、なされつゝあつた。代表者を連れて來させる爲めに遣られた副官たちは、莫斯科は空虚であつて、住民は、既に市を去つて了まつたか、で無くば、今去りつゝあるものばかりだといふ情報を齎して、歸つて來たのであつた。總ての隨員たちの顔が、蒼くつて、顛倒した様子を表して居た。彼等に不安の念を抱かしたのは、莫斯科が住民に棄てられたといふこと（實際それは重大に見えることではあつたが）では無かつた。彼等は、皇帝にその事實を知らせるとい

ふことに就て、心配したのであつた。彼等は、陛下をば、佛蘭西人が「可笑」と呼ぶその恐しい位地に置くこと無しに、何うして、彼がそれ程長い間舊貴族等を無効待たしたことや、莫斯科には酔拂つた亂民が居るのみであるといふことを、彼に知らせたものかと、いふことに當惑したのであつた。

随員のうちの或る者は、後は何うならうともまゝよ、左に右、何等かの代表者を假りにこしらへ無ければなるまいと、主張した、が、他の者は、その意見に反對して、皇帝には、注意深く巧みに前以て事實を仄めかせて置いて、それから、實際の事を話すことに爲無ければいけないと主張した。

「何うしても陛下には申しあげ無ければなるまいよ」と、侍従の一人が云つた。『だが、諸君……』

状態は更に困難であつた、何となれば、皇帝が、自分の寛仁大度の計畫を考へ込みながら、市の地圖の前を辛抱強く往つたり來たりして、誇らしげな、嬉しさうな笑顔で、始終小手を翳して莫斯科への路を見渡して居たからであつたのだ。

『だが、何うも拙いな……』侍従たちは、肩を揺つて、『可笑事……』といふその恐ろしい言

語を、自分等の心の裡に落ち着せるやうに、自分たち自身ですることが能き無いで、さう始終繰り返して云つて居た。

そのうちに、皇帝の方は、無効待に飽きて了まうと共に、俳優の本能以つて、大いなる利那が、餘り長く延引されたので、その壯大さを失つて了まつたことを、感じて、手で合圖を爲

唯だ一發の砲聲が合圖を興へた、そして、侵入軍は、ツヅエール、カルウガ、ドロゴミロフの諸門を目掛けて、莫斯科へと進軍した。だん／＼速く、相互に競ひ合つて、速い駆け足や、速歩で、軍隊は、市内へと進み、自分等が揚げた塵埃の雲の裡へ隠れ、耳を聳する吶喊で、空気を轟もした。

軍の前進の爲めに誘ひ込まれて、ナポレオンも亦ドロゴミロフ門まで乗り附けた、が、彼は、再其所で止まつて、馬を下り、長い間、カメルコレジスキイ城壁の附近を歩きながら、代表者を待つて居た。

莫斯科は其の間空虛であつた。

市には未だ人民が居るには居た、前の住民の五分の一が未だ其所に残つては居た、が、市は空虛であつた。

それは、女王の居無い、死んで行く蜂房が、空虛であるやうに、空虛であつたのだ。

女王の居無い蜂房には、何の生命も残つて居無いものである。それでも、唯だ表面から一寸と見たのでは、他の巣箱と同なじに、勢好く見えるのだ。

日中の太陽の熱い光線の裡では、女王の無い巣箱の周囲にも、他の生きて居る巣箱の周囲と同じやうに、勢好く、蜜蜂どもが舞つて居る、少し離れたところからでは、女王の無い巣箱でも、他のと同なじに、蜜の香氣が爲、蜜蜂どもが、他のと全く同なじに、出たり、入つたりして居る。が、一寸と氣を付けて見て居れば、その巣箱には何の生命も無いことが直ぐに分かるのだ。蜜蜂どもの飛び方が、生きて居る巣箱とは異つた所があり、養蜂者を迎へる香氣や音が異つて居る。養蜂者が、衰へた巣箱の壁を叩くといふと、直ぐの一齊の應答、即ち、恐ろしい權幕で背部を圓くしたり、その羽翼を速く振つて、彼のヒュウ〜いふ生きた音を爲せたりする、何萬もの蜜蜂の唸り聲は無くして、養蜂者を迎へるものは、蜜蜂の居無くなりかけて居る

房の離ればなれの隅からの、斷々の懶氣な吐やくやうな低い唸聲なのだ。

棲まり板からは、往時のやうな、蜜や苦さの威勢の好い、香ばしい香氣や、裡の群からの熱の息吹は、來無い。冷たい空虛と、頽廢の香氣が、蜜の香と、混り合つて居る。

入口の周囲にも、危険が迫まると見るや否や、背部を圓くし、恐ろしい唸り聲を擧げて、死ぬるまで、房を守らうとする蜜蜂の群は最早一つも居無い。最早、低い、調子の揃つた吐やき、沸き立つ水の鳴り音のやうな、彼の勞作の唸聲は、聞え無い、出て來るのは、混亂の斷々な破調の叫喚だ。黒い、長い形の、蜜を體に塗つた働き蜂どもが、臆病さうに、こそ〜と、房から飛び出たり、入つたりして居る、彼等は、危険があると見ても、螫しはせずに、這つて逃げて行く。往時のやうに、彼等は、蜜の袋を以つてばかり、飛び込むのでは無い、今は、重荷を持つて飛んで出て來るのだ。

養蜂家は、下の隔板を開けて、巣箱の下半を覗く。相互の脚で繋がり合ひながら下房の下の側へ垂らさがつて、勞作の不斷の吐やきで、蠟を建て上げて居る、黒い、細そりした蜜蜂の群は居無いで、眠むさうな、凋びた蜜蜂が、巣箱の屋根や壁を懶氣にさまよつて居る。

蜜蜂の翼で掃かれた、清潔に膠付けになつた床では最早無くして、其所には、今は、蠟の斷

片や、糞や、弱々と脚を蹴つて居る死にかゝつた蜜蜂や、床から掃除されずにある蜜蜂の死骸が、あるのだ。

養蜂者は、上方の戸を開けて、巣箱の上層を調べる。

蜂巢の裡にある有らゆる間隙を塞いで、仔を育て、居る蜜蜂の密集した列は無くして、養蜂者は、唯だ、蜂巢の巧妙な、複雑な建物を見るのでみあつて、而も、その裡にさへ、往日の處女的清潔は、最早無くなつて居る。總てが捨てられて居る、で、汚れた、黒い、他所から来た蜜蜂が、速く、ウソ／＼と、巢の周圍を動きながら、掠奪物を探して居る、が、その巢箱の、洞びた、瘠せさらばつた、ぐす／＼した、年取つたやうな蜜蜂は、生の總ての慾望も、感覺も失つて了まつて、唯だ緩然とさまよひ廻つて居るのみで、その他所からの蜜蜂の掠奪を妨げやうとは少しも爲無いのだ。雄蜂や、虻や、熊蜂や、蝶が、何の目的も無く羽叩き廻つて、巢箱の壁へ羽翼を摺り附けて居る。彼方此方で、仔の死骸や、蜜で一杯になつて居る巢窟の間で、怒つた唸り聲が聞こえる、彼方此方で、二匹位の蜜蜂が、何故さう爲るのか自分等は知らずに、唯だ往時からの習慣、常習から、巢箱の掃除に掛つて居て、蜜蜂や熊蜂の死骸を、如何にも骨折れの風で、引き摺つて居るのだが、それは、自分等の力以上の爲業なのである。

又他の隅では、二匹の他の年取つた蜜蜂が懶氣に喧嘩したり、自分等の身體の掃除を爲たり相互に物を食はせ合つたり爲て居るのだが、それが、親しい心持からなのか、敵對の心持からなのか、自分等でも、知らずに居るのだ。

又他の所では、一群の蜜蜂が、相互にギユウ／＼推し合ひながら、一匹の犠牲にかゝつて行つて、それを撃ち、それを推し潰して居る、そして、殺されたか、弱つたかした蜜蜂は、羽毛のやうに軽く、死骸の積層の上へ、徐に落ちて居る。

養蜂者は、中央の二つの隔板を開けて、仔房を見る。背部合に坐つて、生殖の業の驚くべき神祕を見守つて居る何千もの蜜蜂の密集、黒い幾個もの圏は最早無くして、唯だ、何百かの、蜜蜂の、元氣の無くなつた、生命の無い、眠つて居る殘廢者を見るのみである。殆ど全體の者が、自分等の上に来つ、あつた最期には氣が付かずに、自分等が見て居た——今は、最早何でも無い——神聖な場所に坐つたまゝで、死んで了まつたのだ。彼等からは、死と腐敗の嗅氣が出て来る。

が、そのうちに二三匹は、それでも未だ動いて、まひあがり、懶氣に飛んで、敵の手にとまるのだが、最早整す元氣は無い、で、その餘の者は、悉皆死んで居て、魚の鱗のやうに容易く

拂ひ落せるのだ。

養蜂者は、隔板を閉め、巣箱の上へ白蠟で印を付け、そして、都合の好い時機を見て、それを破して、焼いて了まう。

さういふ風に莫斯科は空虚であつた、が、ナポレオンの方は、退屈して、不安で、そして、顔を顰めて、カメルコレジスキイ城壁の所を、彼方此方と歩きながら、單に外形的なものであるのだが、それでも彼の心には切要なものだと思はれた儀式を守ること——即ち、代表者の來ること——を待つて居た。

僅かの幾人かの人々が、未だ、自分等の爲て居ることは何ういふことなのか解らずに、何の目的も無く、自分等の往時からの習慣に従つて、莫斯科の二三の隅では、動いて居た。

相當な用心で以て、ナポレオンに、莫斯科が空虚であることを、知らせるといふと、ナポレオンは憤然となつて、その知らせた者を見、その者に背部を向けて了まつて、黙つて、彼方此方と歩き續けた。

『俺の馬車』と、彼は云つた。彼は、馬車の裡で、當番の侍從武官の傍に坐つて、外町へと馬車を進めた。

『莫斯科が空虚とは。何といふ信じ難い事であらう』と、彼は自分自身に向つて云つた。彼は、直ぐ市へとは、馬車を進め無かつた。彼は、ドロゴミロフ郊外の旅舎で、一夜を明した。

演劇が、りの光景は到頭起ら無かつた。

(三十一)

露西亞の軍隊は、その前の夜の二時からその日の午後二時までの間、莫斯科を横断りつゝ、あつて、最後の退去する住民等や、負傷兵等を一緒に連れて行くのであつた。

一番甚い混雑がカアメンニイ橋と、モスクヴオリエツキイ橋と、ヤウズスキイ橋で、起つた。内廓の邊で二手に分れた軍隊が、モスクヴオリエツキイ及びカアメンニイの兩橋へと群がり進んで居るうちに、非常な多数の兵卒が、行方が塞がつて、隊が止まつて居るのに附け込んで、後へ引つ返し、ヴァシイリ・ブラゼエンニイ寺の側を、密かに通り、ポロヴィツキイ門の下を、コンと抜けて、クラスナアヤ・プロシチャードへと、坂路を上つて行つた、それは、其所へ行けば、他人の財産を容易く奪つて來られるのだと、各自虫が知らせて居たからであつた。

グロムティニイ・ヅヴォール——莫斯科の大市場——有らゆる通、有らゆる横町が、何時もの買ひに集まる人々と同様な群集で一杯であつた。が、最早、其所には、店番の、愛嬌のある、客を引寄せる聲も、呼賣人も、買手の、混み合ふ、女の群も無かつた——何處も彼處も、黙つて、掠奪物をウンと持つて、去つたり、空手で入つて來たりする、銃を持つて居無い兵卒の制服や、外套ばかりであつた。

商人や、店番（それは幾人も居無かつた）は、兵卒等の間を歩き廻りながら、氣が觸れた人のやうな態で、各自の店を開けたり、閉めたりし、そして、各自の手傳ひ人に手を貸して、商品運び去つて居た。

市場の前の廣小路では、幾人かの鼓手が人員點呼を鼓つて居た。が、太鼓の音は、従前のやうに、兵卒等を點呼に駆け付けさせは爲すに、反つて、その反對に、太鼓から遠方へ駆け去らせるのであつた。

店や、通りに居る兵卒等の間に、鼠色の外套を着た、剃つた囚徒の頭の、者どもが見えた。將校が二人、一人は制服の上に飾襟を着けて、瘡けた黒馬に乗つたのと、今一人は、軍服の外套を着て、徒歩で居るのが、イリーシカノ角に立つて、話して居た。又一人の將校が、そ

の二人の所へ、馬を飛ばして來た。

「將軍から、奴等を直ぐ悉皆追ひ拂へといふご命令です。いや、これは實に怪しからん。兵の半數が逃げて了まつたです」

「こら、貴様等も逃げるのか？……貴様等の仲間は何處へ行つたか？……」と、その將校は彼の傍を、銃を持たずに、外套の裾を掛けながら、市場へと駆けて行く三人の歩兵に、怒號つた。「止まれ、悪黨ども」

「え、ねえ、君、何うして奴等を抑へて置けるものかね？」と、今一人の將校が答へた。「奴等を集めやうは全く無いよ、吾々は、今残つてる奴等が逃げる間の無いやうに、ドン／＼前進するより外は無いよ、最早唯だその方法一つなんだ」

「何うして前進が能きかい？。衆皆橋が塞がつて居るんで、立つて居るんだ、動いて居るんちやア無いせ。他の奴等の逃げ無いやうに番兵を置いたら何うかなア？」

「いや、まア來いよ。奴等を追つ拂へ」と、主任將校が怒號つた。飾襟を着けて居る將校は、馬を下り、鼓手を呼んで、それを伴つて、覆街へ入つた。一團になつて居た五六人の兵卒が飛んで逃げた。徐かに何處までも利を追ひ行くことの表情を顔に帶

びた、頬部や、鼻の周圍に、疵を受けて居る商人が、手真似を爲ながら、その將校の傍へと、急いで、トットとやつて来た。

「旦那」と、彼は云つて、「何卒、保護なすつて下さいまし。私どもは、吝嗇のではありません——一寸とした物でしたら、今は……結構なんです。何卒、旦那、お入りください、私は直ぐ布を持つて参ります——旦那方には、二反だつても——結構なんです、喜んでさし上ます。今の有様は解つて居りますんですから、ですが、こりやア全くの強奪といふものです。何卒、旦那、番兵か、何かお置きなすつて、責めて、私どもに店を閉めさすだけはさして下さいます……」

五六人の店主が將校の周圍に群れて来た。

「え、泣いたつて、何の役に立つんだ」と、そのうちの一人、瘠せた男が、恐い顔で云つた、「首を切られる時に、髪のため泣く奴は無いせ。誰でも欲だけ持つてけ」。で、腕の力強い振り方を爲て、その男は、將校に背を向けた。

「口だけちやア何とでも云へらアな、イヴァアン・シドリイチ」と、最初の店主が、腹立たしさうに、云ひ始めた。「何卒、旦那」

「何と云つたつて、最早駄目だい」と、瘠せた男が、怒號つて、「此所の俺の三軒の店には、十萬だけ商品があるんだ。軍隊が去つて了まやア、何うしたつて、守れつこはありやアし無えや。あ、仲間たち、神様の御意は人間には何うすることも能きやアし無え」

「何卒、旦那」と、最初の店主は、云つて、點頭を爲た。

將校は、不確定の能で立つて居た、そして、彼の顔は不決定を表はして居た「いや、其様なことは、俺の知つたことちやア無い」と、彼は不意に叫んだ、そして、彼は、覆街を歩速にツンツン進んだ。

一つの開いた店の裡で、彼は、殿ぐる音と、烈しい言辭とを聞いた、で、彼が裡へ入らうとする丁度その途端に、鼠色の外套を着た、剃つた頭の男が、戸の外へ、烈しく突き出された。

その男は、身體を低く折り曲げて、店主等や、將校の傍を、跳んで去つて了まつた。將校は、店の内に居た兵卒等へ跳びかゝつた。が、それと同時に、非常な群集から來る恐ろしい叫喚が、モスクヴォリエツキイ橋の附近で、聞えた、で、將校は廣小路へと駆け出た。

「何だ？ 何だ？」と、彼は尋いた、が、彼の同僚は、最早叫喚の方角へ駆け去つて居た。將校は馬に乗つて、その後を追つた。橋に近くなるといふと、彼は、砲車から下された二門の

砲と、橋を進み渡つて居る歩兵と、二つ三つの破れた荷馬車と、それから、或者は怖れた顔を爲、或者は笑つた顔を爲て居る、幾人かの兵卒を見た。

砲の附近に、二頭の馬を附けた荷馬車が、一輛立つて居た。車輪の後には、頸輪を掛けた四匹の獵犬がゴチャ／＼と踞まつて居た。荷物が山のやうに、荷馬車の内に積みあげられて居て、その極く頂邊に、脚を上へ向けて置いてある小兒椅子の傍に、一人の女が坐つて居たが、それが、絶望した金切り聲の叫喚を出して居た。

その將校が同僚たちから聞いたのでは、群集の叫喚や、女の金切り聲は、將軍エルモオロフが、群集の裡へ騎り込んで来て、兵卒等が、商店へさまよひ去りつゝあり、橋は市民の群集の爲めに塞がれて居るといふことを、知つて、砲車から砲を下ろして、橋に居る者どもを砲撃するやうな態を見せるやうに、命令した爲めだ、といふのであつた。群集は大混亂を起した、荷馬車を覆倒へし、相互に踏み倒し合ひ、烈しく叫んだ、そして、橋の上は、開いて了まつて、軍隊が通りだした。

(三十三)

市そのものもそれと同時に人が居なくなつて了まつた。街々には、殆ど人つこ一人居無かつた。門も、店も、残らず閉まつて居た、彼方此方、居酒屋の附近で、唯だ一つの叫聲か、酔拂つた謠聲が聞えるばかりであつた。誰も街を馬車で行く者が無く、聲音も極く稀に聞えるのみであつた。

ボヴァルスキイ街は、全く静で、人が居無かつた。ロストオフ家の廣々とした庭には、藁の五六束や、去つて了まつた荷馬車からの汚物が、散らばつて居るのみで、一人の人も見え無かつた。

その富を、其儘にして捨てられたロストオフ家では、客室に人が二人居た。それは、門番のイグナツトと、小さい給仕のミシカであつた、ミシカは、ヴァシリイチの孫で、祖父と共に莫斯科に居残つて居るのであつた。ミシカは、翼琴を開けた、そして、一本の指でそれを叩いて居た。門番は、手を腰に當て、腕を張り、顔にはさも面白さうな微笑を浮べて、大きい鏡の前に立つて居た。

「好いね、え、イグナツト伯父さん？」と、少童は云つて、一遍に兩手で、樂鍵をドシンドシン叩き始めた。

「うん、うん」と、イグナットは、答へて、鏡の裡で自分のホヤ／＼微笑んで居る顔を賞でて居た。

「呆れ返つた人たちだね。呆れ返るよ、眞個に」と、二人は、自分たちの後で、マアヅラ・クズミイニシナの聲を聞いた。クズミイニシナは、竊然と入つて来たのであつた。「お盆に目鼻のやうな顔を、鏡に寫して嬉しがつてるんだね、お前は。お前たちは此様なことを爲て居るんだね。さア、彼方が未だ全然片付いて居るんぢやア無いよ、ヴァシリイチは最早倒れ無いばかりに、疲れ切つてるんだよ。お前たち少しお待ち」

イグナットは、帯を眞直に直し、微笑を止めて、温順しく伏目になつて、部屋を歩み出た。

「伯母さん、私唯だ一寸と觸つて居ただけなんだよ……」と、男の子は、云つた。

「一寸とでも觸つてご覧、承知し無いから。悪戯小僧め」と、マアヅラ・クズミイニシナは、男の子に向けて手を振りながら、叫んだ。「行つて、祖父さんの沸茶器をおこしらへ」

塵埃を拂ひ落して、クズミイニシナは、翼琴を閉めて、深い溜息を爲ながら、客室を出て、そして、戸を閉めた。

庭へ出て行くと、マアヅラ・クズミイニシナは、何處へ行つたものだらうか、雇人部屋でヴァ

シリイチと茶を飲んだものだらうか、それとも、未だ藏ひ残りになつて居る物を仕末しに、貯藏部屋へ行つたものだらうかと、考へ込んだ。

静な街で、速い足音が爲た。足音は、門で止まつた、誰か開けやうとするので、鎖が鳴つた。

マアヅラ・クズミイニシナは、小さい門へ行つた。

「誰にご用ですね？」

「伯爵に、伯爵イリヤ・アンドレーイチ・ロストオフに」

「でも、貴下は誰様ですか？」

「私は將校だ。伯爵にお目にかゝり度いんだ」と、物柔な聲、露西亞の紳士の聲が、云つた。

マアヅラ・クズミイニシナは門を開けた。と、庭へ、圓顔の將校、十八位の青年が入つて来たが、その顔の型が非常にロストオフ家の顔に似て居た。

「皆様お發ちの後です、貴下。昨日、晩方皆様お發足になりました」と、マアヅラ・クズミイニシナは、親し氣に云つた。

入らうか、入るまいかと、躊躇つて居るかのやうに、門路に立つて居た若い將校は、豫期の

外れたことを表す舌打を爲た。

「あゝ、困つたな」と、彼は云つた。「昨日来りやア……あゝ、残念なことを爲た……」その間、マアヅラ・クズミイニシナは、若者の顔に表はれて居るロストオファ家の見慣れた目鼻だちや、襦袢になつて居る外套や、穿いて居る踵の摩耗つた靴を、凝乎と、同情的に見て居た。「伯爵にお逢ひなさり度いと仰しやるのは、何ういふご用なんですか？」と、クズミイニシナは、尋いた。

「いや……最早何うなるものかい」と、將校は、焦れ込んだ聲で、叫んだ、そして、去かうと爲るかのやうに、門を捉へた。彼は、再、不確定の態で、立ち止まつた。

「ねえ」と、彼は不意に云つて、「私は、伯爵の血族なんだ、伯爵は何時も私に極く親切に爲てくださったんだよ。で、ね」彼は、さも可笑しさうな、機嫌の好い笑顔で、自分の外套と靴を見た。「私は襦袢を着て居るんだ、それに、一文も無いんだ、だから、伯爵に願つて……」マアヅラ・クズミイニシナは、若者に言語を終らせ無かつた。

「少時待つてくださいませ、貴下。唯つた一分」と、クズミイニシナは云つた。で、將校が門を放すや否や、マアヅラ・クズミイニシナは、老人の速い歩調で、裏庭から、自分の部室へ

と、急いだ。

クズミイニシナが、自分の部室まで駆けて居る間、將校は、頭を垂頭れ、微弱な微笑を浮かべて、自分のポロ／＼になつた靴を見詰めながら、庭を、彼方此方と歩いて居た。

「伯父さんに逢へ無かつたのは、實に残念だな。何といふ善い老女なんだらう。何處へ駆けてつたのか知らず。聯隊は最早今頃はロゴズスキイへ行つてるんだらうが、それに追ひ付く捷路が見付かるだらうか知らず？」と、若い將校は、その間、考へ込んで居た。

マアヅラ・クズミイニシナは、オヅ／＼しては居たが、同時に、斷乎とした顔付で、手に市松模様の手巾の包を提げて、角を廻つて來た。將校から二三歩の所へ來ると、マアヅラ・クズミイニシナは、その手巾を開けて、その裡から白い二十五留札を出した、そして、それを急いで將校に渡した。

「閣下が、お宅でしたら、必定、お血族だけの事はなさいましたでせうけども、何にしろ、斯ういふ場合……ね、何うにか……」マアヅラ・クズミイニシナは、耻かしさと、ドキマギとに、打ち勝たれて了まつた。が、將校は、少しも急がず、又少しの遠慮も無く、札を受けた、そして、マアヅラ・クズミイニシナに禮を云つた。

「伯爵さへお宅でしたら」と、マアヅラ・クズミイニシナは、詫びるとでも云ひさうに、呟いた。「ご機嫌克う。お健康で」と、云つて、點頭を爲て、將校を送り出した。

將校は、自分自身を笑ふかのやうに、微笑んで、頭を振つて、ヤウズスキイ橋で自分の聯隊へ追ひ付かうと、人の居無い街々を、殆ど一跨ぎにしさうな勢で、駆けて去つて了まつた。

が、少時は、マアヅラ・クズミイニシナは、閉まつた門の前で、眼を曇ませて、立つて居て、悲しさうに頭を振り、そして、誰とも知れぬ青年の將校に對して母親のやうな優情と憐愍が不意に胸元へ突つけて來るのを感じた。

(二十三)

下の方に居酒屋のある、ヴァルヴァールカの未成の家の裡で、酔拂つた怒號り聲や、歌聲が聞えて居た。十人程の工場職工が、小さい、汚い部室の裡で、腰架に掛けて、食卓に就て居た。酔拂つて、汗をかいて、チラつく眼で、酒で膨れて、廣く口を開いて、彼等は、何か歌を謡つて居た。彼等は、態々な、骨の折れる風で、調子の揃は無い謠ひ方を爲て居た、それといふのは、彼等は、謠ひ度かつたのでは無くして、唯だ、自分等が酔拂つて、愉快であることを、見

せ度ばかりで、あつたからなのだ。

そのうちの一人、背の高い、亚麻色の頭の、清潔な淺黄の長い外套を着た奴が、他の者どもの上へ被さるやうに、立つて居た。真直な、好い鼻のあるその顔は、厚い、詰と結んだ、何時もビク／＼して居る唇と、艶の無い、見詰める、睨んで居る眼さへ無かつたら、美しくかつたらう。彼は、謠つて居る者どもの上へ被さるやうに、立つて居た、そして、確に頭腦の裡に何か考慮を持つて居るらしい態で、謠つて居る者ども頭のうで、裸の白い腕を、嚴肅に、角度を描いて、振つて居ると共に、自分の汚れた指の間をばギョチなさうに廣げやうとして居た。彼の外套の袖は絶えず滑り下つて居た、で、若者は、特別の意義のある何物かが、その白い、筋ばつた、振られて居る腕の裸であることを要するのかのやうに、左の手で以つて、元の通り袖を丁寧にくし上げ／＼して居た。

歌の最中に、叫聲や、殴ぐる音が、廊下と入口で、聞えた。背の高い男は兩腕を振り廻した。

「黙れ」と、彼は、横柄に怒號つた。「喧嘩だ、若者たち」で、依然袖をたくし上げながら入口へと出て行つた。

職工等も彼に續いた。彼等はその朝工場から何枚かの皮を持って来て、居酒屋の亭主に遣つて、その禮に酒を貰つて、背の高い若者を先棒にして、飲んで居たのだ。所が、直き傍の鍛冶屋で爲事を爲て居た鍛冶等が、居酒屋での大飲の音を聞いて、誰かがその家へ暴れ込んで居るのだと想像して、自分たちも又推し掛けやうとしたのであつた。争鬨は入口で行はれて居た。居酒屋の亭主は、戸口で鍛冶と打ち合つて居た、そして、職工等が出て来たその途端に、鍛冶は、亭主から踰越して行つて、敷石の上へうつむけに倒れた。

今一人の鍛冶が、戸口から跳び込んで来て、亭主に胸を突き當て、踰越けた。袖をたくし上げて居た若者は、出て行きざまに、戸口から跳び込んで来て居た鍛冶の顔に一撃を與へて、烈しく叫んだ――

『若者たち、奴等は俺たちの仲間を殴ぐつてるぞ』

その間に、最初の鍛冶は、地から起き上つた、そして、疵の出来た顔から、血を激ねかしながら、泣き聲で叫んだ――

『助けて呉れ。奴等が俺を殺した……奴等は人を殺したぞ。仲間たち……』

『あら、大變だ、全然殺されちやつた、人が殺されちやつた』と、女がキヤア／＼云ひなが

ら、直ぐ隣の門から出て来た、人民の群集が血まぶれの鍛冶の周圍に集つた。

『貴様は、最早、幾人と無く裸體にして、散々人々を破滅させたぢやア無えか？』と、居酒屋の亭主に向つて、一つの聲が云つた『それなのに、此度は又、人を殺しやつた。悪黨め』昇降段に立つて居た背の高い若者は、執方と殴ぐり合つたものかと、思案中であるかのやうに、居酒屋の亭主から鍛冶等へと、爛れた眼を移して居た。

『兇殺者め』と、彼は、不意に、居酒屋の亭主に向つて叫んだ。『若者たち、此奴を縛れ』

『うむん、俺ほどの者を、縛れるなら、縛つて見ろ』と、居酒屋の亭主は怒號つて、彼へ跳び掛つた人々の手を振りもぎつて、帽子を脱いで、それを地板へ叩き付けた。その所作が、何か不思議な、恐しい意義を持つて居たかのやうに、亭主を取り圍いた職工等は、不決定の態で、静然と立つて居た。

『俺は法律は知つてる、仲間、極く善く、俺は知つてるんだ。警官の所へ行かア。俺が奴等を目付ることが能き無えと思ふのかい？。強盗は、誰だつて爲べきことぢやア無えんだい』と、居酒屋の亭主は怒號つて、帽子を拾ひあげた。

『行か無くつてよ、さア』……『俺だつて行か無くつてよ……さア』と、居酒屋の亭主と背

の高い男が、相互に繰り返した、そして、両方とも一緒に、街を前方へと動いた。血だらけの鍛冶も、二人と列んで歩いた。職工等や、その外の人々の群集が、話したり、叫んだりしながら、彼等に随って行つた。

マロセエーカの角で、窓扉の閉まつた、靴師の看板のある大きい家の向ふに、凡そ二十人ばかりの靴師、悄気込んだ顔の、ダブ／＼した戶外上衣と、破けた外套を着た、瘡せた、疲れ切つた態の人々の一團が立つて居た。

「彼奴は人にチャンと拂ひを爲るべきぢやア無えか」と、薄い髯の、睨み付けるやうな顔の、瘡せた靴職人が、云つた。「奴は俺たちから散々つばら生血を吸ひ取つときやアがつて、それで、お互つこだと吐かしやアがるんだ。野郎この週ちう約束はかして人を釣つときやアがつたんだ。で、今は最早動け無えやうな窮境に人を導れてつといて、そして、逃じつちまやアがつた」群集と、血だらけの鍛冶を見ると、その男は言語を止めた、靴師は皆な、物見高い熱心で、動いて行く群集に加はつた。

「この連中は何處へ行くんだい？」

「警察へ行くんだ、必定」

「我軍が敗けたつて、眞實かい？」

「おい、飛んだことを思つたものだ。この連中の云つてることを、聞いて見ろよ」種々の問や、答が、善く聞えた。居酒屋の亭主は、賤民の數が増したのに附け込んで、群集の後方へ退つて、自分の店へ歸つて行つた。

背の高い若者は、自分の敵の居酒屋の亭主が居無くなつたのには氣が付かずに、依然裸の腕を振り廻して、間斷無しに話を爲て、全體の人々の注意を引き付けて居た。群集は重に彼の周圍に推し寄せて、自分等全體の心を集中させて居た種々な疑問に對する何等かの解決を彼から聞かうと待ち受けて居た。

「取締るが宜い、制へ付けるが宜い、それが政府の役目なんだい。俺が云つてることア眞實だらう、善い教徒たち？」と、背の高い若者は、微弱に微笑みながら、云つた。

「政府が無いと思つてやがるのかなア？ 政府が無くつて行けるものかい。吾々の物を奪ふ奴は多勢あるぢや無えか、えへ？」

「愚劣なことを云へ」と、群集は呟いて居た。「おい、莫斯科が斯様な風に捨てとかれると思ふのかい。お前たちは、散々つばら擔がれたんだせ、それなのに、全然本當にしちやつたんだ。」

軍隊が十分あるぢやア無えか。大丈夫だ、奴」を入らせる氣遣ひは無えんだ。政府の爲事はそれなんだい。おい、衆皆が喋つてゐることを、聞きねえ」と、群集は云つて、背の高い男に指し爲た。

支那町の城壁の傍に、人民の小さい集團がも一つ、手に紙を持つて居る、粗羅紗の外套を着た男の周圍に寄つて居た。

「布告だ、布告を讀んでるんだ。布告を讀んでるんだせ」と、いふ聲が、群集の裡で聞えた、そして、大群集は、讀人の周圍へ波浪のやうに推し寄せた。

粗羅紗の外套の男は、八月三十一日の「揭示」を讀んで居た。群集が周圍に群れるといふと彼は顛倒したらしかつた、が、彼の傍へ推し掛けて行つた背の高い男の要求で、彼は、聲に微弱な戰慄を持つて、布告を再始から讀みだした。

「明日早朝、予は、公爵殿下の所へ行く」と、彼は讀んだ「殿下」と、背の高い若い男は、大得意な笑顔と、疊めた額で、繰り返した、「殿下と合議せて、行動し、軍隊を助けて悪黨どもを塵殺にするやうにする、吾々も亦、彼等を根こそぎ滅して了う……」と、讀人は、續け、そこで、止まつた「それ、何うだい」と、背の高い男は、勝誇つた態度で、怒號つた「彼の人は

災難を悉皆無くして呉れるんだ……」。

「吾々は客人等を引掛けて悪魔の所へ遣つて了まはう、予は、午食に歸つて来る、そして、吾々は、爲事に掛つて、悪黨どもを、やつ付け、全くやつ付け切つて了まうまで、やつて行かう」

さういふ最後の言辭は、全くの沈靜の最中に於て、讀人の口から出た。背の高い男の頭は、悄氣な態で、下がつた。確に、誰もさういふ最後の言辭が解つた者は無かつたらしかつた。殊に「予は午食に歸る」といふ言辭が、讀人にも、聽衆にも癩に觸つたらしかつた。群集の心的諸能力は、最高の度にまで緊張せしめられて居た、而るに、その言辭は、餘りに平易で、不必要に單純であつた、それは、全く誰でも云ふやうなものであつて、それが爲めに、高官から出る布告の裡には入れるべからざる言辭であつたのだ。

誰も彼も銷沈つた沈黙で立つて居た。背の高い男の唇が動いて、彼は踏んだ。

「彼奴に尋いて見ろよ」——「彼者が彼の人のぢやア無えか？」——「彼奴に尋いたら何うだ
い？」——「で無くも……」——「彼奴が云つて聞かして呉れるだらうせ」——さういふ言語が、不意に群集の後列で聞えた、で、全體の注意が、二人の乗馬の龍騎兵に護衛されて、廣小

路へ乗り込んで来た警務長の二輪馬車へと向いた。

その朝、伯爵ラストオブチンの命令で、川にある小舟を焼く爲めに、馬車で出て、その任務に對して、多額の金銭を受け取り、それをその時衣囊に入れて居た警務長は、自分の方へ推し寄せて来る群集を見て、止まるやうに馭者に命じた。

「何ういふ人間だ？」と、彼は、幾個もの群に別れて、オツ／＼と三輪馬車に近寄つて居た人民に向つて怒號つた。「この群集は何だ、おい？」と、警務長は、何の返答も受け無かつたので、繰り返した。

「貴下様」と、粗羅紗外套の男が云つて、「斯の者どもの願望は、各自の生命を惜みませずに伯爵閣下の御布告に従ひまして、國家に盡さうと申すのでございまして、決して暴亂を起したのではございません、閣下の仰せられました通り……」

「伯爵はお去りになつたのでは無い、此市においてなんぢや、そして、お前等に對して命令をお出しなさるんぢや」と、警務長は云つた。「出せ」と、彼は馭者に云つた。群集は、立ち止まつて、官吏が云つた事を聞いた人々の周圍に詰め掛けて、去らうとして居る二輪車を見て居た。警務長は、同時に、ギョツとして四邊を見た、そして、馭者に何か云つた、馬は速く駆け出した。

「欺まされたぞ、仲間たち。奴の所へ行かう」と、背の高い男の聲が怒號つた。「逃がすな、若者たち」——「復讐を爲てやれ」——「奴を捉まへろ」と、聲々が唳けつた、そして、群集は、全速力で二輪馬車を追つ掛けた。

群集は、騒がしく話しながら、ルウピヤンカまで警務長の二輪馬車を追つ掛けて行つた。

「おい、善い衆だの、商人たちは、悉皆去つちまつて、俺たちばかり、捨て殺しにされるんだい。俺たちは犬なのかい、おい？」と、いふのが、群集の裡でだん／＼度々聞えた。

(三十四)

九月一日の夕方に、伯爵ラストオブチンは、戦略會議に招かれ無かつたことや、クツウヅフが、伯爵が市の防衛に加はらうと申し出たのを更に顧みも爲無かつた事が、癢に觸つて、厭な心持が爲、それから、陣營で彼が始めて氣が付いた意外な事態の觀方——即ち、市の安寧とか、その愛國的熱心とかいふやうなものは、全々無關係な、下らぬことと見られるのでは無いにしても、右に左、第二位の重要な事柄と見做されて居ること——に驚ろかされて、クツウヅフとの會見から歸つて来た。總てさういふことに、心痛し、癢に觸り、そして、驚いて、

伯爵ラストオブチンは莫斯科へ歸つて来て居た。

晩食の後で、彼は、衣服を脱がずに、長椅子の上に横臥になつた、そして、一時になると、クツツゾフからの手紙を彼の所へ持つて来た使者の爲めに、起された。その手紙は、軍隊は莫斯科の彼方のリヤザン海道へ退却するのだから、軍隊を案内して町を通らす爲めに、警察官をよこして呉れと、伯爵に頼んで来て居た。

その手紙は、ラストオブチンに何等の新聞をも告げたのでは無かつた。彼は、莫斯科が放棄されるだらうといふことは、彼が前日ボクロンナヤ丘でクツツゾフと會見してから以來のみならず、そのずっと前のボロディノの戦以來、知つて居たのであつた、即ち、その戦以來莫斯科へ来た將官は、誰も彼も、皆な一齊に、最早その上の戦は不可能だと、確言し、そして、ラストオブチンの決裁の下に、政府の財産は毎夜他へ移され、住民の半数が去つてしまつたのであつたのだ。が、それはさうでも、今その事實が、クツツゾフからの命令で、簡単な文書の形で通牒され、而も、それが、彼の最初の睡眠を驚かして、夜着して見るといふと、それが、總督を驚かし、且苛焦させたことは夥だしかつた。

後年になつて、伯爵ラストオブチンは、この時分の彼の行動を説明するやうな風で、その時

分の彼の二大目的は、莫斯科の安寧を維持するのと、住民をして其所から出て行かすのに、在つたのだと、彼の覺書の中に幾度も書いた。

が、若し、この二重の目的があつたものと承認されれば、ラストオブチンの有らゆる行爲は全く批點の無いものだと見えるのだ。何故、聖遺物や、武器や、彈丸や、彈藥や、麵麩の貯蓄が、他へ持つて行かれたのか？。何故、何千とも知れぬ住民が、莫斯科は放棄さるゝことは無いと欺されて、それを信じさせられて居て、それが爲めに、破滅に陥つたのか？。

『市の静謐を維持せんが爲め』と、伯爵ラストオブチンの説明は答へるのだ。

何故、諸官衙の不用な書類の積層や、レビッチの輕氣球や、其他の物品が、持ち去られたのか？。『町を空にする爲め』と、伯爵ラストオブチンの説明は答へるのだ。

人にして一たび公衆の静謐を危くしさうなものがあることを承認しさえすれば、何様な行爲でも道理なものになつて了まうのだ。

威赫主義の一切の恐さは、公衆の静謐の爲めに心配すればこそなのだ。

伯爵ラストオブチンが千八百二十二年に莫斯科で民衆の動亂が起るのを恐れるべき根據が何處にあつたのか？。その市に於て革命が起るといふ豫防を爲無ければならぬ理由が何處にあつた